

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書20

板屋Ⅲ遺跡(2)

—縄文時代～近世の複合遺跡の調査—

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書20

板屋Ⅲ遺跡(2)

—縄文時代～近世の複合遺跡の調査—

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として、神戸川の上流に平成22年度完成目標に志津見ダムの建設事業を進めています。

このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積約2.3km²もの貯水池ができることになりますが、ダムによる水没予定地内には多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、鳥根県教育委員会をはじめ関係各位の御協力を頂き、これらの遺跡についての調査を計画的に実施して参りました。おかげさまで、平成13年度の現地調査をもって本予定地内全ての現地調査を無事終了することができました。

当報告書は、このうち板屋Ⅲ遺跡の調査結果をとりまとめて頂いたものです。当遺跡からは、縄文時代の遺物や弥生時代の住居跡、近世の鍛冶炉跡など、当時の人々の暮らしを知る上で貴重な資料が得られたのではないかと思います。当遺跡のある場所は、ダム完成後には湖底に沈むため、ダム事業を契機に得ることのできた数々の貴重な資料を、後世に正確に残すことこそが我々の務めであり、この報告書はその成果ともいえるものです。

最後になりましたが、分布調査を入れ15年の長期に及ぶ調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に、深く感謝申し上げます。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 田中 靖

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成元年度から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりましたが、平成13年度には現地での調査対象遺跡すべての調査を終え、ここに報告書を刊行する運びとなりました。

志津見ダムが建設される神戸川は、中国山地に源を発し、日本海に向け北流することから、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を担っていました。また、神戸川の西に聳える三瓶山は、約10万年前から噴火を繰り返してきた火山で、これまで調査してきた遺跡からも火山灰が厚く降り積った様子が確認されています。そして、その火山灰の下からは縄文時代の遺物等が多く見つかっており、当時の人々の暮らしと深く関わりのあった火山であったことを窺い知ることができます。

本報告書は、平成13年度に実施した板屋Ⅲ遺跡の発掘成果をまとめたものです。板屋Ⅲ遺跡は平成6年度から平成8年度にかけて一度調査が行われており、多様な遺構・遺物などが検出され、縄文時代草創期末から江戸時代頃まで続く複合遺跡であることが判明していましたが、今回の調査でも弥生時代の住居跡などが確認され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。本書が郷土の歴史や文化財に対する理解・関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、長年にわたる発掘調査及び本書の作成について、御指導・御協力を賜りました地元の皆様方をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、頓原町教育委員会ならびに関係の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢卓嗣

例　　言

- 本書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて平成13年度に実施した志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 本書に掲載した遺跡と地番は下記のとおりである。
板屋Ⅲ遺跡　島根県飯石郡頃原町大字志津見330番地外
- 平成13年度の現地調査と14年度の報告書作成作業は、下記の組織で実施した。
調査主体　島根県教育委員会

平成13年度

- 事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）
川原和人（同調査第2課長）、今岡　宏（同総務係長）、萩　雅人（同調査第6係長）
調査員　原田敏照（同文化財保護主事）、糸　龍爾（同教諭兼文化財保護主事）
舟木千晴（同臨時職員）
調査指導　穴沢義功（たらら研究会委員）、高橋　護（ノートルダム清心女子大学教授）、
田中義昭（島根県文化財保護審議委員）

平成14年度

- 事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）
内田　融（同総務課長）、川原和人（同調査第2課長）、坂本淑子（同総務係長）
萩　雅人（同主幹調査第6係長）
調査員　原田敏照（同文化財保護主事）、糸　龍爾（同教諭兼文化財保護主事）
舟木千晴（同臨時職員）
調査指導　穴沢義功（たらら研究会委員）、田中義昭（島根県文化財保護審議委員）
中村唯史（三瓶自然館指導員）

- 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については国土交通省・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

〔現場事務所長〕　布村幹夫　〔技術員〕　永原正寛　〔現場担当〕　大野紀昭

〔事務担当〕　藤原愛子

〔発掘現場作業員〕　中原勝隆、梅川カズコ、毛利勝了、立脇重富、後長　毅、後長寿馬子、後長安雄、景山栄子、川上友子、笛田　宗、安部政清、信藤照子、加瀬部守年、景山敏二、三原明子、神田恵美子、花山千代子、田部喜久枝、山根幸恵、樋口紀子、金子博明、木村英治、片岡勇、一嶋智恵子、那須俊子、那須マサキ、三浦弥生、三浦サツエ、三浦ヨネ子、桐原トコ、水井ヒサエ、那須洋二、三原富子、細貝富夫、吉山和男、吉田雪了、月輪富子、小林昭紀、別所和夫、別所みち代、別所秀幸、奥野義一、松原和夫、川上照夫、川上フジエ

- 出土遺物等の整理作業（水洗・注記・接合等）は以下の者が従事した。

平成13年度　天津文子、來海順子、三浦登久子、山下千都子、川上友子、笛田　宗、景山栄子

- 平成14年度 泉 由美子、難波夏枝、木谷久美子、矢内敏江、金坂恵美子、田中路子
- 6 現地調査及び資料整理に際しては、以下の方々から有意義な御指導・御助言・御協力をいたいた。記して感謝の意を表します。
- 川瀬正利（広島大学文学部教授）、澤山順弘（島根大学総合理工学部教授）、山田康弘（鳥根大學法文学部助教授）、寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）、山崎順子・田中迪亮（頃原町教育委員会）
- 7 挿図中の北は測量法による第3座標系X軸方向を示し、平面直角座標系XY座標は、日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。
- 8 第1図は、国土地理院発行のものを使用した。また、遺跡空中写真撮影・基準点作成に関しては別途業者に依頼した。
- 9 本書に掲載した写真は、図版1・2を除いてすべて調査員が内業作業員の協力を得て撮影した。
- 10 本書に掲載した実測図は調査員のほか、泉 由美子、木谷久美子、金坂恵美子、難波夏枝、矢内敏江、田中路子（以上内業作業員）が作成し、内業作業員が添書した。
- 11 本書の執筆は、第7章 自然科学的分析を除き調査員が分担して行った。文責は日次に明示した。
- また自然科学的分析結果（第7章）については、安来市和銅博物館（村川義行氏）、高橋護氏（ノートルダム女子大学）、文化財調査コンサルタント（波辺正巳氏）、杉山真二氏（古環境研究所）、加速器分析研究所に執筆を依頼した。
- 12 本書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て調査員が行った。
- 13 本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	（积）	1
第2節 調査の経過		1

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	（积）	4
第2節 歴史的環境		5

第3章 調査の概要と方法

第1節 板屋遺跡のこれまでの調査	（原田）	10
第2節 調査区の配置		12
第3節 遺跡の層序と調査した遺構面		12
第4節 調査の概要		13
第5節 調査方法		15

第4章 東側調査区の調査結果

第1節 調査の概要	（原田）	16
第2節 第2黒色土層の調査		16
1. 縄文時代の土坑		17
2. 第2黒色土層出土遺物		20
第3節 第1黒色土層の調査		21
1. 上坑		21
(1) 近世以前の土坑		21
(2) 近世以降の土坑		27
2. 溝状遺構		31
3. 祭祀遺構		35
4. 第1黒色土層出土遺物		37
(1) 宝鏡印塔片		37
(2) 石器		37
(3) 鉄器片		37
第4節 小結		38

第5章 西側調査区の調査結果

第1節 概要	（原田）	40
第2節 第4黒色土層の調査		41

第3節 第3黒色土層の調査（縄文時代）	42
1. 石遺構	43
2. 土坑	44
3. 第3黒色土層出土遺物	45
第4節 第2黒色土層の調査（縄文時代）	54
1. 土坑	54
2. 第2黒色土層出土遺物	58
第5節 第1黒色土層の調査（縄文時代～近世）	62
1. 壓穴住居跡	62
2. 土坑	91
3. 第1黒色土層出土遺物	94
(1) 縄文上器	94
(2) 弥生土器	96
(3) 土師器	103
(4) 須恵器	104
(5) 中世以降の陶磁器・土師器	106
(6) 石器	107
(7) 金屬製品	109
(8) 銭貨	111
4. 製鉄関連遺構と遺物	112
(1) 挖立柱建物跡	112
(2) 製鉄関連遺物	114

第6章 まとめ

第1節 第3黒色土層の調査成果	(原山) 128
第2節 第2黒色土層の調査成果	130
第3節 第1黒色土層の調査成果	132
第4節 縄文時代の調査成果について	134
第5節 弥生時代の調査成果について	138
第6節 製鉄関連遺構と遺物について	142

(出土遺物総括表 出土遺物観察表 出土遺物計測表 製鉄関連遺物観察表)

第7章 自然化学分析

第1節 板屋Ⅲ遺跡の製鉄関連遺物の分析調査（村川義行）	209
第2節 板屋Ⅲ遺跡におけるプラントオパール分析による栽培植物の検出結果とその考察（高橋謙）	223
第3節 板屋Ⅲ遺跡発掘調査における自然化学分析（渡辺正巳・杉山貞二）	245

第4節 板屋Ⅲ遺跡における植物珪酸体分析（杉山真二）	267
第5節 (1) 島根県、板屋Ⅲ遺跡における自然科学分析（株式会社古環境研究所）	277
(2) 放射性炭素年代測定結果報告書（株式会社加速器分析研究所）	279

写 真 図 版
報 告 書 抄 錄

挿 図 目 次

第1図	板屋Ⅲ遺跡の位置図 (S = 1/7,400,000、1/1,000,000)	4
第2図	板屋Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 (S = 1/50,000)	6
第3図	板屋Ⅲ遺跡調査区配置図 (S = 1/2,000)	11
第4図	板屋Ⅲ遺跡土層模式図・遺構面の位置関係 (S = 1/60、1/2,000)	12
第5図	調査用グリッド設定図 (S = 1/1,000)	14
第6図	東側調査区第2ハイカ層上面先掘状況図 (S = 1/200)	16
第7図	東区SK03実測図 (S = 1/20、1/4)	17
第8図	東区SK19実測図 (S = 1/20)	18
第9図	東区SK20実測図 (S = 1/20)	18
第10図	東区SK21実測図 (S = 1/20)	18
第11図	東区SK22実測図 (S = 1/20)	19
第12図	東区SK23実測図 (S = 1/20)	19
第13図	東区第2黒色土層及びSK03出土縄文上器実測図 (S = 1/3)	20
第14図	東側調査区第1ハイカ層上面全体図 (S = 1/300)	21
第15図	東区SK06実測図 (S = 1/20)	22
第16図	東区SK01実測図 (S = 1/20)	22
第17図	東区SK02実測図 (S = 1/20)	23
第18図	東区SK05実測図 (S = 1/20)	24
第19図	東区SK08実測図 (S = 1/20)	24
第20図	東区SK11実測図 (S = 1/20)	25
第21図	東区SK14実測図 (S = 1/20)	25
第22図	東区SK13実測図 (S = 1/20)	26
第23図	東区SK04実測図 (S = 1/20)	27
第24図	東区SK10実測図 (S = 1/20)	28
第25図	東区SK07実測図 (S = 1/20)	28
第26図	東区SK17実測図 (S = 1/20)	29
第27図	東区SK09実測図 (S = 1/20)	29
第28図	東区SK12実測図 (S = 1/20)	30
第29図	東区SK15実測図 (S = 1/20)	31
第30図	東区SK16実測図 (S = 1/20、1/2)	32
第31図	東区SK16出土鉄釘 (S = 1/2)	33
第32図	東区SK18実測図 (S = 1/20)	33
第33図	東区SD01実測図 (S = 1/20)	34
第34図	東区SX01平面図及び出土状況実測図 (S = 1/60、1/8)	35
第35図	東区SX01出土鉄器〈鉄滓〉(S = 1/3)	36
第36図	東区SX01周辺出土錢貨拓本 (S = 1/1)	36
第37図	東区宝鏡印塔実測図 (S = 1/4)	37
第38図	東区出土石器・土師器・陶磁器・鉄器実測図 (S = 1/3)	37
第39図	山森地方出土銅鏡実測図 (S = 1/8)	38
第40図	西側調査区一次溝査 (第2地点調査区西壁) 土層 (S = 1/120)	40
第41図	西側調査区第4黒色土層全体図 (S = 1/300)	41
第42図	西側調査区第3黒色土層全体図 (S = 1/300、1/12)	42
第43図	西区集石遺構実測図 (S = 1/10)	43
第44図	西区集石遺構出土遺物実測図 (1~4はS = 1/3、5はS = 2/3)	44

第45図	西区SK01~05、Pt05実測図 (S=1/30)	44
第46図	西区第3黒色土層出土繩文土器 (1) 実測図 (S=1/3)	46
第47図	西区第3黒色土層出土繩文土器 (2) 実測図 (S=1/3)	47
第48図	西区第3黒色土層出土繩文土器 (3) 実測図 (S=1/3)	48
第49図	西区第3黒色土層出土繩文土器 (4) 実測図 (S=1/3)	49
第50図	西区第3黒色土層出土石器 (1) 実測図 (1~6はS=2/3、7~15はS=1/3)	51
第51図	西区第3黒色土層出土石器 (2) 石鍬実測図 (S=1/3)	52
第52図	西区第3黒色土層出土石器 (3) 台石・石皿類実測図 (S=1/6)	53
第53図	西側調査区第2黒色土層全体図 (S=1/300)	54
第54図	西区SK05実測図 (S=1/20)	55
第55図	西区SK05出土遺物実測図 (1~12はS=1/3、13~14はS=2/3)	56
第56図	西区SK06実測図 (S=1/20)	57
第57図	西区SL01~SL04実測図 (S=1/30)	57
第58図	西区第2黒色土層出土繩文土器 (1) 実測図 (S=1/3)	59
第59図	西区第2黒色土層出土繩文土器 (2) 実測図 (S=1/3)	60
第60図	西区第2黒色土層出土石器実測図 (S=1/3)	61
第61図	西側調査区第1黒色土層全体図 (S=1/300)	62
第62図	西区SI01実測図 (S=1/60)	63
第63図	西区SI01出土遺物 (3) 実測図 (S=1/2)	64
第64図	西区SI01遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	64
第65図	・次調査 (調査区西端) 出土弥生土器実測図 (S=1/3、1/6)	65
第66図	西区SI01出土遺物 (1) 実測図 (S=1/3)	66
第67図	西区SI01出土遺物 (2) 実測図 (S=1/3)	67
第68図	西区SI02及び出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	68
第69図	西区SI02出土遺物実測図 (S=1/3)	69
第70図	西区SI03及び土器満り出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	70
第71図	西区SI03遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	71
第72図	西区SI03出土遺物 (1) 実測図 (1~11はS=1/3、12はS=2/3)	72
第73図	西区SI03出土遺物 (2) 実測図 (S=1/3)	73
第74図	西区SI03土器棺墓出土弥生土器・棒状石材実測図 (1~4はS=1/3、5は1/6)	74
第75図	西区SI03中央大坑遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6、1/12)	75
第76図	西区SI03中央大坑出土遺物実測図 (S=1/3)	76
第77図	西区SI03・中央土坑出土上石器・鉄器実測図 (1はS=1/4、2~4はS=1/2)	77
第78図	西区SI04及び出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	77
第79図	西区SI04出土遺物実測図 (S=1/3)	78
第80図	西区SI05・06・07全体図 (S=1/60)	78
第81図	西区SI05・07実測図 (S=1/60)	79
第82図	西区SI05・07遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	80
第83図	西区SI05出土遺物 (1) 実測図 (S=1/3)	81
第84図	西区SI05出土遺物 (2) 実測図 (S=1/3)	83
第85図	西区SI05出土遺物 (3) 実測図 (S=1/3)	84
第86図	西区SI06実測図 (S=1/60)	85
第87図	西区SI06遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6、1/12)	86
第88図	西区SI06出土遺物 (1) 実測図 (S=1/3)	86
第89図	西区SI06出土遺物 (2) 実測図 (1はS=1/4、2~3はS=1/2)	87
第90図	西区SI07出土遺物実測図 (S=1/3)	88
第91図	西区SI08実測図 (S=1/60)	89
第92図	西区SI08遺物出土状況実測図 (S=1/60、1/6)	89

第93図	西区 S I 0 8 出土遺物実測図 (1 ~ 12はS = 1 / 3、13はS = 1 / 2)	90
第94図	西区炭土坑実測図 (S = 1 / 20)	91
第95図	西区 S K 0 1 実測図 (S = 1 / 20)	92
第96図	西区 S K 0 2 実測図 (S = 1 / 20)	92
第97図	西区 S K 0 3 実測図 (S = 1 / 20)	93
第98図	西区 S K 0 4 実測図 (S = 1 / 20)	93
第99図	西区第1黒色土層出土繩文土器 (1) 実測図 (S = 1 / 3)	94
第100図	西区第1黒色土層出土繩文土器 (2) 実測図 (S = 1 / 3)	95
第101図	西区第1黒色土層出土弥生土器 (1) 実測図 (S = 1 / 3)	97
第102図	西区第1黒色土層出土弥生土器 (2) 実測図 (S = 1 / 3)	99
第103図	西区第1黒色土層出土弥生土器 (3) 実測図 (S = 1 / 3)	100
第104図	西区第1黒色土層出土弥生土器 (4) 実測図 (S = 1 / 3)	101
第105図	西区第1黒色土層出土弥生土器 (5) 実測図 (S = 1 / 3)	102
第106図	西区第1黒色土層出土土師器実測図 (S = 1 / 3)	103
第107図	西区第1黒色土層出土須恵器実測図 (S = 1 / 3)	104
第108図	西区第1黒色土層出土須恵器・斐庭実測図 (S = 1 / 3)	105
第109図	西区第1黒色土層出土陶壺実測図 (S = 1 / 3)	106
第110図	西区第1黒色土層出土石器 (1) 実測図 (S = 2 / 3)	107
第111図	西区第1黒色土層出土石器 (2) 実測図 (1 ~ 8、10 ~ 14はS = 1 / 3、9はS = 1 / 4、15 ~ 16はS = 2 / 3)	108
第112図	西区第1黒色土層出土鍛冶系鉄片実測図 (S = 1 / 2)	109
第113図	西区第1黒色土層出土金属器実測図 (S = 1 / 2)	110
第114図	西区第1黒色土層出土錢貨拓本 (S = 1 / 1)	111
第115図	西区東西ベルト上層闇〈11D ~ 11E〉 (S = 1 / 60)	112
第116図	西区掘立柱建物跡実測図 (S = 1 / 80)	113
第117図	板屋III遺跡製鐵闇遺物構成図1 (S = 1 / 6)	114
第118図	板屋III遺跡製鐵闇遺物構成図2 (S = 1 / 6)	115
第119図	板屋III遺跡製鐵闇遺物構成図3 (S = 1 / 6、1 / 3)	116
第120図	板屋III遺跡製鐵闇遺物構成図4 (S = 1 / 6)	117
第121図	西区製鉄闇遺物実測図1 (S = 1 / 3)	118
第122図	西区製鉄闇遺物実測図2 (S = 1 / 3)	119
第123図	西区製鉄闇遺物実測図3 (S = 1 / 3)	120
第124図	西区製鉄闇遺物実測図4 (S = 1 / 3)	121
第125図	西区製鉄闇遺物実測図5 (S = 1 / 3)	122
第126図	西区製鉄闇遺物実測図6 (S = 1 / 3)	123
第127図	西区製鉄闇遺物実測図7 (S = 1 / 3)	124
第128図	西区製鉄闇遺物実測図8 (S = 1 / 3)	125
第129図	西区製鉄闇遺物実測図9 (S = 1 / 3)	126
第130図	西区製鉄闇遺物実測図10 (S = 1 / 3 · 1 / 2)	127
第131図	第3黒色土層出土繩文土器一覧 (S = 1 / 4)	129
第132図	第2黒色土層出土繩文土器一覧 (S = 1 / 4)	131
第133図	第1黒色土層出土繩文土器一覧 (S = 1 / 4)	133
第134図	各類型の繩文土器の破片数	134
第135図	板屋III遺跡石器組成グラフ	137
第136図	第1ハイカ層検出遺構全体図 (S = 1 / 8,000)	139
第137図	板屋III遺跡出土の弥生後期の土器 (S = 1 / 6)	140
第138図	弥生土器の個体数	141
第139図	板屋III遺跡西側柵区出土土器片一覧	144

表 目 次

第1表 志津見ダム関連埋蔵文化財調査の歴史	2
第2表 神戸川中流域の遺跡一覧表（その1）	7
第3表 神戸川中流域の遺跡一覧表（その2）	8
第4表 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財関連文献一覧	9
第5表 板屋Ⅲ遺跡遺構面と検出された主な遺構	15
第6表 島根県内の鉄鍋埋納遺跡	39
第7表 島根県内出土の状状耳飾一覧	130
第8表 三瓶火山灰と縄文時代遺跡の関係	135
第9表 三瓶火山灰と黒色土層の放射性炭素による年代測定値一覧	136
第10表 板屋Ⅲ遺跡出土石器内訳	137
第11表 板屋Ⅲ遺跡 弥生時代堅穴住居跡	138
第12表 板屋Ⅲ遺跡検出の製鉄関連遺構	142
第13表 板屋Ⅲ遺跡 製鉄関連遺構の主要要素一覧表	143
第14表 第3 黒色土層出土縄文土器総括表	148
第15表 第2 黒色土層出土縄文土器総括表	149
第16表 第1 黒色土層（表土）出土縄文土器総括表	150
第17表 第1 黒色土層（表土）出土弥生土器・土師器総括表	151
第18表 第1 黒色土層出土須恵器総括表	152
第19表 堅穴住居跡出土赤土上器総括表	153
第20表 板屋Ⅲ遺跡（西側調査区）出土陶磁器総括表	154
第21表 板屋Ⅲ遺跡（東側調査区）出土遺物総括表	154
第22表 板屋Ⅲ遺跡出土縄文・弥生・土師器観察表	156
第23表 出土陶磁器観察表	173
第24表 板屋Ⅲ遺跡出土石製品観察表	174
第25表 板屋Ⅲ遺跡出土金屬製品観察表	177
第26表 ①板屋Ⅲ遺跡（西区）出土銭貨	178
②板屋Ⅲ遺跡（東区）出土銭貨	178
第27表 板屋Ⅲ遺跡西区出土石錘計測表（第3 黒色土層上）	179
第28表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類石器）	182
第29表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類剥片）	182
第30表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類岩石）	185
第31表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類磨石・敲石）	185
第32表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類磨製石斧）	186
第33表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類石斧）	186
第34表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類凹石）	186
第35表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類石匙）	186
第36表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類石皿）	186
第37表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類巨大石皿）	187
第38表 板屋Ⅲ遺跡出土石器計測表（種類砥石）	187
第39表 板屋Ⅲ遺跡堅穴住居跡（S I）出土石器計測表	188
第40表 板屋Ⅲ遺跡集石遺構出土石材計測表（第3 黒色土層検出）	189
第41表 ①板屋Ⅲ遺跡出土鐵釘（東区）計測表	193
②板屋Ⅲ遺跡出土十鉄釘（西区）計測表	193
第42表 板屋Ⅲ遺跡製鉄関連遺物・般觀察表	197

第13表 板壓Ⅲ遺跡製鐵関連遺物分析資料一覧表	202
第14表 板壓Ⅲ遺跡製鐵関連遺物詳細觀察表（資料番号1～5）.....	203

写真図版目次

- 図版1 神戸川流域空撮写真（米軍撮影：著作権者 国土地理院）
- 図版2 板屋Ⅲ遺跡調査前全景（南西上空から）
- 板屋Ⅲ遺跡調査前全景（南東上空から）
- 図版3 東側調査区 SX 0 1 出土鉄鍋（第35図1）
- 図版4 東側調査区 調査後遠景（南西より）
- 第2ハイカ層検出状況（南東より）
- 第2ハイカ層検出状況（南西より）
- 図版5 第2ハイカ層検出状況（西より）
- SK 0 3 上層断面（北より）
- SK 0 3 完掘状況（北西より）
- 図版6 SK 1 9 土層断面（北西より）
- SK 1 9 完掘状況（南より）
- SK 2 0 上層断面（南より）
- 図版7 SK 2 1 土層断面（南より）
- SK 2 2 土層断面（北西より）
- 東側調査区作業風景
- 図版8 SK 2 3 完掘状況（南東より）
- SK 2 3 土層断面（南西より）
- 調査区土層断面（北西より）
- 図版9 第1ハイカ層検出状況（南西より）
- 第1ハイカ層検出状況（南西より）
- 第1ハイカ層検出状況（西より）
- 図版10 第1ハイカ層検出状況（南西より）
- 第1ハイカ層検出状況（南西より）
- 調査区上層断面
- 図版11 SK 0 1 完掘状況（南東より）
- SK 0 1 土層断面（南より）
- SK 0 2 完掘状況（南西より）
- 図版12 SK 0 4 上層断面（南より）
- SK 0 4・0 5・0 6 完掘状況（南西より）
- SK 0 5 土層断面（南東より）
- 図版13 SK 0 6 上層断面（南東より）
- SK 0 7 完掘状況（南西より）
- SK 0 8 土層断面（南より）
- 図版14 SK 0 9 土層断面（南より）
- SK 0 9・1 0 完掘状況（南西より）
- SK 1 0 土層断面（南より）
- 図版15 SK 1 1 土層断面（南より）
- SK 1 2 上層断面（南より）
- SK 1 1・1 2 完掘状況（北西より）
- 図版16 SK 1 3 完掘状況（南より）
- SK 1 3 土層断面（南より）
- SK 1 4 土層断面（北西より）
- 図版17 SK 1 4 完掘状況（南東より）
- SK 1 5 人骨出土状況（西より）
- SK 1 5 完掘状況（南東より）
- 図版18 SK 1 6 土層断面（南より）
- SK 1 6 人骨出土状況（南東より）
- SK 1 6 人骨出土状況（南東より）
- 図版19 SK 0 7・1 6・1 7・1 8 完掘状況（南西より）
- SK 1 7 土層断面（南より）
- SK 1 8 土層断面（南東より）
- 図版20 SD 0 1 土層断面（北東より）
- SD 0 1 完掘状況（南西より）
- SX 0 1 検出状況（南西より）
- 図版21 SX 0 1 検出状況（南西より）
- SX 0 1 鉄製品出土状況（南より）
- SX 0 1 鉄製品出土状況（南より）
- 図版22 第2黒色土層出土縄文土器（第13図、6はSK 0 3）
- SK 1 6 出土鉄釘・第1黒色土層出土鉄器（第31図、38図）
- 図版23 SK 1 6 出土鉄釘（第31図）
- SX 0 1 出土鉄釘・鉄鎌（第35図）
- 図版24 SX 0 1 出土鉄鍋底部（第35図）
- SX 0 1 出土鉄鎌・鉄鍋把手（第35図）
- 図版25 SX 0 1 出土鉄鍋（第35図）
- SX 0 1 周辺出土銅（第35図）
- SX 0 1 周辺出土銭貨（第36図）
- 図版26 SX 0 1 周辺出土土製品
- SX 0 1 周辺出土陶磁器
- 図版27 第1黒色土層出土縄文土器
- 第1黒色土層出土石器（第38図）
- 第1黒色土層出土土製品
- 図版28 第1黒色土層出土陶磁器
- 第1黒色土層出土家紋印塔（第37図）
- 西側調査区調査前全景（北東より）
- 図版29 第4黒色土層調査後全景（南より）
- 第4黒色土層調査後全景（東より）
- 第4黒色土層出土坑（南東より）
- 図版30 第3黒色土層調査後全景（南東より）
- 第3黒色土層調査後全景（南より）
- 図版31 第3黒色土層調査後全景（南東より）
- 第3黒色土層調査後全景（南より）
- 図版32 第3黒色土層上面検出石材（南より）
- 第3黒色土層上面検出石材（南より）
- 図版33 SK 0 1 土層断面（南より）

	S K 0 2・0 3 完掘状況（南西より）	岡版52 炭化土坑完掘状況（南西より）
	S K 0 4 土層断面（南より）	12Gグリッド内遺物出土状況
岡版34	S K 0 3 完掘状況（南東より）	調査区内第1黑色土層断面（北より）
	ピット5検出状況（南より）	掘立柱建物跡検出状況（南東より）
	ピット5土層断面（南より）	掘立柱建物跡検出状況（南より）
岡版35	集石遺構検出状況（南より）	掘立柱建物跡検出状況（東より）
	集石遺構断面（南より）	調査風景など
岡版36	第2黒色土層調査後（谷部分、南より）	（東側調査区作業風景）
岡版37	第2黒色土層調査後全景（南東より）	（鉄錠取り上げ作業風景）
	第2黒色土層調査後全景（南より）	（堅穴住居跡積合風景）
	第2黒色土層調査後全景（東より）	（堅穴住居跡遺物検出風景）
岡版38	S K 0 5 完掘状況（南より）	（ボビー祭り出展風景）
	S K 0 5 上層断面（南より）	（コスマス祭り出展風景）
岡版39	S L 0 1 土層断面（東より）	（落し穴作業風景）
	S L 0 2・0 3 完掘状況（東より）	（西側調査区積査風景）
岡版40	第1黒色土層調査後全景（上空より）	岡版56 板壁Ⅲ遺跡遠景（西より）
	第1黒色土層調査後全景（東より）	堅穴住居跡調査指導風景
岡版41	S I 0 1 完掘状況（西より）	製鉄関連遺物整理作業風景
	S I 0 1 検出柱穴群（西より）	第4黒色土層試料採取風景
岡版42	S I 0 1 検出状況（北西より）	神戸川流域風景（神原遺跡群・門遺跡周辺）
	S I 0 1 南北軸土層断面（西より）	岡版57 第3黒色土層出土遺物
	S I 0 1 遺物出土状況（西より）	岡版58 集石遺構出土縄文土器・石片（第44図）
岡版43	S I 0 2 完掘状況（南東より）	第3黒色土層出土縄文土器①（第47図）
	S I 0 2 東西南土層断面（北より）	岡版59 第3黒色土層出土縄文土器②-外面-（第46図）
	S I 0 2 東西南土層断面（北より）	第3黒色土層出土縄文土器②-内面-（第46図）
岡版44	S I 0 3 検出状況（西より）	岡版60 第3黒色土層出土縄文土器③（第48図）
	S I 0 3 完掘状況（南より）	第3黒色土層出土縄文土器④（第48図）
岡版45	S I 0 3 遺物出土状況（北東より）	岡版61 第3黒色土層出土縄文土器⑤-外面-（第49図）
	S I 0 3 遺物出土状況（北東より）	第3黒色土層出土縄文土器⑤-内面-（第49図）
	S I 0 3 南北軸土層断面（西より）	岡版62 第3黒色土層出土縄文土器⑥（第49図）
岡版46	S I 0 3 土器滴り検出状況（北西より）	第3黒色土層出土石器①（第50図）
	S I 0 3 上器滴り調査状況（北西より）	岡版63 第3黒色土層出土石器②（第50図）
岡版47	S I 0 3 中央土坑土層断面（北東より）	第3黒色土層出土石器③（第50図）
	S I 0 4 検出状況（南東より）	第3黒色土層出土石器④（第50図）
岡版48	S I 0 5・0 6・0 7 遺物出土状況（西より）	岡版64 第3黒色土層出土石器⑤（第51図）
	S I 0 5・0 6・0 7 遺物出土状況（西より）	第3黒色土層出土石器⑥（第51図）
	S I 0 5・0 6・0 7 南北軸土層断面（西より）	岡版65 第3黒色土層出土石器⑦（第52図）
岡版49	S I 0 5・0 6・0 7 完掘状況（南より）	第3黒色土層出土石器⑧（第52図）
	S I 0 8 完掘状況（北東より）	岡版66 第2黒色土層出土遺物
岡版50	S K 0 1 完掘状況（南より）	岡版67 S K 0 5 出土遺物（第55図）
	S K 0 1 土層断面（東より）	S K 0 5 出土縄文土器（第55図）
	S K 0 2 完掘状況（南西より）	S K 0 5 出土石器（第55図）
岡版51	S K 0 3 上層断面（西より）	S K 0 5 出土块状耳飾（第55図）
	S K 0 3 完掘状況（南東より）	
	S K 0 4 土層断面（東より）	

- | | | | |
|----------------------------|----------------------------|-----------------------------------|---------------------------|
| 国版69 | 第2黑色土层出土绳文土器① (第58图) | 圆版90 | S I 0 3 土器滴り出土弥生土器 (第74图) |
| 第2黑色土层出土绳文土器② (第58图) | S I 0 3 土器滴り出土棒状石材 (第74图) | | |
| 第2黑色土层出土绳文土器③ (第59图) | S I 0 3 中央土坑出土弥生土器② (第76图) | | |
| 圆版70 | 第2黑色土层出土石器① (第60图) | 圆版91 | S I 0 3 土器滴り出土弥生土器 (第74图) |
| 第2黑色土层出土石器② (第60图) | S I 0 3 中央土坑出土石器① (第76图) | | |
| 圆版71 | 第1黑色土层出土绳文土器·石器 | 圆版92 | S I 0 3 中央土坑出土石器② (第77图) |
| 圆版72 | 第1黑色土层出土绳文土器① (第99图) | S I 0 4 出土弥生土器① (第79图) | |
| 第1黑色土层出土尖底文土器① (第100图) | S I 0 4 出土弥生土器② (第79图) | | |
| 圆版73 | 第1黑色土层出土尖底文土器② (第100图) | 圆版93 | S I 0 5 出土弥生土器① (第83图) |
| 第1黑色土层出土绳文土器② (第100图) | S I 0 5 出土弥生土器② (第84图) | | |
| 圆版74 | 第1黑色土层出土弥生土器 | 圆版94 | S I 0 5 出土石器① (第83图) |
| 圆版75 | 第1黑色土层出土弥生土器① (第101图) | S I 0 5 出土弥生土器③ (第83图) | |
| 第1黑色土层出土弥生土器② (第101图) | 圆版95 | S I 0 5 出土弥生土器④—外面— (第85图) | |
| 圆版76 | 第1黑色土层出土弥生土器③ (第102图) | S I 0 5 出土弥生土器④—内面— (第85图) | |
| 第1黑色土层出土弥生土器④ (第102图) | 圆版96 | S I 0 5 出土弥生土器⑤—外面— (第85图) | |
| 圆版77 | 第1黑色土层出土弥生土器⑤ (第103图) | S I 0 5 出土弥生土器⑤—内面— (第85图) | |
| 第1黑色土层出土弥生土器⑥ (第103图) | 圆版97 | S I 0 5 出土弥生土器⑥ (第85图) | |
| 圆版78 | 第1黑色土层出土弥生土器⑦ | S I 0 5 出土石器② (第85图) | |
| 圆版79 | 第1黑色土层出土弥生土器⑧ | 圆版98 | S I 0 6 山土弥生土器 (第88图) |
| 圆版80 | 第1黑色土层出土弥生土器⑨ (第104图) | S I 0 6 山土弥生土器·石器 | |
| 第1黑色土层出土弥生土器⑩ (第104图) | 圆版99 | S I 0 7 出土弥生土器 (第90图) | |
| 圆版81 | 第1黑色土层出土弥生土器⑪—1— (第104图) | S I 0 8 出土弥生土器 (第93图) | |
| 第1黑色土层出土弥生土器⑪—2— (第104图) | 圆版100 | S I 0 8 出土石器 (第93图) | |
| 圆版82 | 第1黑色土层出土弥生土器⑫ (第105图) | S I 0 5 · 0 6 出土弥生土器与第1黑色土层出土注口土器 | |
| 第1黑色土层出土石器① (第110图) | 圆版101 | 第1黑色土层出土土师器① (第106图) | |
| 圆版83 | 第1黑色土层出土石器② (第111图) | 第1黑色土层出土土师器② (丹塗り) | |
| 第1黑色土层出土石器③ (第111图) | 圆版102 | 第1黑色土层出土土师器③—内面— (第106图) | |
| 圆版84 | 第1黑色土层出土石器④ (第111图) | 第1黑色土层出土土师器③—外面— (第106图) | |
| 第1黑色土层出土石器⑤ (第111图) | 圆版103 | 第1黑色土层出土須恵器① (第107图) | |
| 第1·第2黑色土层出土块状耳饰 | 第1黑色土层出土須恵器② (第108图) | | |
| 圆版85 | S I 0 1 出土弥生土器① (第66图) | 圆版104 | 第1黑色土层出土土师器·须惠器·陶器 |
| S I 0 1 出土弥生土器② (第67图) | 第1黑色土层出土陶磁器① (第109图) | | |
| 圆版86 | S I 0 1 出土弥生土器③—内面— (第66图) | 第1黑色土层出土陶磁器② (第109图) | |
| S I 0 1 出土弥生土器③—外面— (第66图) | 第1黑色土层出土陶磁器③ | | |
| 圆版87 | S I 0 1 · 0 6 · 0 8 出土铁器 | 圆版106 | 第1黑色土层出土陶磁器④ |
| S I 0 1 出土弥生土器④ | 第1黑色土层出土土製品·陶磁器 | | |
| S I 0 1 出土石器 (第67图) | 圆版107 | 第1黑色土层出土陶磁器⑤ | |
| 圆版88 | S I 0 2 出土弥生土器 (第69图) | 第1黑色土层出土陶磁器⑥ | |
| S I 0 3 出土弥生土器·石器 (第72图) | 圆版108 | 第1黑色土层出土鍛冶系铁片 (第112图) | |
| 圆版89 | S I 0 3 出土弥生土器·土师器 (第73图) | | |
| S I 0 3 中央土坑出土弥生土器① (第76图) | | | |

- 第1 黑色土層出土金屬器① (第113図)
図版109 第1 黑色土層出土金屬器② (第113図)
第1 黑色土層出土金屬器③ (第113図)
図版110 第1 黑色土層出土金屬器④ (第113図)
第1 黑色土層出土金屬器⑤ (第114図)
図版111 第1 黑色土層出土金屬器⑥
第1 黑色土層出土金屬器⑦
図版112 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物① (第
121・122図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物② (第
122・123図)
図版113 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物③ (第
123図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物④ (第
123・124図)
- 図版115 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑤-表一
(第124図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑥-表一
(第124図)
図版116 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑦ (第
124・125図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑧ (第
125・126図)
図版117 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑨ (第
126図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑩ (第
127・128図)
図版118 第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑪ (第
129図)
第1 黑色土層出土製鐵関連遺物⑫ (第
130図)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

志津見ダム建設に伴う発掘調査地域を南北に流れる神戸川と、同じく平行して流れる斐伊川は島根県東部を代表する二大河川である。これらの川は古くから、上流山間部から出雲平野に至るまでの地域で暮らす多くの人々の水源として使われてきたが、洪水などの水害を起こすことも度々であった。このため、斐伊川・神戸川の治水事業は近世松江藩以来の懸案であった。

昭和54年（1979）に「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」の具体的な内容が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）と島根県から発表された。これにより志津見ダム建設事業は、斐伊川水系の放水路・尾原ダム・大橋川改修の各事業とともに、島根県東部の治水対策の根幹をなす事業として位置づけられた。その後諸々の調査・関連手続き等が行われ、昭和61年（1986）に事業が開始された。埋蔵文化財の発掘調査は平成元年度（1989）から島根県教育委員会が、平成10年度（1998）からは頃原町教育委員会も建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受けて行っている。県の調査は平成12年度（2000）以降調査基準の変更により、平成13年度の調査で現地調査は全て終了した。

志津見ダムは、島根県東部の松江市・山陰市等の斐伊川・神戸川流域の洪水防御とともに、神戸川の流水の正常な機能の維持及び工業用水の補給を目的とした多目的ダムである。ダム本体は、神戸川上流域の飯石郡頃原町大字角井地内に建設が予定されている。洪水地域は同町大字八神・志津見・角井に広がり、水域面積は230haに及ぶ。この洪水地域内には多くの埋蔵文化財の存在が想定されていたため、ダム建設に先立ち調査を行う必要が生じた。島根県教育委員会では頃原町教育委員会で進められていた町内遺跡分布調査事業に同調し、昭和63年（1988）に分布調査を行った。その結果、ダム建設予定地内には44か所の遺跡と6か所の遺跡推定地が存在することが判明した。当初遺跡発掘調査予定数は、上限満水状態を基準にしており遺跡は31を数えたが、調査基準の見直しにより通常水位までが調査対象となり、実際に調査を行ったのは平成13年度の現地調査終了時で26遺跡にとどまった。本書で報告する板屋Ⅲ遺跡は、現地調査最終年度となった平成13年度（2001）の調査である。

第2節 調査の経過

板屋Ⅲ遺跡の発掘調査は平成6年（1994）4月から平成8年（1996）6月まで、途中冬季の調査中止期間や緊急な他遺跡の調査を挟んだ2年3ヶ月と、平成13年（2001）4月から12月までの9ヶ月を含め、3年を要した。調査地点（第4図）は、旧明剣神社が位置する丘陵上で標高276m～290m前後の斜面を第2地点とし、その丘陵下に続く標高260m～271m前後の緩斜面を第1地点とした。調査前には第1地点が水田及び一部宅地、第2地点は水田及び畠地であった。

平成13年度の最終調査は、第2地点の東西両端の一部未調査区域分について行った。東側部分を東側調査区、西側旧明剣神社部分を西側調査区とした。発掘調査は東区については、4月5日から6月21日まで行い、第1黒色土層（第1ハイカ層上面）から一部第2ハイカ層上面までを調査した。第1黒色土はすでに縄文時代後期中葉から近世までの遺物を包含する古土壤であることが判明し

ており、今回の調査では、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・古銭・石塔片・鉄器等が出土している。第1ハイカ層上面で検出した遺構は、土坑・加工段・溝状遺構などがある。これらの遺構は、作出する遺物が少ないとから時期不明のものが多いが、土坑は、近世のものと縄文時代のもののが存在する。またSX01としたものからは、鉄鍋と鉄鎌が埋納された状態で出土しており中世の地鎮等の祭祀跡である可能性が推測される。

一部調査した第2ハイカ層上向までからは、第2黒色土層から縄文土器が出土している。この層は縄文時代前末から後期中葉の遺物を包含する古土壤であることが判明している。第2ハイカ層上面では土坑とともに自然流路を検出しているが、伴出遺物がないことから時期不明である。しかし、第1ハイカに覆われていることから縄文時代前末から後期中葉の時期が推測される。

第1表 志津見ダム関連埋蔵文化財調査の歴史

調査年度	調査名	面積(m ²)	調査主体	出土した遺構・遺物	報告書(刊行年)
1989	鉄井港跡	130	鳥根県	—	「志津見ダム2」1994
1989	引地遺跡	140	鳥根県	—	「志津見ダム2」1994
1990	板原Ⅰ遺跡	3,400	鳥根県	掘立柱建物跡、縄文土器	「志津見ダム2」1994
1990	阿門谷辻堂遺跡	600	鳥根県	土器	「志津見ダム2」1994
1990	森脇山城跡	400	鳥根県	山城	「志津見ダム2」1994
1991	森遺跡	3,400	鳥根県	堅穴住居跡、縄文土器	「志津見ダム2」1994
1992	板原Ⅱ遺跡	450	鳥根県	掘立柱建物跡、縄文土器	「志津見ダム1」1993
1992	門遺跡	3,200	鳥根県	堅穴住居跡、横穴式石室	「志津見ダム3」1996
1992	森遺跡	1,600	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物跡	「志津見ダム2」1994
1993	森Ⅱ遺跡	425	嶺南町	堅穴住居跡、縄文土器、鉄器	整地中
1993	禪原遺跡	300	鳥根県	堅穴住居跡、鐵鉢	「志津見ダム4」1997
1993	門遺跡	5,000	鳥根県	堅穴住居跡、鐵鉢	「志津見ダム3」1996
1994	櫻原遺跡	1,500	鳥根県	堅穴(中・近世)、近世窯	「志津見ダム4」1997
1994	板原Ⅲ遺跡	7,500	鳥根県	堅穴住居跡、製糸、縄文土器	「志津見ダム5」1998
1994	森田遺跡	4,000	嶺南町	堅穴住居跡、縄文土器、鉄器	整地中
1995	戸井谷跡	4,000	鳥根県	堅穴(近世)	「志津見ダム9」2001
1995	長老塚遺跡	600	鳥根県	堅穴(近世)	「志津見ダム9」2001
1995	谷川遺跡	500	鳥根県	堅穴式土器、焼土土器、耳環	「志津見ダム4」1997
1995	嶺南山毛七宿炉跡	20	鳥根県	堅穴(中世)	「志津見ダム4」1997
1995	宇山遺跡	9,000	鳥根県	堅穴住居跡、縄文土器	「志津見ダム7」2000・「志津見ダム」2002
1995	板原Ⅲ遺跡	4,500	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文土器	「志津見ダム5」1998
1996	丸山遺跡	1,000	鳥根県	堅穴(近世)	「志津見ダム10」2001
1996	中原遺跡	11,000	鳥根県	横穴式石室、堅窓、堅穴住居跡	「志津見ダム6」1999
1996	下山遺跡	7,000	鳥根県	堅窓、縄文土器、土偶、配石墓	「志津見ダム7」2000・「志津見ダム」2002
1996	大掛跡	2,200	鳥根県	堅窓、道立柱建物跡、近世窯	「志津見ダム10」2001
1996	板原Ⅳ遺跡	14,450	鳥根県	堅穴住居跡、堅石壁、縄文土器	「志津見ダム5」1998
1996	森Ⅳ遺跡	650	嶺南町	堅穴住居跡	整地中
1997	神原Ⅰ遺跡	5,000	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物	「志津見ダム8」2000
1997	小丸遺跡	5,000	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文土器	「志津見ダム14」2002
1997	森Ⅴ遺跡	1,300	嶺南町	堅穴住居跡、堅窓、祭祀	「森V遺跡」町教委2001
1997	神原Ⅱ遺跡	5,000	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、堅窓(近世)	「志津見ダム13」2002
1998	森山遺跡	1,400	鳥根県	堅窓	「志津見ダム15」2002・「志津見ダム17」2003
1998	弓谷遺跡	3,430	嶺南町	堅窓、縄文土器、焼土土器	「弓谷たたら町教委2000
1998	獅子竹遺跡	1,900	鳥根県	堅窓(近世)	「志津見ダム15」2002・「志津見ダム17」2003
1998	小丸遺跡	8,000	鳥根県	堅穴住居跡、人面付土器、縄文土器	「志津見ダム14」2002
1998	森Ⅵ遺跡	1,350	嶺南町	堅穴住居跡、縄文土器、堅窓	整地中
1998	神原Ⅲ遺跡	6,000	鳥根県	堅穴住居跡、掘立柱建物、縄文土器	「志津見ダム8」2001
1999	貞谷遺跡	5,000	鳥根県	堅穴住居跡、縄文土器	「志津見ダム16」2002
1999	神原Ⅳ遺跡	6,000	鳥根県	堅穴住居跡、縄文土器	「志津見ダム18」2003
2000	戸井谷遺跡	500	鳥根県	堅窓(中世)	「志津見ダム19」2002
2000	貞谷遺跡	900	鳥根県	堅窓、堅土器、焼土土器	「志津見ダム16」2002
2000	神原Ⅴ遺跡	3,000	鳥根県	掘立柱建物跡、縄文土器、焼土土器	「志津見ダム18」2003
2000	万場遺跡	420	嶺南町	掘立柱建物跡、かまと跡(中世)、陶組築	「万場遺跡」町教委2002
2001	丸山金界子武跡	500	鳥根県	祭祀	「志津見ダム21」2003
2001	板原Ⅵ遺跡	2,000	鳥根県	堅穴住居跡、縄文土器	「志津見ダム20」2003・本報告書
2001	其谷遺跡	500	鳥根県	堅窓(中世)	「志津見ダム21」2003
2001	神原Ⅶ遺跡	1,610	嶺南町	堅穴住居跡、堅窓、横穴式石室	整地中
2002	神原Ⅷ遺跡	250	嶺南町	堅穴住居跡、堅窓(近世)	整地中

*「志津見ダム○」=「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」

東区は後世の桑畠等によって大きく改変されていたが、川土遺物や遺構から集落の縁辺部にあたる部分であったと推測される。

西区は6月11日から12月19日まで調査を行った。この西区については一部第4黒色土層（浮布火山灰層上部）まで精査した。板屋Ⅲ遺跡の層序は、1次調査で基本的に表Ⅰ層—第1黒色土層—第1ハイカ層—第2黒色土層—第2ハイカ層—第3黒色土層—第3ハイカ層—第4黒色土層—三瓶浮布火山灰層となっていることが明らかになっている。しかし、これらの層がすべてにおいて見られるわけではなく、西区においても下方西端部分では、第3ハイカ層と第4黒色土層の確認が難しく、第3黒色土層の直下は三瓶浮布火山灰層が出現している。第4黒色土層の調査範囲はこれらの層がはっきりと確認できた遺跡中央部のみである。

第1黒色土層（第1ハイカ層上面まで）は、すでに縄文時代後期中葉から近世までの遺物を包含する古土壤であることが判明しており、今回の調査では弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・錢貨・石器・鉄器等が出土している。特に弥生時代後期の土器が目立っている。

第1ハイカ層上面で検出した遺構は、土坑・建物跡などがある。堅穴住居跡は弥生時代後期と考えられ、検出したものは8棟である。ただし、第1黒色土層中から多数の土器が出土していることから、黒色土層中に充てていたものが確認できなかった可能性も考えられる。調査区西側で検出した掘立柱建物跡は、近世の時期が推測されるものであり、鍛冶炉をともなっている。

第2黒色土層（第2ハイカ層上面まで）からは、縄文土器・石器が出土しているが、その総数は第1黒色土層に比して少ない。石器は石錘が多く約半数を占める。また、耳飾りが2点上坑（落とし穴）から出土している。検出遺構はピットと土坑である。ピットは建物跡を構成する可能性は考えられないものである。上坑は人為的なものと考えられるのはSK05の落とし穴のみである。

第3黒色土層（第3ハイカ層上面及び三瓶浮布火山灰層まで）からは、縄文土器・石器が出土している。遺物の大半は黒色土層上面から出土しており、中部から下部にかけて出土したものはほんの数点である。石器は第2黒色土層と様相は同じで、石錘が9個以上を占める。石錘以外の石器は、打製の石包丁を想わせる石器が1点出土している。検出遺構はピットと土坑、そして集石遺構が1基ある。また、遺構の検出面は第3ハイカ層上面と第3ハイカ層の堆積していない部分は三瓶浮布火山灰層である。なお、幅の狭い自然流路も検出しており、縄文土器・石錘と大型の石材が出土している。

第4黒色土層（三瓶浮布火山灰層まで）の調査は、調査区の一部分に限っている。この層からは遺物は出土していないが、円錐が2点出土している。遺構はピットと土坑を検出している。

今回の調査区域は、前回（平成6年～8年）の調査に比べ、弥生時代の遺物・遺構が多く検出された。これらは、志津見の歴史を探る上で貴重な資料を追加することとなった。

また、地域住民の方々への調査に対する理解や協力を得る活動も行った。毎年発掘現場近くで春秋2回開催されるボピー祭とコスマス祭は地元はもとより、県下広域、近隣県から多くの人々が訪れたいへん駆けうるイベントである。この会場の一角落に展示コーナーを設け、発掘調査風景や出土遺物などのパネル・実物の遺物などを展示し、訪れた人々に説明したりした。体験コーナーでは勾玉・埴輪・石膏銅鐸づくりなどして、子供から大人まで楽しんでいただいた。第1回から11年間参 加し平成13年度が最後の参加になったが、今後ともより多くの人々に少しでも考古学に興味を持つていただければと願っている。

第2章 位置と環境

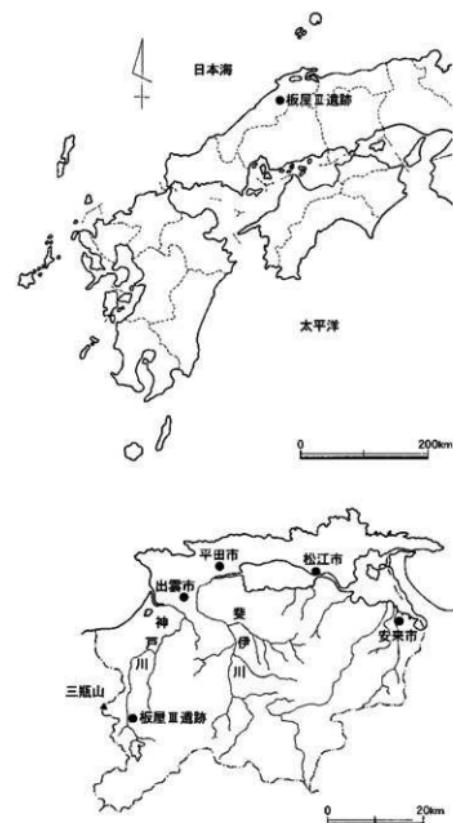
第1節 地理的環境（第1図）

中国山地に源を発する神戸川は、優美な姿で知られる三瓶山（標高1,126m）の東麓を北流し、日本海へ流れ下る。板屋Ⅲ遺跡は、その神戸川の中流域に位置しており、島根県飯石郡頃原町大字志津見330番地外に所在する。志津見地域は、現在は頃原町に属しているが、明治22年（1889）の町村制施行では飯石郡志々村とされたところで、昭和32年（1957）旧頃原町と合併して頃原町に編入され現在に至っている。

気候は日本海岸性気候で、標高200mを超える山間に位置しているため、低温・多雨・多雪地域である。頃原町大字志津見では、年平均気温11.4度・年降水量2,108mm・最大積雪量254cmと推定されており、少し標高の低い志津見地域でも多少数値は異なるが、同じような気象条件である。

板屋Ⅲ遺跡は、神戸川に、その支流である弓谷川が流れ込む地点に位置し、南向きのなだらかな斜面に営まれている。付近の地形は、起伏量400m～200mの中起伏山地が連なっており、その間を神戸川が縫うように流れることで、砂礫段丘や谷底氾濫原が形成されている。周辺の遺跡は、山間に開けた、このような砂礫段丘や谷底氾濫原など僅かな平坦地を中心として展開しており、これが当地域の遺跡立地条件の大きな特色となっている。板屋Ⅲ遺跡の立地は、このような周辺遺跡の立地と同様であるが、遺跡が広範囲に及ぶため丘陵部の第1地点は谷底氾濫原に近く、丘陵上の第2地点はなだらかな山麓地となっている。

周辺の表層地質は、古第三紀～白亜紀の閃綠岩～花崗岩複合岩質岩石である。これより北側の畿内郡佐田町大字橋波方面には後期中生代～古



第1図 板屋Ⅲ遺跡の位置図
(S = 1/7,400,000, 1/1,000,000)

第一紀の酸性凝灰岩、南側の一部には後期中生代～古第三紀の安山岩質岩石があり、飯石郡頓原町大字獅子から赤来町大字來島方面には古第三紀～白亜紀の花崗岩質岩石が広く分布している。

板屋Ⅲ遺跡は、今から約10万年前から約3,600年前まで噴火活動を繰り返した三瓶山の東5kmに位置することから、その火山灰や火碎流などの火山起源の堆積物や黒ボク土壌が見られることが大きな特徴である。その層序や年代は、遺跡の年代とも大きく関わっている。

第2節 歴史的環境（第2図）

三瓶山周辺における遺跡の初見は、縄文時代草創期末から早期初頭の表裏条痕文土器が確認された板屋Ⅲ遺跡で、現在のところそれ以前の遺跡は確認されていない。板屋Ⅲ遺跡では縄文時代の遺構・遺物と三瓶山火山灰が層位的に確認されており、第3黒色上層の下層が縄文時代草創期末から早期末・上層が前期前半から末、第2黒色土層が前期末から後期中葉、第1黒色上層が後期中葉から晚期以降の遺構面や遺物包含層であることが明らかになっている。

周辺の縄文時代の遺跡としては、五明田遺跡・森遺跡・門遺跡・下山遺跡・貝谷遺跡などがあげられる。このうち、下山遺跡では縄文時代早期以降の遺構・遺物が層位的に確認されており、立石を伴う配石遺構群や東日本からの搬入品と見られる眉折像土偶は注目される。また、五明田遺跡からは縄文時代後期前葉の磨消縄文土器が良好な状態で多量に発見されている。その他ブラントオパールの分析結果により、晚期初頭から雜穀類の栽培が行われていたことが明らかになっている。

弥生時代の遺跡としては、森遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡・下山遺跡などが知られている。これらの遺跡で確認されている堅穴住居跡のほとんどは後期のものであるが、出土遺物には前期・中期のものも含まれている。このうち、前期まで通るのは板屋Ⅲ遺跡と下山遺跡で、前者では前期後半の配石遺構群が確認されている。また、森遺跡では集落跡に隣接して弥生時代後期の土坑墓13基が営まれていた。これらは墓底面に小口板の痕跡を残すものが多いことから木棺を掘えたものであったと見られ、中には碧玉製管玉を141個も副葬した土坑墓（SK07）も見られた。

古墳時代の遺跡は、前期初めの集落跡が板屋Ⅲ遺跡・門遺跡で確認されているが、これは弥生時代後期の集落から続るものである。中期の様相は十分明らかでないが、下山遺跡では堅穴住居跡1棟が検出されている。後期になると古墳や集落が比較的に判明しており、このうち、古墳は横穴式石室を内蔵したものが比丘尼塚古墳・中原古墳・門古墳群、横穴墓は堂ノ原横穴墓で知られている。その規模や内容の点で比較すると八神地区の古墳の相対的な優位性が窺えそうである。

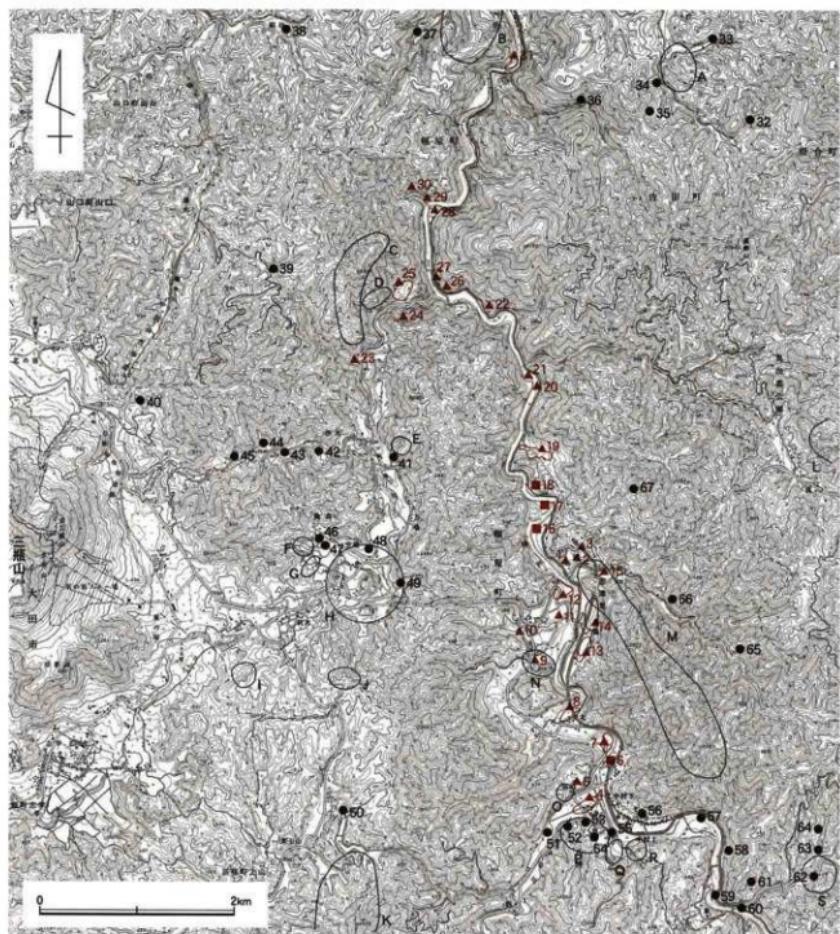
古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡は、森遺跡・板屋Ⅲ遺跡・門遺跡・小丸遺跡で検出されているが、古墳時代後期には方形の堅穴住居跡の壁沿いに作り付けの竈を設けたものが一般化している。また、森遺跡・門遺跡では所属時期が明確ではないが、掘立柱建物跡も検出されており、倉庫などの施設があったと思われる。小丸遺跡からは3棟の堅穴住居跡から炭化した建築材が出土し、焼失住居の好資料が得られている。

製鉄関連遺跡は、現段階で頓原町志々地区に48か所、佐田町窟山地区で22か所の計70か所が確認されているが、その実数はさらに多いものと思われる。しかし、本格的な床釘構造を持つ近世以前の製鉄遺跡はあまり知られておらず、門遺跡1号炉・板屋Ⅲ遺跡1及び4号炉・檀原遺跡V区2号炉等である。このうち、門遺跡1号炉・板屋Ⅲ遺跡1号炉・檀原遺跡V区2号炉は、木炭を敷き詰めた木床のみもつもので、これに対し、板屋Ⅲ遺跡4号炉は木床の横に小舟状の溝をもっており、近

世以前の箱形製鉄炉の地下構造に2つの系統が見える。

また、板屋Ⅲ遺跡2・3号炉及び榎原遺跡V区1号炉等では、半地下式豊形炉に系譜をもつ精錬鍛冶炉が確認されており、近世の大鋳冶場に近い機能を持った作業場がすでに古代末から中世初頭段階には成立していたことを示すものとして重要である。

近世の製鉄遺跡は、志津見ダム地内で調査されただけでも榎原遺跡・殿淵山毛宅前鉱跡・長老畠遺跡・下山遺跡・丸山遺跡・大槻鉱跡等で床釣構造をもつ製鉄炉が確認されている。周辺地域でも佐田町朝日鉱跡・梅ヶ谷尻鉱跡・頼原町泉原鉱跡・大田市日ノ平鉱跡の調査も行われており、県内



第2図 板屋Ⅲ遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 / 50,000)

第2表 神戸川中流域の遺跡一覧表（その1）

%	遺跡名	種別	備考	文献/発見年次
1	板原Ⅲ遺跡	複合遺跡	縄文～弥生時代集落跡、中世製鉄遺構、陶文時代土坑、中世祭祀跡	11,13,31,44 H 6～8,13年
2	板原Ⅱ遺跡	複合遺跡		7,11 H 4年
3	板原Ⅰ遺跡	複合遺跡		8,11 H 2年
4	森遺跡群	集落跡	弥生時代から奈良時代、近世集落跡など	8,20 H 3～4年
5	谷川遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器・小師器等出土	12 H 7年
6	小谷尻遺跡	(未調査)		
7	中原遺跡	複合遺跡	人頭冶場跡1、撫穴式石室1など	14 H 8,10年
8	小九遺跡	集落跡	弥生時代から古墳時代集落跡など	25,36,37 H 9～10年
9	阿丹谷社堂跡	古墓	石碑2	8 H 2年
10	荒井追跡	製鉄遺跡		H 4年
11	引地遺跡	遺物散布地		H 4年
12	門遺跡	複合遺跡	製鉄炉1、鍛冶炉4、撫穴式石室2、弥生時代～奈良時代貨幣跡など	9 H 4年～5年
13	神原Ⅰ遺跡	集落跡	縄文時代から古墳時代、近世集落跡など	16 H 9年
14	神原Ⅱ・Ⅲ遺跡	複合遺跡	大頭冶場跡、縄文時代から奈良時代、近世集落跡など	16,24,29,35,39,41 H 9～14年
15	弓谷(尾)鉢跡	製鉄遺跡	高炉跡、製洗炉	17 H 10年
16	慈原遺跡	(未調査)		
17	後平遺跡	(未調査)		
18	小貝谷遺跡	(未調査)		
19	貝谷遺跡	複合遺跡	製鉄炉、縄文時代集落跡など	27,32,40,43,44 H 11～13年
20	丸山遺跡	製鉄遺跡	製洗炉1	19 H 8年
21	丸山金剛子遺跡	祭祀跡		32
22	人頭鉢跡	製鉄遺跡	製鉄炉2、炉5、近世製瓦窯跡物跡	19 H 8年
23	新子谷遺跡	製鉄遺跡	近世大鍛冶場(嘉治炉8)	26,28,38 H 10年
24	難現山遺跡	(未調査)	鍛冶	(難現上河跡を改名)
25	下山遺跡	複合遺跡	製鉄炉2、縄文時代集落跡、泥石遺構群など	15,23,33,34 H 7～8年
26	坂瀬山遺跡	製鉄遺跡	排煙場	26,28 H 10年
27	横瀬山毛宅跡	製鉄遺跡	製鉄炉1	12 H 7年
28	長老畑遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1	18 H 7年
29	芦井谷丘遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉2、精錬鍛冶炉1、大鍛冶場(嘉治炉2)	18 H 7年
30	芦井谷流跡	製鉄遺跡	製鉄炉1	30,42 H 12年
31	櫻原遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉2、精錬鍛冶炉1、嘉治炉2	12,22 H 5～6年
32	堂の本剣跡	製鉄遺跡		
33	水谷鉢跡	製鉄遺跡		
34	梅ノ谷鐵炉跡	製鉄遺跡	製鉄炉2	5 H 3年
35	梅ノ木谷鉢跡	製鉄遺跡		
36	保井谷鉢跡	製鉄遺跡		
37	柳道鉢跡	製鉄遺跡		
38	翻道鉢跡	製鉄遺跡		
39	猪々谷遺跡	遺物散布地	石斧、石錐、土器片	
40	柳ヶ峰遺跡	遺物散布地		
41	向原削・嘉治跡	製鉄遺跡	鍛冶	
42	伊比谷遺跡	遺物散布地	磨製石斧	
43	伊比谷1号鉢跡	製鉄遺跡	鍛冶炉、灰渣	
44	伊比谷2号鉢跡	製鉄遺跡	排煙跡、灰渣	
45	伊比谷3号鉢跡	製鉄遺跡	鍛冶	
46	立ノ原横穴墓	横穴墓		
47	角井ノ原遺跡	遺物散布地	磨制石斧、縄文土器	
48	角井遺跡	遺物散布地	磨製石斧	
49	移門遺跡	遺物散布地	石器	

を見ても製鉄遺跡の実態がかなり分っている地域のひとつである。また、たたらの経営者についてあまり判明していないが、田部家、山儀桜井家、水出家などが知られている。

近世の大鋳冶場は、たたらに付属するものと単独で立地するものの2種類があり、前者としては権原遺跡・大槻遺跡、後者には戸井谷尻遺跡・中原遺跡等が上げられる。特に後者については、作業内部の構造もよくわかつており、鉄砧石を挟んで左下場、本場と呼ばれる2つの炉が検出されている。

第3表 神戸川中流域の遺跡一覧表（その2）

No.	遺跡名	種別	備考	文献／調査年次
50	才賀遺跡	遺物散布地	土器器	
51	坂根遺跡	製鉄遺跡	鐵滓	
52	土居ノ上野跡	製鉄遺跡	鐵滓、羽口	
53	渡原遺跡	遺物散布地	須恵器	
54	役原鐵治跡	製鉄遺跡		
55	五明町遺跡	集落跡	绳文時代集落跡など	2, 3 H元年
56	慶安寺御跡	製鉄遺跡	野井、鉄滓	
57	牛ノ原遺跡	遺物散布地	绳文土器、赤生土器	
58	鈴原御跡	製鉄遺跡	野井、鐵滓	
59	北正丸塚古墳	古墳	横穴式石室1	昭和49年
60	高台城跡所跡	製鉄遺跡	残石所跡（近代）	
61	獅子尻跡	製鉄遺跡	野井、鐵滓、鉄型片	
62	獅子吉跡	製鉄遺跡		
63	梅ノ庭製鉄遺跡	製鉄遺跡	製鐵炉1	4 H12年
64	梅ノ谷谷伊跡	製鉄遺跡	鐵滓	
65	弓谷奥遺跡	製鉄遺跡		17
66	弓谷道跡	製鉄遺跡		17
67	板屋鬼利跡	製鉄遺跡		
A	古野丸山城跡	城跡跡	郭、堅堀、堅切	
B	柳湖城跡	城跡跡	郭、堅切、櫓台	
C	トヤガ丸城跡	城跡跡	郭	
D	准羽西城跡	城跡跡	郭、土塁	
E	向原城跡	城跡跡	郭	
F	父木城跡	城跡跡	郭、堅郭、堅切	
G	大当先城跡	城跡跡	郭、堅切	
H	舟井城跡	群城跡	郭、上堀、堅切、連築堅堀、虎口、櫓台	10
I	東原小丸城跡	城跡跡	郭、土塁	
J	東原市城跡	城跡跡	郭、土塁	
K	越の姫城跡	城跡跡	堅郭、土塁、堅切、堅堀、櫓台	10
L	北正丸城跡	城跡跡	郭、堅切	
M	白旗城跡	城跡跡	郭	
N	赤瀬山城跡	城跡跡	郭、堅切、堅堀、櫓台	
O	坂根城跡	城跡跡	郭、土塁	
P	段原城跡	群城跡	郭	
Q	宇杉越城跡	城跡跡	郭、脇郭	
R	宇杉城跡	城跡跡	郭、堅郭、土塁、虎口	
S	長谷城跡	城跡跡	郭、堅切、土塁	

第4表 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財 関連文献一覧

No	書名	発行年	発行者
1	朝原町の遺跡－志々地区	平成元(1989)年	鳥取県朝原町教育委員会
2	互明古道跡	平成3(1991)年	鳥取県朝原町教育委員会
3	互明古道跡発掘調査報告書	平成4(1992)年	鳥取県朝原町教育委員会
4	梅ヶ追製瓦遺跡	平成13(2001)年	鳥取県朝原町教育委員会
5	梅ヶ谷尻たら跡	平成4(1992)年	鳥取県朝原町教育委員会
6	増補改訂鳥取県道地図I(吉雲・隱岐編)	平成5(1993)年	鳥取県教育委員会
7	板原Ⅱ遺跡<1>	平成5(1993)年	鳥取県教育委員会
8	森遺跡・板屋1遺跡・森尾山城跡・阿丹谷注溝跡<2>	平成6(1994)年	鳥取県教育委員会
9	門遺跡<3>	平成8(1996)年	鳥取県教育委員会
10	鳥取県近畿道沿岸考古調査報告書<2巻>山陰・山陽の歴史	平成10(1998)年	鳥取県教育委員会
11	志津見の民俗	平成2(1990)年	建設省中国地方建設局・鳥取県教育委員会
12	櫛原遺跡・谷川遺跡・森浦山手形古墳群<4>	平成9(1997)年	鳥取県教育委員会
13	板原Ⅲ遺跡<5>	平成10(1998)年	鳥取県教育委員会
14	中原遺跡<6>	平成11(1999)年	鳥取県教育委員会
15	下山遺跡(1)－銅鏡開闢決構の調査－<7>	平成12(2000)年	鳥取県教育委員会
16	神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡<8>	平成12(2000)年	鳥取県教育委員会
17	弓谷たたら	平成12(2000)年	鳥取県朝原町教育委員会
18	口井谷遺跡・良老細遺跡<9>	平成13(2001)年	鳥取県教育委員会
19	丸山遺跡・大村跡<10>	平成13(2001)年	鳥取県教育委員会
20	森V遺跡	平成13(2001)年	鳥取県朝原町教育委員会
21	くにびきの面神戸川	平成14(2002)年	国土交通省中国地方整備局・神戸川ラインサミット
22	櫛原遺跡(2)－自然科学研究編－<11>	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
23	下山遺跡(2)－縄文時代遺跡の調査－<12>	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
24	神原Ⅱ遺跡－1997年の調査成果－<13>	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
25	小丸遺跡<14>	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
26	既遺山・舞子谷遺跡(1)－遺跡・遺物編－<15>	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
27	貝谷遺跡<16>	平成15(2003)年	鳥取県教育委員会
28	鶴洞山・舞子谷遺跡(2)<17>	平成15(2003)年	鳥取県教育委員会
29	神原Ⅱ遺跡(3)<18>	平成15(2003)年	鳥取県教育委員会
30	口井谷遺跡<19>	平成15(2003)年	鳥取県教育委員会
31	板屋Ⅲ遺跡(2)<20>	平成15(2003)年・本書	鳥取県教育委員会
32	貝谷遺跡(2)・丸山全堀子遺跡<21>	平成15(2003)年	鳥取県教育委員会
33	鳥取県教育局「文化財群研究会研究会議室センター」年報第2号	平成8(1996)年	鳥取県教育委員会
34	鳥取県教育局「学習文化財調査後文化財調査会センター」年報第V号	平成9(1997)年	鳥取県教育委員会
35	鳥取県教育局「文化財群研究会研究会議室センター」年報第	平成10(1998)年	鳥取県教育委員会
36	鳥取県教育局「文化財群研究会研究会議室センター」年報第	平成10(1998)年	鳥取県教育委員会
37	鳥取県教育局「文化財群研究会研究会議室センター」年報第	平成11(1999)年	鳥取県教育委員会
38	鳥取県教育局「文化財群研究会研究会議室センター」年報第	平成11(1999)年	鳥取県教育委員会
39	鳥取県教育局「文化財群研究会議室センター」年報第	平成12(2000)年	鳥取県教育委員会
40	鳥取県教育局「埋蔵文化財調査会議室センター」年報第	平成12(2000)年	鳥取県教育委員会
41	鳥取県教育局「埋蔵文化財調査会議室センター」年報第X	平成13(2001)年	鳥取県教育委員会
42	鳥取県教育局「埋蔵文化財調査会議室センター」年報IX	平成13(2001)年	鳥取県教育委員会
43	鳥取県教育局「埋蔵文化財調査会議室センター」年報IX	平成13(2001)年	鳥取県教育委員会
44	鳥取県教育局「埋蔵文化財調査会議室センター」年報X	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会
45	かんどの流れ－志津見ダム予定地内の遺跡(1)～(6)	平成7～11 (1998～2000)年	鳥取県教育委員会
46	かんどの流れ－志津見ダム予定地内の遺跡(春風号)～	平成12(2000)年	鳥取県教育委員会
47	かんどの流れ－経島編－志津見ダム地内の遺跡	平成14(2002)年	鳥取県教育委員会

<内>は、県教育委員会発行の志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書の通し番号

第3章 調査の概要と方法

第1節 板屋遺跡のこれまでの調査

板屋遺跡は今回の調査までに3次の発掘調査を経ている。これらの調査による成果は、今回調査した調査区と関連が深いものであることから、ここに概略を述べる。

1. 板屋Ⅰ遺跡（1990年調査）

遺跡は板屋Ⅲ遺跡の北側に隣接する地点にあたり、谷部の緩斜面と尾根上について調査が行われている。この尾根上部分の南西側斜面が、今回の調査で東側調査区とした部分となる。

検出した遺構は、掘立柱建物跡11棟、土坑9基、積石遺構1基、鉄溶滲まり1基である。

掘立柱建物跡は江戸時代初頭頃の一群とややそれより古い可能性がある一群がある。土坑は、縄文時代後期のものが1基（SK09）あり、そこからは無文深鉢が倒立した状態で出土している。

ほとんどの土坑は近世の麻蒸しに関連した集石土坑であり、総数で6基検出されている。この土坑内部には石が詰め込まれており壁面は赤く焼けている。また2基の土坑（SK02・03）は、土坑の壁面に横口を持つなどの特徴から精錬鍛冶炉であった可能性が考えられている。

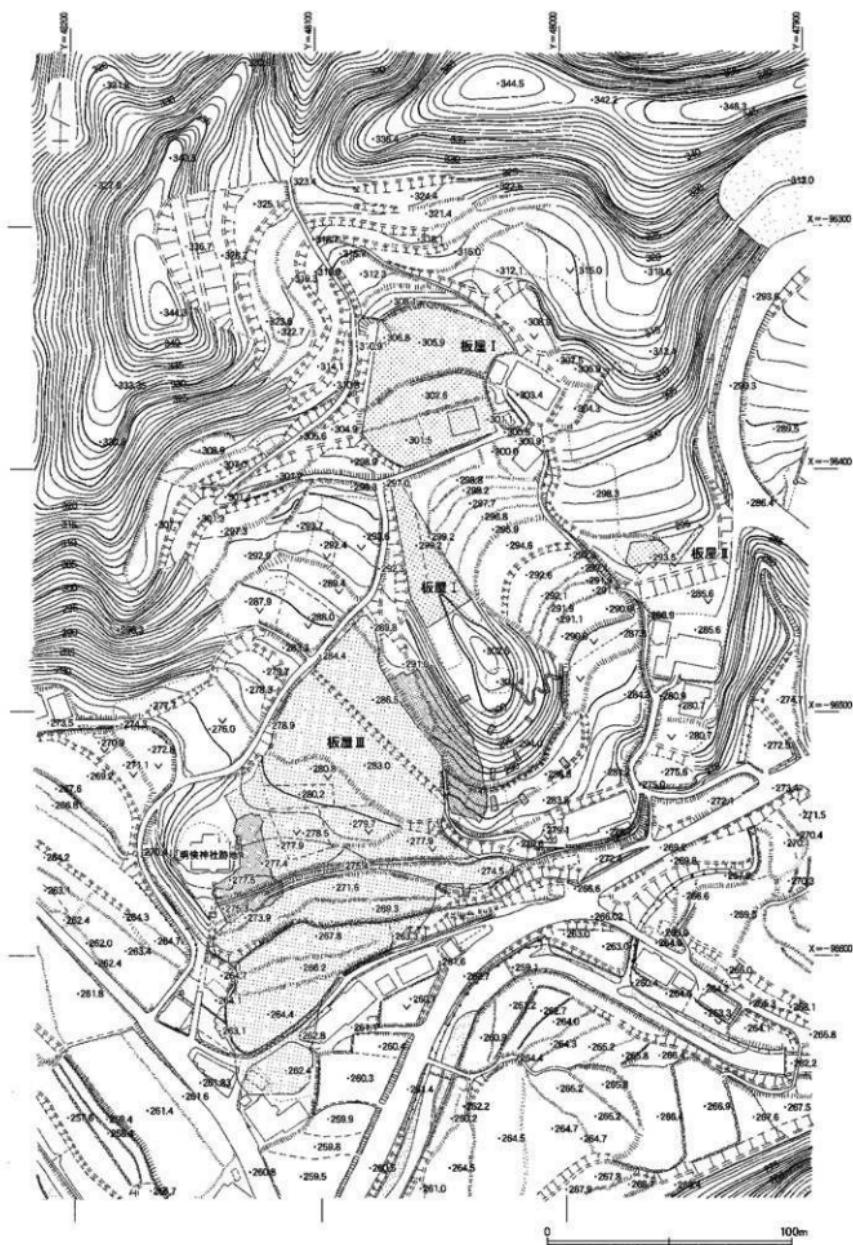
積石遺構は、宝鏡印塔の破片を伴っている遺構であり中世末から近世初頭のものと推測される。宝鏡印塔は今回の東側調査区でも相輪部の破片が出土しており関連するものと思われる。

2. 板屋Ⅱ遺跡（1992年調査）

遺跡は板屋Ⅲ遺跡の北東側の丘陵緩斜面に位置している。検出された遺構は土坑15基である。この土坑の性格については墓坑であると考えられているが、掘立柱建物跡の柱穴が重複している可能性も指摘されている。また、SK02のように粘土が貼られ桶の痕跡を持った土坑も存在している。検出された遺構の時期は、出土した陶磁器より中世末～近世初頭、近世の中頃～後半の2つのいずれかの時期に属するものと考えられる。

3. 板屋Ⅲ遺跡（1994年～1996年調査）

前回の調査によって縄文時代の三瓶山の噴火による火山灰の堆積と遺構・遺物の関係が明らかになっている。検出された遺構は、非常に多く縄文時代から近世の各時代のものがある。特に縄文時代草創期～早中期頃の住居跡の検出によって、神戸川上流域における人々の歴史が約1万年前まで遡ることが明らかになっている。また、弥生時代前期の配石墓、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良・平安時代の各時代の住居跡が見つかっている。新しいところでは中世～近世のこの地域の特色を表す遺構が見つかっている。中世のものでは精錬鍛冶炉が2基見つかっている。これは、平安時代末頃から鎌倉時代初頭頃の鍛冶炉であり、この地域で最も古い時期の製鉄の痕跡となる資料である。近世では麻蒸しに関連する遺構が多数見つかっている。この遺構は、集石土坑・掘立柱建物跡・粘土貼土坑の3つの遺構がセットとなるもので、近世から大正末頃まで盛んに行われた麻の生産の様子が良く分かるものである。



第3図 板屋III遺跡調査区配置図 ($S = 1/2,000$)

第2節 調査区の配置（第5図）

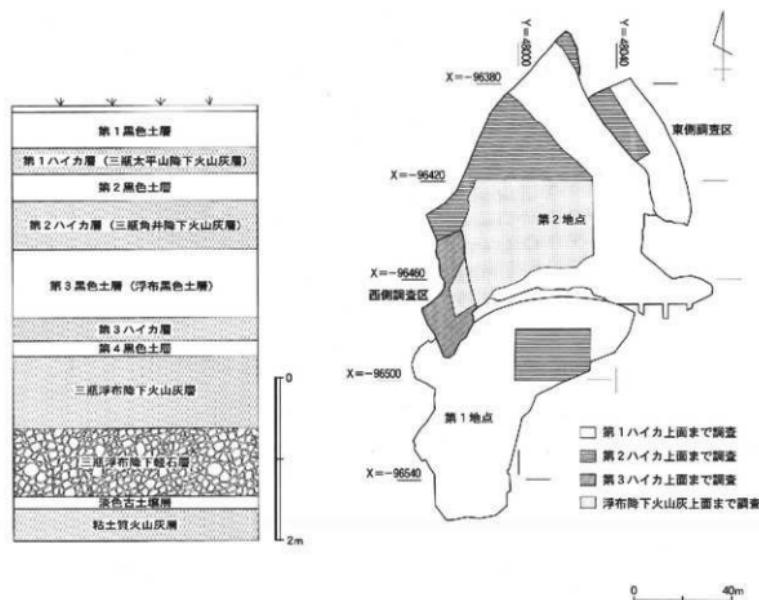
板屋Ⅲ遺跡の今回の調査では前回の調査区の北東側と西側に当たる部分であることから、前者の調査区を東側調査区、後者を西側調査区と呼称して調査している。東側調査区は、地形的にやや傾斜の急な斜面であり、西側調査区は日明剣神社境内地内の緩やかな緩斜面にあたる。

調査区から出土する遺構に伴わない遺物の取上については、前回までの調査で設定された1辺10mのグリッドを使用した。グリッドは国土座標系による基準点を設け、X = -96,580・Y = 47,910を原点として、10m間隔で北に1・2～23、東にA・B～Pといった基準線を設け、その北西側の交点の名称（例えば4 E・・・）で呼称している。ただし、東側調査区については出土遺物が少量であることや急な斜面であることから設定したグリッドを使用していない。

第3節 遺跡の層序と調査した遺構面（第4図）

板屋Ⅲ遺跡の層序は、基本的に表土層－第1黒色土層－第1ハイカ層－第2黒色土層－第2ハイカ層－第3黒色土層－第3ハイカ層－第4黒色土層－三瓶浮布降下火山灰層－三瓶浮布降下輕石層－淡色古土壤層－粘土質火山灰層となっている。この中で第3ハイカ層は堆積が薄い層であり、今回の調査で西側調査区の半分ほどで確認されるのみであり、基本的に第3黒色土層直下では三瓶浮布降下火山灰層が検出されている。

ハイカ層とは、地元で三瓶山の火山灰を指す呼称であり、調査の便宜上そのまま土層名として用いている。また、地学的には第1ハイカ層は三瓶太平山降下火山灰層、第2ハイカ層は三瓶角井降



第4図 板屋Ⅲ遺跡土層模式図・遺構面の位置関係 (S = 1/60, 1/2,000)

下火山灰層、第3黒色土層は浮布黒色土層と呼ばれており、最下層の粘土質火山灰層は三瓶池田降下軽石の上部をなす火山灰の可能性が高い層である。

これらの火山灰層の年代は、¹⁴C年代の成果よりおおよそ第1ハイカ層が3,600年～3,700年前、第2ハイカ層が4,700年前～4,800年前、第3ハイカ層が9,000年から1万年前、浮布降下火山灰層が1.5万～1.6万年前頃と思われる。

各時代の遺物を包含している層は、第1黒色土層、第2黒色土層、第3黒色土層であった。なお第4黒色土層は、前回の調査で僅かながら遺物が出土しているが、今回の調査では人工的なものは一切認められなかった。

遺構が検出される面は、第1ハイカ層上面、第2ハイカ層上面、第3ハイカ層上面、浮布降下火山灰層上面の4面であったが、前回の調査ではこれに第2黒色土層上面、第3黒色土層上面の2面を加えた計6面で遺構が確認されている。

実際の調査では全て第4黒色土層を除去するまで発掘を行っているわけではなく、必要な部分についてのみ下層まで掘り下げている。今回の東側調査区では、一部を第2ハイカ層まで調査しており、西側調査区については全体を第3黒色土層まで除去し、一部について第4黒色土層まで除去している。

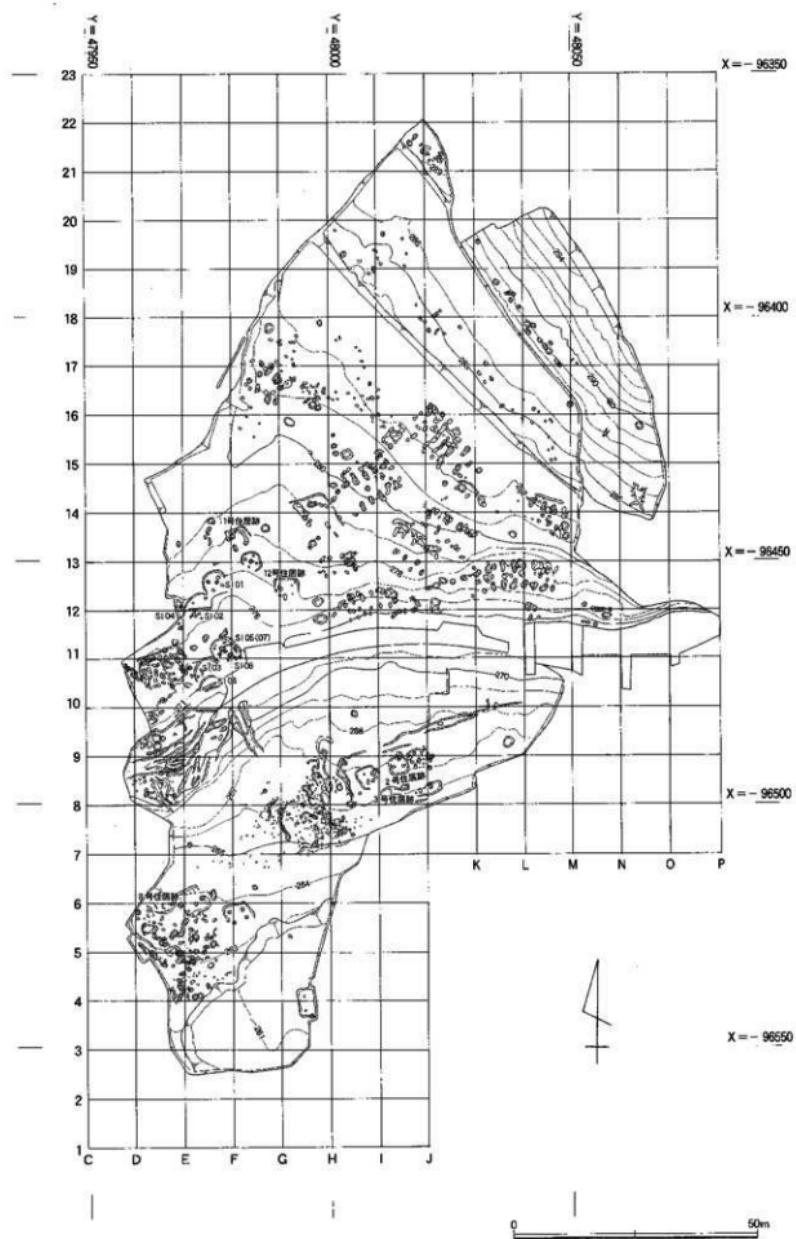
第4節 調査の概要

調査は、東側調査区と西側調査区の両調査区とともに第1ハイカ層上面で精査をおこなった。基本的に表土は重機によって除去し、第1黒色土から人力による精査を行った。この今回の第1ハイカ層上面までの調査成果とこれまでの成果を合成したものが第5図で、検出遺構については第5表にまとめてある。この図からも明らかのように東側調査区では、地形が斜面であることから土坑のみが検出されており住居跡等は見つかっていない。一方西側調査区では前回も検出されている弥生時代後期の竪穴住居跡が8棟検出され、今回の調査区まで集落跡が広がっていたことが確認され、遺跡内ではこの付近が弥生時代後期の集落の中心部であることが確認された。

第1ハイカ層調査終了後には、東側調査区では一部を第2ハイカ層上面まで掘り下げ土坑がいくつか検出されたのみで遺物も僅かであった。このことから当調査区は遺跡の中心部ではなく縁辺部に当たるものと考えられ、かつ前回の調査でもこの付近は第1ハイカ層上面で終了していることから、今回も調査はこの第2ハイカ層上面検出時点で終了した。

西側調査区では、第1ハイカ層を重機によって除去、第2黒色土層を人力によって精査し、第2ハイカ層上面で遺構を精査している。第2黒色土層では第1黒色土層と比べ遺物の量が非常に少なく、遺構についても落し穴1基と性格が特定できない土坑とピットがいくつか見つかっただけであった。また、前回の調査では第2黒色土層上面で焼土面等の遺構がいくつか見つかっているが、今回の調査では検出されなかった。

第2ハイカ層を重機によって除去した後の第3黒色土層の精査では、その土層上面を精査したが前回の調査で見つかっている焼土面は検出されなかった。ただし、大型の石材が第3黒色土層上面で数多く確認され、その一部は磨り面が認められるものであった。また、土器等の遺物も第3黒色土層の上部で出土し、下部ではほとんど出土しなかった。第3ハイカ層検出後には第4黒色土層の一部を調査して浮布火山灰層上面を検出し、その面で明確な遺構と遺物が検出されなかつたことから調査は終了している。



第5図 調査用グリッド設定図 ($S = 1/1,000$)

第5節 調査方法

現地調査は、表上及びハイカ層については重機によって除去し、遺物包含層である第1～第4黒色土層については人力で精査した。各面で検出した遺構は土層断面の記録を行った後に、完掘し写真撮影を行った。遺構の実測については遺跡調査システム「サイト」を使用し、コンピューターに記録し図化したものを必要に応じて現地で校正して完成させた。また、遺物包含層や住居跡の覆土から出土する遺物についても「サイト」によってその出土ポイントを記録した後に取り上げた。各遺構面の調査終了時点では、「サイト」を併用しながら25cmセンター、スケール1/100の測量図を作成し、必要に応じてリモコンヘリによる空撮及び図化も行った。

出土した遺物については、水洗、注記、接合後、分類を行って破片数等についてカウントし、各分類の代表的なものを数点選択し図化し掲載した。なお堅穴住居跡内出土の遺物については、分類後に床面付近のものは図化可能なものは全点図化し、覆土出土の遺物には各分類のものを数点図化して報告書に掲載している。

第5表 板屋Ⅲ遺跡 遺構面と検出された主な遺構

遺構面	検出された主な遺構			時期
	第一次調査	西側調査区	東側調査区	
第1ハイカ層上面	旧河道、土坑・ピット群		上坑群	縄文時代後期中葉～晩期
	配石遺構6			弥生時代前期後半
	堅穴住居跡5			弥生時代後期
	堅穴住居跡5			古墳時代後期
	堅穴住居跡2			奈良時代後半～平安時代初め
	掘立柱建物跡1、溝状遺構2			平安時代末～鎌倉時代初め
	精鍊鍛冶炉2、炭窯1			室町時代
	掘立柱建物跡1以上、溝状遺構1、製鍊炉2、古墓1		鉄器埋納遺構1	江戸時代
第2黒色土層上面	掘立柱建物跡10、古墓9、集石上坑群	掘立柱建物跡1(鍛冶炉付)	古墓群	
	焼土面9、集石炉1、土坑群			縄文時代後期中葉
第2ハイカ層上面	焼土面3、集石炉2、落し穴1、土坑群・ピット群	落し穴1、土坑群・ピット群	土坑群・ピット群	縄文時代前期末～後期中葉
第3黒色土層上面	焼土面12			縄文時代前期前半～後半
第3ハイカ層上面 浮布火山灰層上面	住居跡2、集石炉2、落し穴5、土坑群・ピット群	集石遺構1、落し穴1、土坑群・ピット群		縄文時代草創期末～早期前半

第4章 東側調査区の調査結果

第1節 調査の概要

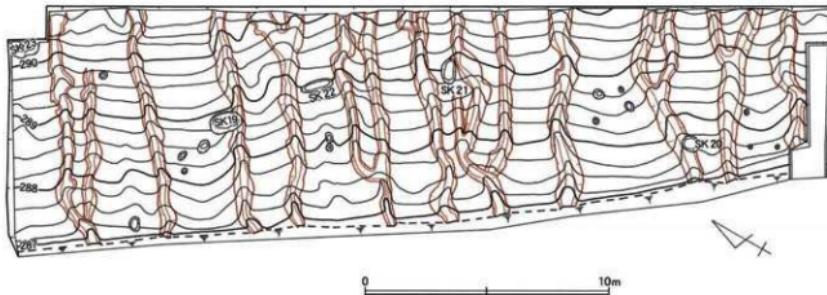
東側調査区は、標高290m～295m付近のやや急な斜面部分であり、調査前の状況は畑として利用されていたことから段上に平坦面が作り出されていた。また、調査区の下方の南西側は大きく削平されており表土除去後に第3黒色土層が一部検出された。

調査範囲は平成12年のトレンチ調査の結果に基づくものであり、トレンチ調査では遺物が数点と土坑状の落ち込みが検出されていた。また、以前の調査で第2ハイカ層上面と推測される面から縄文土器を伴う土坑が検出されていることから、今回の第2黒色土層からも縄文時代の土坑が検出される可能性が考えられていた。

調査は平成13年4月5日から開始し第1黒色土層の調査を5月11日に終了した。その後地形測量と第1ハイカ層の重機による除去の期間を経て、第2黒色土層の調査を5月21日～6月22日まで行って終了した。調査の結果、第1ハイカ層上面からは縄文時代に遡る可能性をもつ土坑と近世の墓坑、鉄鍋と鉄鎌を埋納した祭祀遺構が検出された。この層からは、縄文時代から近世までの遺物が出土しているが少量であった。第2ハイカ層上面からは土坑を5基を検出し、縄文土器が数点出土している。また、調査区の南西側の削平された平坦面でも土坑を1基検出しているが、上部が削平されており厳密な遺構面は明らかではないが、第2ハイカ層上面から掘り込まれた可能性が考えられるものである。

第2節 第2黒色土層の調査（第6図）

第2黒色土層の調査は、調査区の北西側の一角の300m²程度を対象にしておこなった。調査の結果第2ハイカ層上面から11条の自然流路と土坑4基、ビット群が検出された。また、遺物は少量ながら第2黒色土層中から縄文土器が出土している。自然流路は幅1m程の規模のものが斜面に沿って検出され、ハイカ層混じりの硬く締まった暗黒褐色土が堆積していた。



第6図 東側調査区第2ハイカ層上面完掘状況図 (S = 1/200)

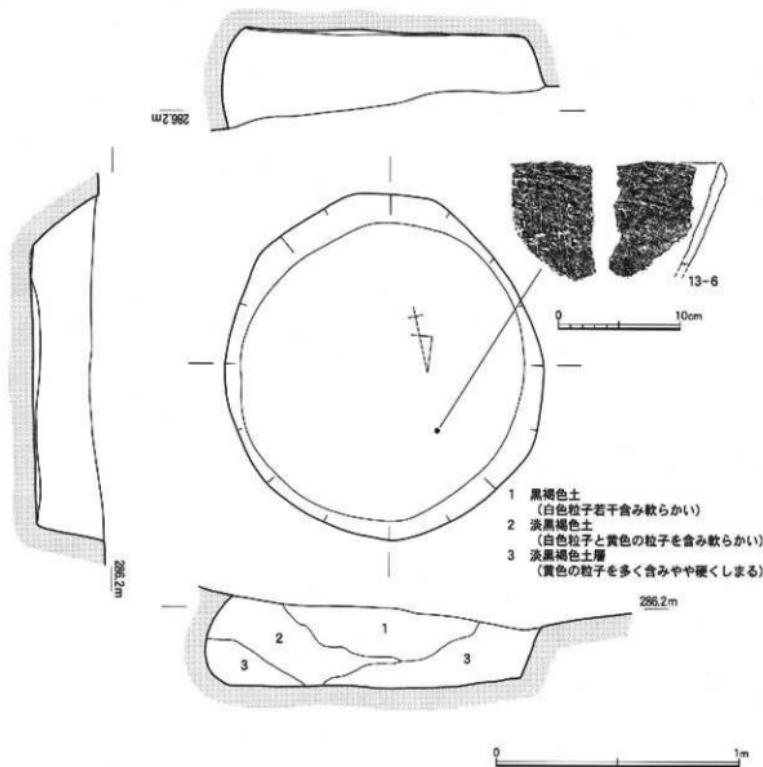
1. 縄文時代の土坑

第2黒色土層の調査では、第2ハイカ層上面で縄文時代の土坑を5基検出している。また、第2ハイカ層上面から掘り込まれている可能性を持つ土坑が1基（SK03）存在している。土坑内からの出土遺物は、SK03の縄文土器1点以外は確認されなかった。

(1) SK03 (第7図)

調査区の南西側の調査区から外れた標高256m付近で検出した土坑である。この土坑の検出位置は過去の削平によってできた平坦面にあたり、現状では第3黒色土層を掘り込んでいることが確認される。実際の掘り込まれた面は厳密には確定できないが、おそらく第2黒色土層又は第2ハイカ層から掘り込まれた可能性が高いものである。

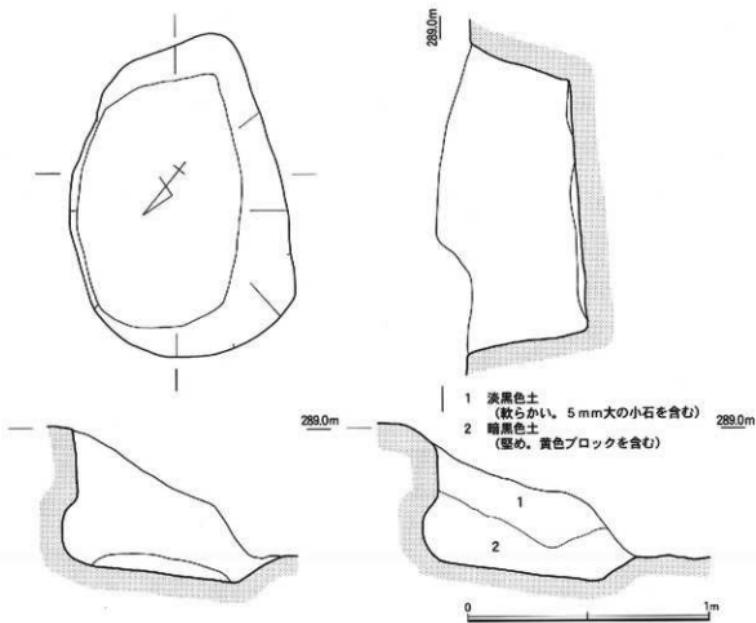
平面は円形を呈し規模は径1.32m、深さ0.42mで断面の形状が袋状になるものである。土坑の覆土中からは縄文土器（第13図6）が1点出土している。土器は粗製深鉢の口縁部片で時期は縄文時代前期末～後期中葉頃のいずれかと思われる。



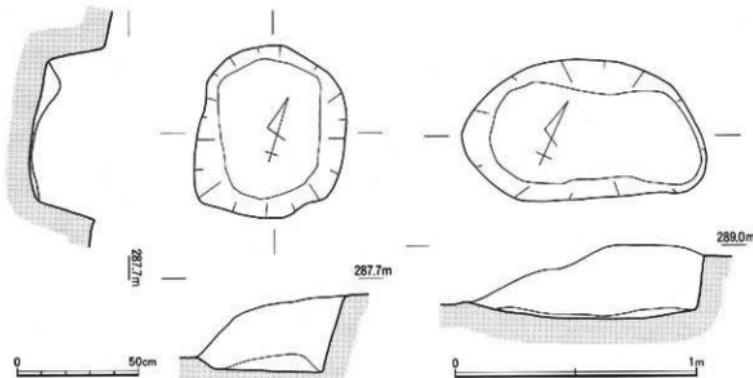
第7図 東区SK03実測図 ($S = 1/20, 1/4$)

(2) SK 19 (第8図)

調査区の北側標高289m付近で検出した楕円形の土坑であり、壁の南東部分が自然流路と切り合っている。検出状況から判断して自然流路が堆積によって埋まった後に土坑が掘り込まれているものと考えられた。土坑の規模は長径1.32m、短径0.85m、深さ0.48mである。



第8図 東区SK 19実測図 ($S = 1/20$)



第9図 東区SK 20実測図 ($S = 1/20$)

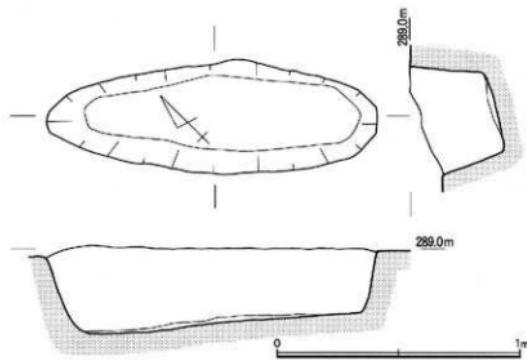
第10図 東区SK 21実測図 ($S = 1/20$)

(3) SK 2 0 (第9図)

標高288m付近で検出したやや不整な椭円形の土坑である。規模は長径0.71m、短径0.62m、深さ0.31mのものであり、底面は平坦である。

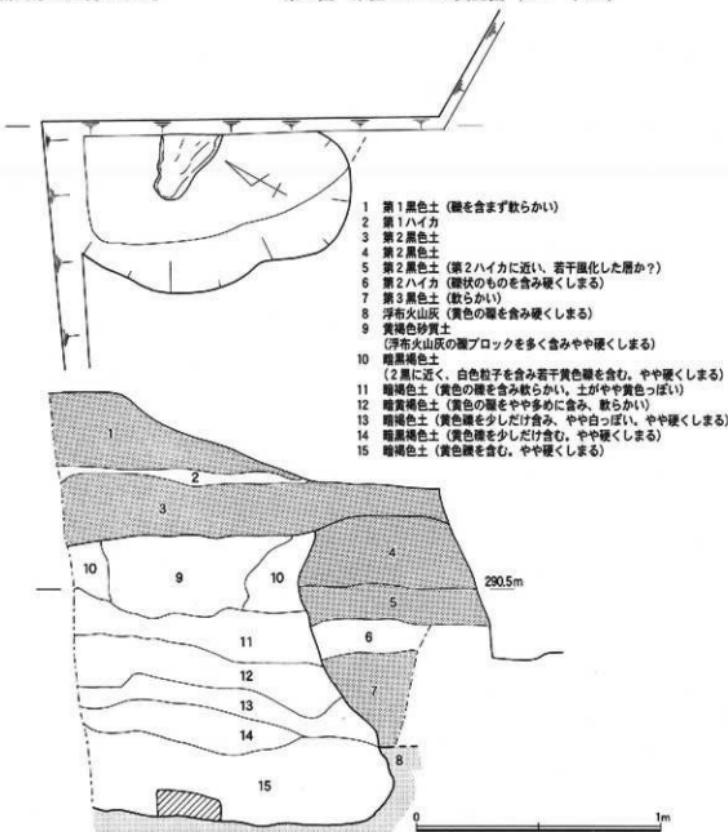
(4) SK 2 1 (第10図)

調査区の中央の標高28
9m付近で検出した不整
な椭円形の土坑である。



第11図 東区SK 2 2実測図 ($S = 1/20$)

- 1 第1黒色土 (縞を含まず軟らかい)
- 2 第1ハイカ
- 3 第2黒色土
- 4 第2黒色土
- 5 第2黒色土 (縞2ハイカに近い、若干風化した層か?)
- 6 第2ハイカ (縞状のものを含み硬くしまる)
- 7 第3黒色土 (軟らかい)
- 8 浮布火山灰 (黄色の縞を含み硬くしまる)
- 9 黄褐色砂質土 (浮布火山灰の縞ブロックを多く含みやや硬くしまる)
- 10 離黑色土
- 11 離褐色土 (2層に近く、白色粒子を含み若干黄色縞を含む。やや硬くしまる)
- 12 離黃褐色土 (黄色の縞を含み軟らかい。土がやや黄っぽい)
- 13 離黃褐色土 (黄色縞を少しだけ含み、やや白っぽい。やや硬くしまる)
- 14 離黑色土 (黄色縞を少しだけ含む。やや硬くしまる)
- 15 離褐色土 (黄色縞を含む。やや硬くしまる)



第12図 東区SK 2 3実測図 ($S = 1/20$)

規模は長径1.0m、短径0.56m、深さ0.23mのものであり、底面は平坦である。

(5) SK 22 (第11図)

標高289m付近で検出したやや細長い楕円形の土坑である。規模は長径1.36m、短径0.45m、深さ0.36mで底面は平坦である。

(6) SK 23 (第12図)

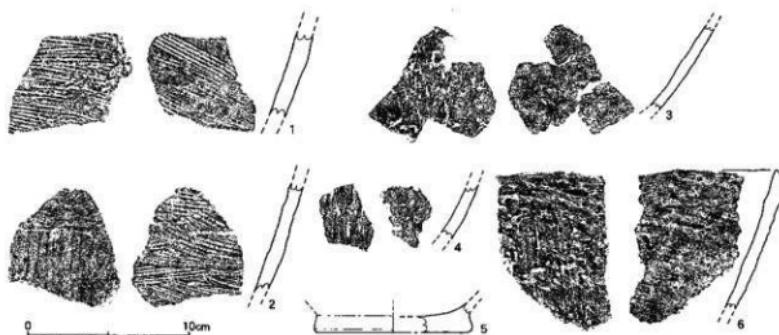
調査区の北側隅の標高290m付近で検出した土坑であり、調査区外にも広がる遺構であり全容については分からぬものである。平面形は不整な楕円形と思われ、その規模は現状で長径1.11m、短径0.65m、深さ1.16mである。この土坑は調査区の壁によって十層断面の詳細が分かる例であり、掘り込まれている面が第2黒色土層の途中であることが確認された。また断面形状が底面で広がる袋状である。土坑の底面は平坦で浮布火山灰層まで掘られており、そこから石材が出土している。石材は確認できる範囲では長径0.3m、短径0.23m、厚さ0.1mのものである。

2. 第2黒色土層出土遺物 (第13図)

第2黒色土層中からは、縄文土器が数点出土しているが、いずれも小片であり全容の分かる個体はなかった。これらの土器は第2黒色土層の上部から数cm程下がった最も黒い土色を呈する部位から出土している。

出土した縄文土器1～4は粗製の鉢の脇部片と考えられ、条痕や粗いナデが内外面に認められる個体である。5は底部の破片であるが風化が著しく調整等については明瞭ではない。

これらの縄文土器の時期は粗製土器であるため明確にはし難いが、第2黒色土層中から出土する土器が縄文時代前期末～縄文時代後期前葉に収まるものであることから、そのあたりのいずれかの時期と推測される。



第13図 東区第2黒色土層及びSK 03出土縄文土器実測図 (S = 1 / 3)

第3節 第1黒色土層の調査

第1黒色土層の調査では、

第1ハイカ層上面から遺構を検出している。遺構のほとんどは標高289m付近の傾斜が緩やかになっている部分で検出している。

検出した遺構は土坑17基、溝状遺構1基、祭祀遺構1基であり、時期の判明するものは近世以降のものであるが、土坑の中で覆土の状態から近世以前のものも含まれていると考えられた。

1. 土坑

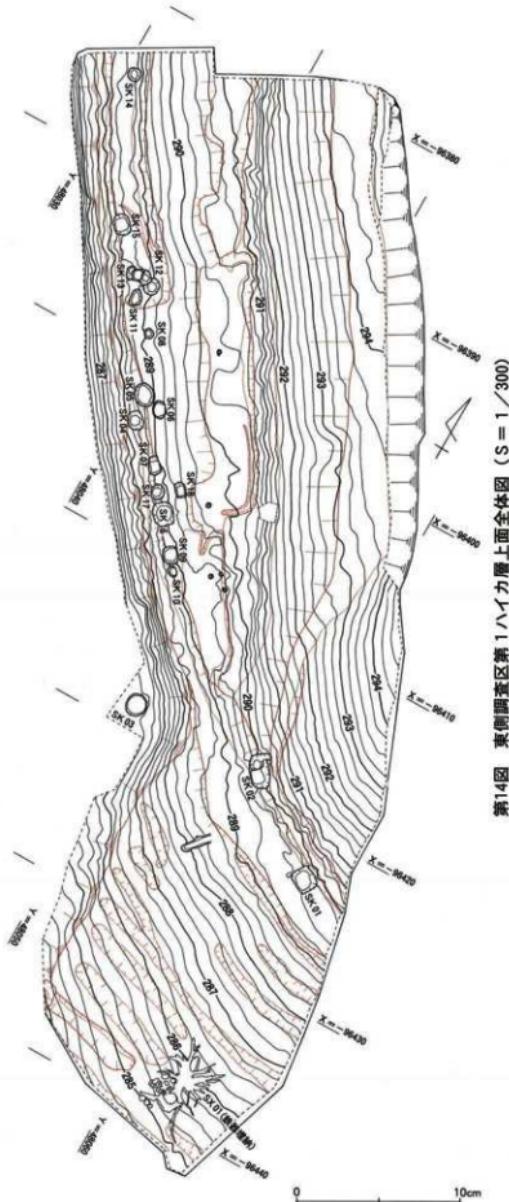
検出した土坑は、覆土の硬く締まっているものと、非常に軟らかいものとの2つのタイプが存在していた。覆土が軟らかいものには確実に近世の墓坑として考えられるもののが存在していることから、この覆土のタイプは近世以降のものと考えて問題ないものと推測された。一方覆土の硬い土坑はそれ以前のものと考えられ、縄文時代まで遡る可能性を持つものが含まれているものと思われる。

以上の理由からここでは、土坑を覆土から2つの時期に分けて記述することとする。

(1) 近世以前の土坑

SKO 6 (第15図)

標高289m付近で検出した不整な橢円形橢円形の土坑である。規模は長径0.9m、短径0.76m、深さ0.6mのもの

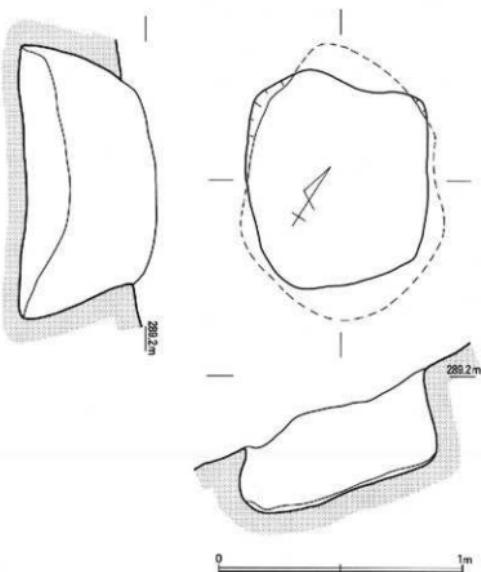


第14図 東側調査区第1ハイカ層上面全体図 (S = 1 / 300)

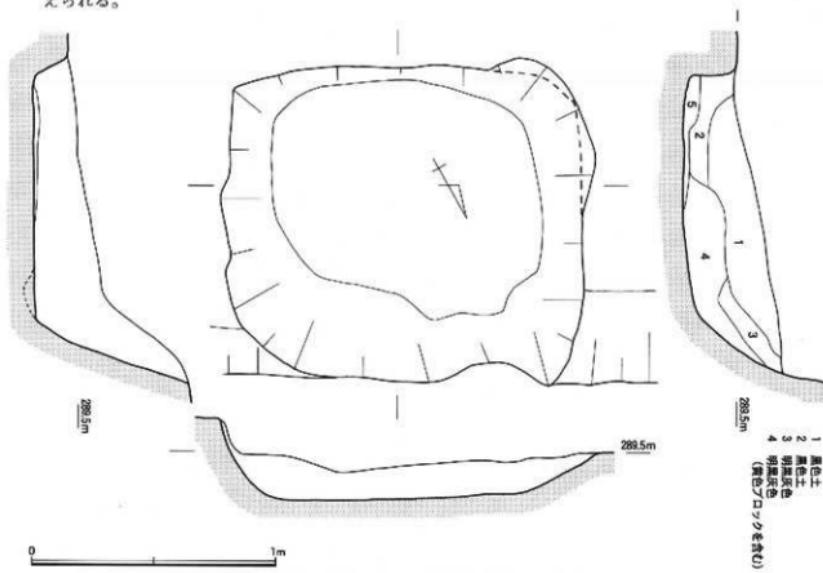
で底面は平坦であるが南西側に若干低く傾斜している。また断面は袋状に底面近くが広がる形状である。土坑内から遺物は出土していないが、覆土の硬さや断面形状から近世以前の縄文時代～弥生時代のものである可能性が考えられる。

SK01 (第16図)

調査区の東南側の標高290m付近で検出したやや不整な方形の土坑である。規模は長径1.50m、短径1.29mである。土坑の南側は後世の加工によって削平されており、浅くなってしまって現在で深さ0.63mのもので底面は平坦である。遺物は出土していないが、覆土が硬く締まっていることから近世以前の時期が考えられる。



第15図 東区SK06実測図 (S = 1/20)



第16図 東区SK01実測図 (S = 1/20)

SK 02 (第17図)

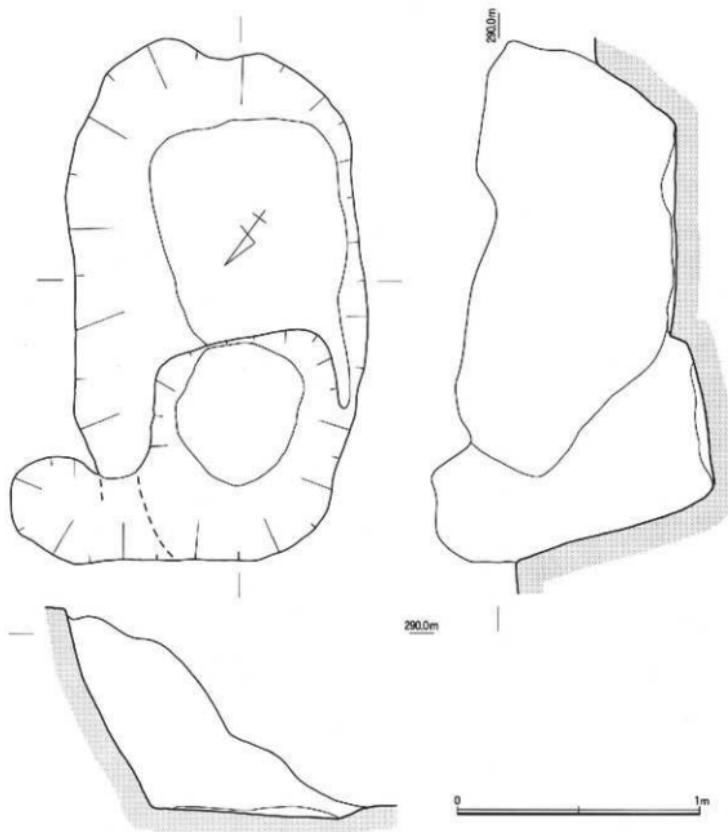
調査区の南東側の標高290m付近で検出した土坑で、SK 01とはほぼ同じ並びにあることから時期的にも近い時期のものと思われる。土坑の平面形状はやや不整な方形であるが、北西側が後世の擾乱によって深く掘り下げられている。

規模は長径2.07m、短径1.20m、深さ0.85mで底面は平坦に加工されている。土坑内からは遺物は出土していないが、覆土が硬く締まっていることから近世以前の時期が考えられる。

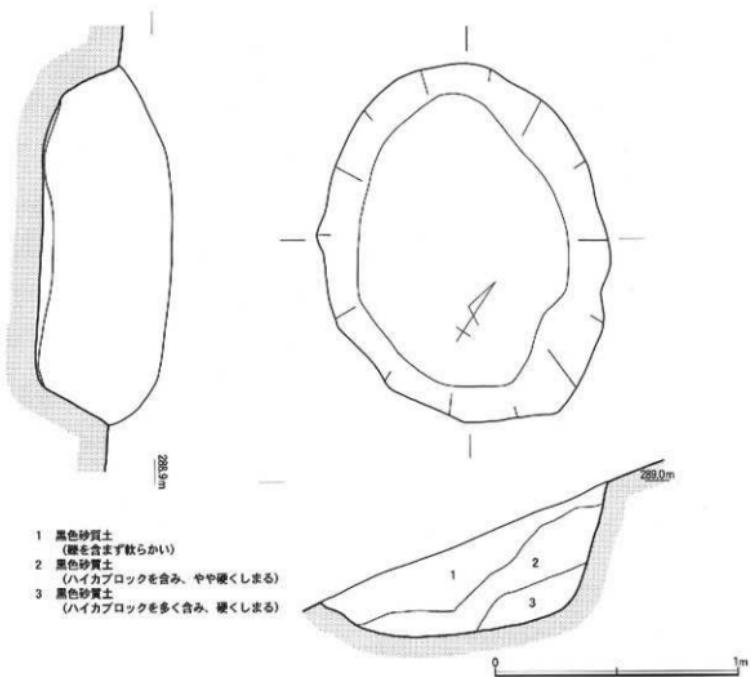
SK 05 (第18図)

土坑は標高289m付近のSK 06の西側に近接した位置に掘り込まれている。平面形状は不整な梢円形であり底面は平坦に加工されている。

規模は長径1.47m、短径1.20m、深さ0.62mである。土坑内からは遺物は出土していないが、覆



第17図 東区SK 02実測図 ($S = 1/20$)



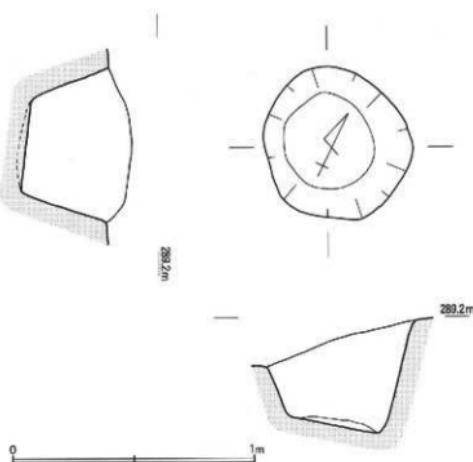
第18図 東区SK 05実測図 ($S = 1/20$)

土が硬く縮まっていることから
近世以前の時期が考えられる。

SK 08 (第19図)

標高289m付近で検出した土坑である。平面形は不整な円形であり、その規模は径0.6m、深さ0.46mである。底面は平坦であるが南西側に若干低く傾斜している。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土が硬く縮まっていることから近世以前の時期が考えられる。



第19図 東区SK 08実測図 ($S = 1/20$)

SK 11 (第20図)

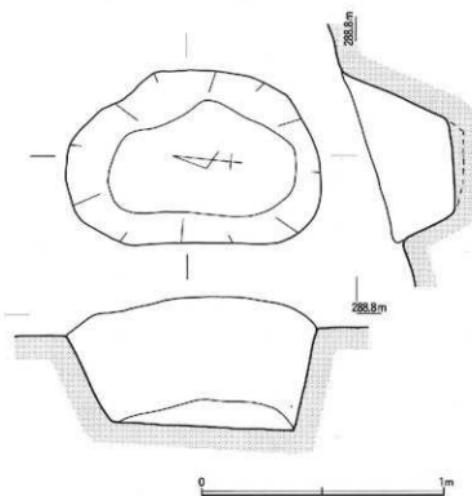
標高289m付近で検出した土坑である。平面形は不整な楕円形で底面は平坦に加工されている。規模は長径1.04m、短径0.70m、深さ0.46mである。土坑内から遺物は出土していないが、覆土が硬く締まっていることから近世以前の時期が考えられる。

SK 14 (第21図)

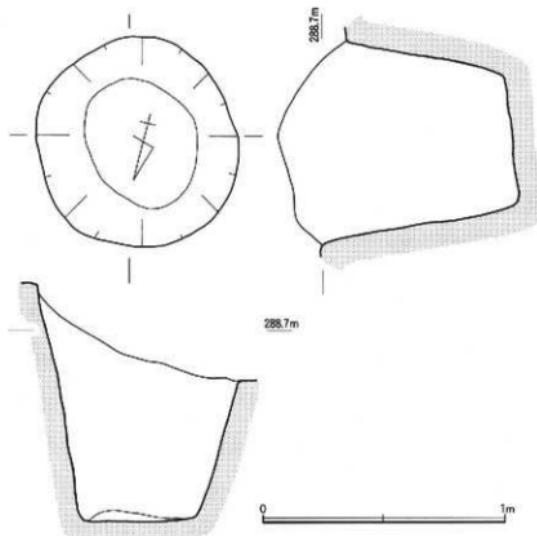
調査区の北端標高289m付近で検出した土坑である。この土坑は他の土坑と異なり単独で存在している点が特徴的である。平面形はやや不整な円形で底面は平坦に加工されている。

規模は長径0.85m、短径0.83m、深さ0.97mで、他の土坑と比べて深く掘り込まれている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土が硬く締まっていることから近世以前の時期と考えられる。



第20図 東区SK 11実測図 (S = 1/20)



第21図 東区SK 14実測図 (S = 1/20)

SK 13 (第22図)

標高289m付近で検出した土坑である。これは1つの土坑と考えて調査したが、調査の結果3つの円形土坑が重なり合っている可能性も考えられた。

ただし1つの土坑として認識していたこともあり、上層断面の観察では切り合っている状況は確認できなかった。

ここでは記述の上で
の便宜上東側からA土
坑、B土坑、C土坑と
呼称して説明したい。

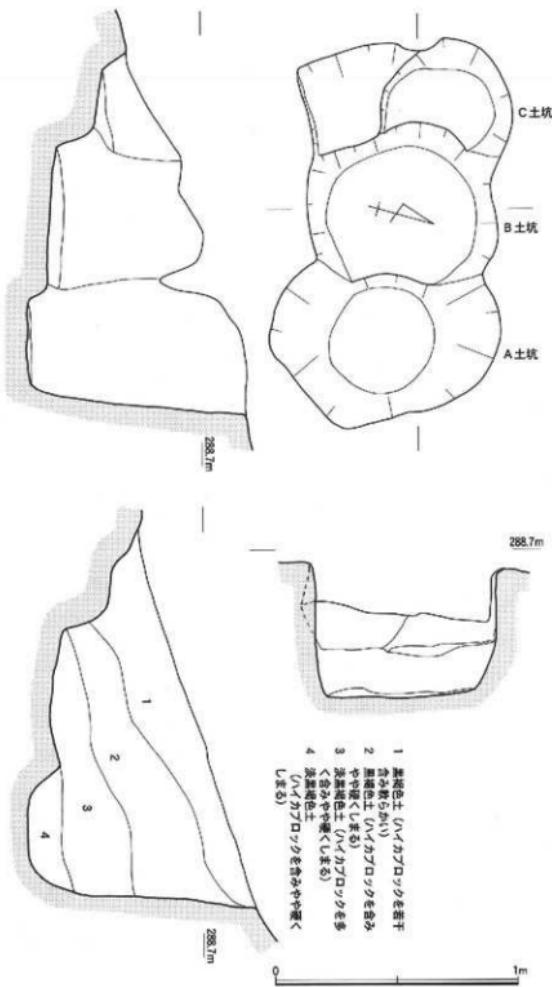
A土坑は径0.95m、
深さ0.9mの規模で3
つの土坑では最も深く
掘られている。

B土坑は径0.78m、
深さ0.65mの規模で底
面は平坦である。

C土坑は径0.53m、
深さ0.35mの規模で底
面は平坦であり、非常
に浅く掘られたもので
ある。

これらの土坑が一連
のものであるとすれば、
C土坑からA土坑に向
かって階段状に深くな
る土坑として捉えられ
るが、その性格につい
ては明確にできないも
のである。

土坑内から遺物は出
土していないが、覆土
が硬く締まっているこ
とから近世以前の時期
と考えられ、また近接
するSK 12との切り
合い関係からSK 12
より古い土坑である。



第22図 東区SK 13実測図 (S = 1/20)

(2) 近世以降の土坑

近世以降の土坑としたものの中では、確実に墓坑として考えられるSK15とSK16の2つが存在している。この2つの土坑は人骨が出土しており、覆土もハイカ層が混じった非常に締まりのない軟らかい土層であった。この2つの土坑と良く似た覆土の土坑を近世以降の土坑と推測され、またその検出位置も集中している。

SK04 (第23図)

標高289m付近で検出した土坑であり、平面形は不整な隅丸方形に近い形状である。規模は長径1.19m、短径0.94m、深さ0.88mで、底面は平坦に加工されている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカ混じりの軟らかい土層であることから近世以降のものと考えられる。

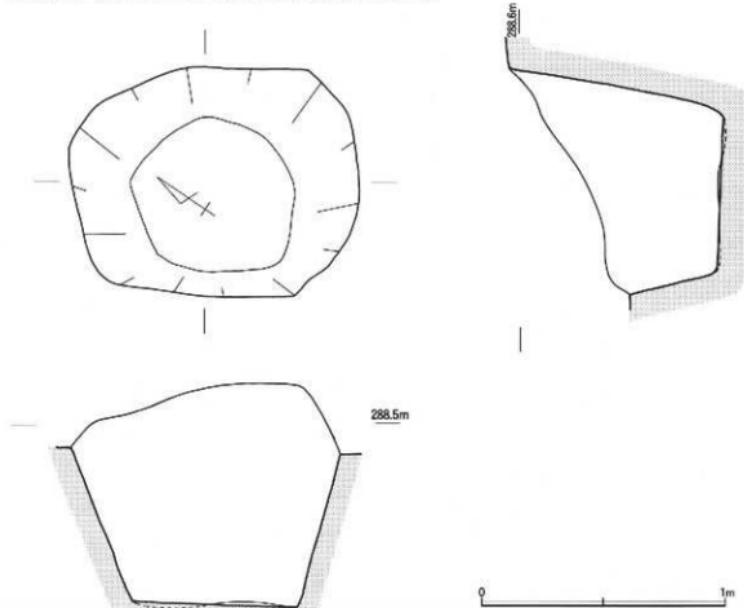
SK10 (第24図)

標高289m付近で検出した土坑であり、平面形はやや小形の不整な梢円形である。規模は長径0.67m、短径0.51m、深さ0.49mで、底面は平坦に加工されている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカ混じりの軟らかい土層であることから近世以降のものと考えられる。

SK07 (第25図)

標高289m付近で検出した土坑であり、平面形はやや不整な方形である。規模は長径1.18m、短径0.74m、深さ1.00mで、底面は平坦に加工されている。



第23図 東区SK04実測図 (S = 1/20)

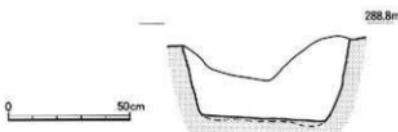
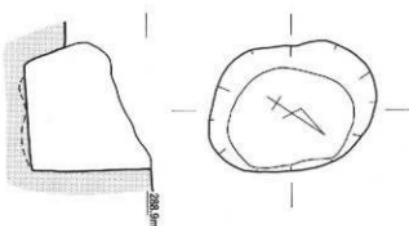
土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカ混じりの軟らかい土層であることから近世以降のものと考えられる。

SK 17 (第26図)

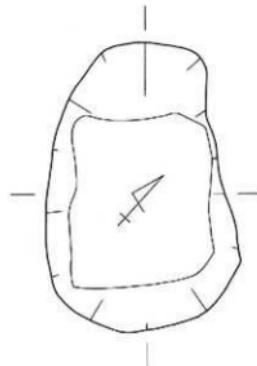
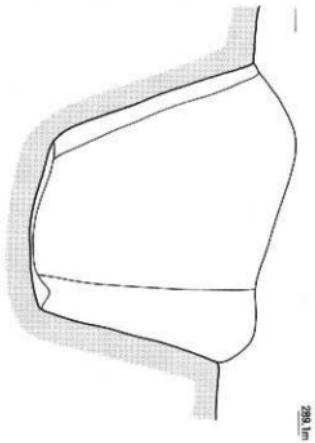
標高289m付近で検出した土坑であり、墓坑であるSK 16と近接している。この位置関係からこの土坑も墓坑である可能性が考えられる。

平面形はやや小形の不整な円形であり、規模は長径0.92m、短径0.86m、深さ0.74mで、底面は平坦に加工されている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカ混じりの軟らかい土層で



第26図 東区SK 10 実測図 (S = 1/20)



- 1 暗褐色砂質土
(黒色土をブロック状に含み軟らかい)
- 2 暗褐色砂質土
(ハイカブロックを含み軟らかい)
- 3 暗褐色砂質土
(ハイカブロックと黒色土をブロック状に含み軟らかい)
- 4 黒褐色質土
(ハイカブロックを多く含み、やや硬くしまる)



第28図 東区SK 07 実測図 (S = 1/20)

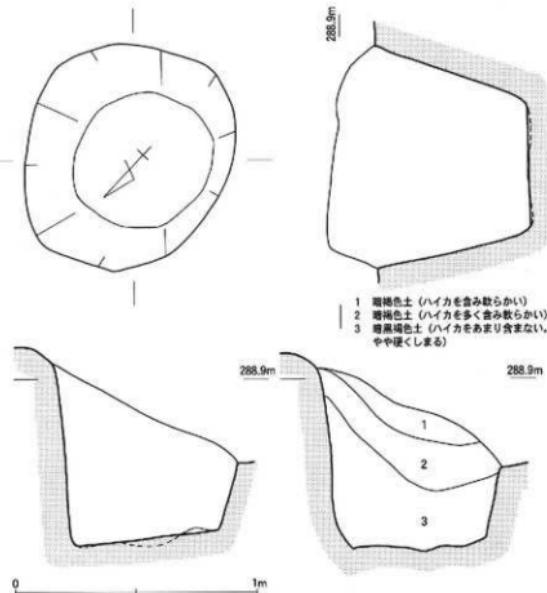
あることや近接した位置に墓坑があることから近世以降のものと考えられる。

SK 09 (第27図)

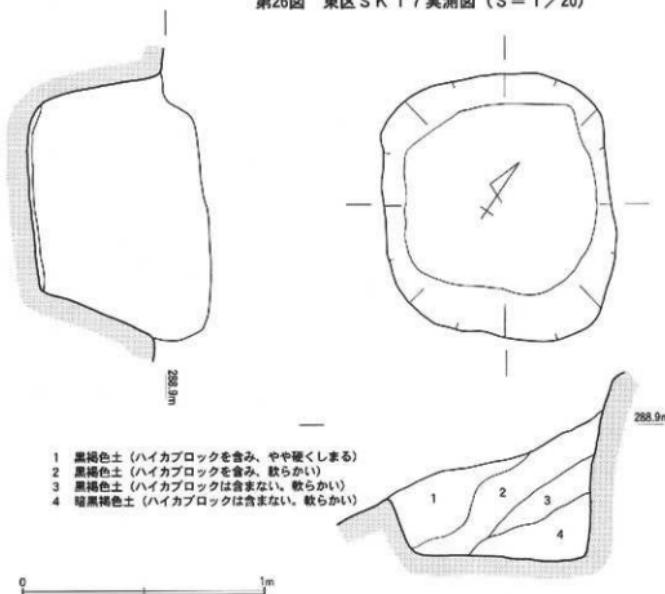
標高289m付近で検出した土坑で、SK 10の西側に近接している。

平面形はやや不整な方形であり、規模は長径1.08m、短径0.94m、深さ0.75mで、底面は平坦に加工されている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土の状況から近世以降のものと考えられる。



第26図 東区SK 17実測図 ($S = 1/20$)



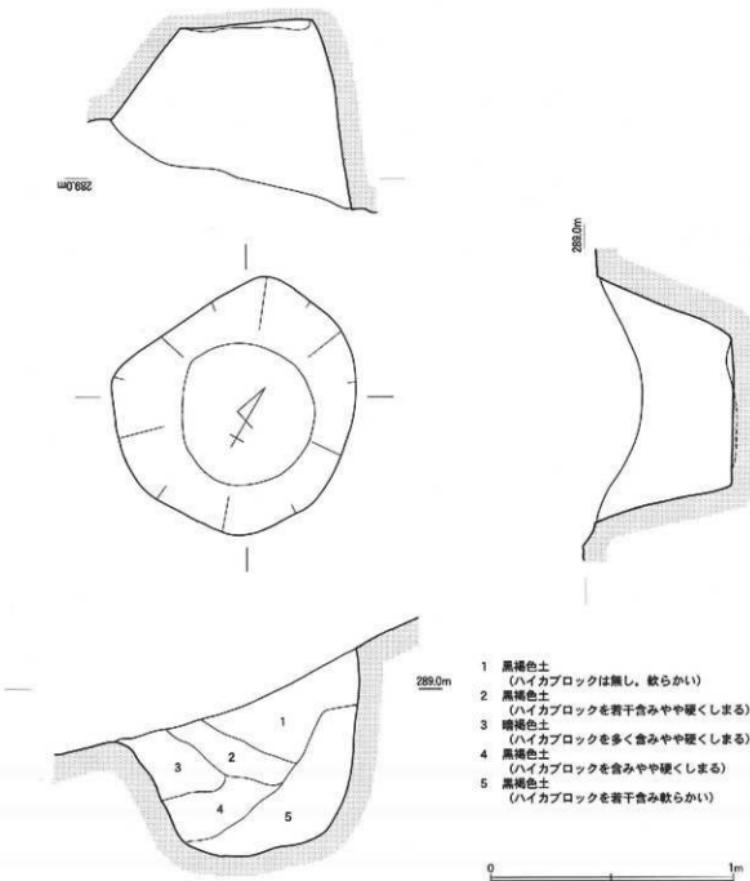
第27図 東区SK 09実測図 ($S = 1/20$)

SK 12 (第28図)

標高289m付近で検出した土坑である。土坑はSK 13の東側に近接しており、13を若干壊した形で掘り込まれている。

平面形はやや不整な円形であり、規模は長径1.03m、短径1.00m、深さ0.78mで、底面は平坦に加工されている。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカの混じった非常に軟らかい土層であることから近世以降のものと考えられる。



第28図 東区SK 12実測図 ($S = 1/20$)

S K 15 (第29図)

標高289m付近で検出した墓坑である。土坑は近世以降と考えられる土坑群が密集している場所から北側にやや離れた位置に単独で存在している。

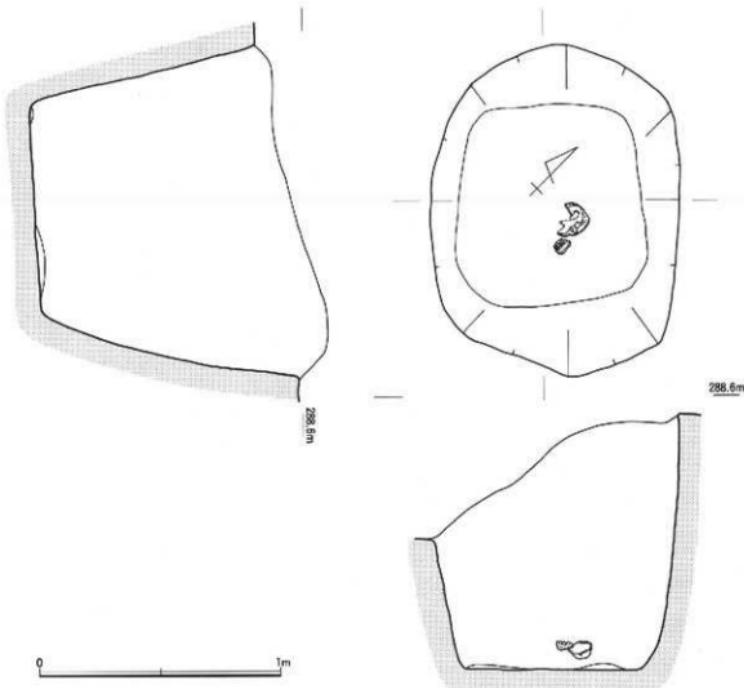
平面形はやや不整な方形であり、底面は平坦に加工されている。規模は長径1.30m、短径1.02m、深さ1.11mで、やや深く掘り込まれている。

墓坑底面中央付近からは人骨が出土している。人骨は頭蓋骨1体分であり、他の部位は腐食によって残存していなかったと推測される。頭蓋骨は頭頂部付近と上顎骨が残存しており、上顎骨には歯牙が残っていた。

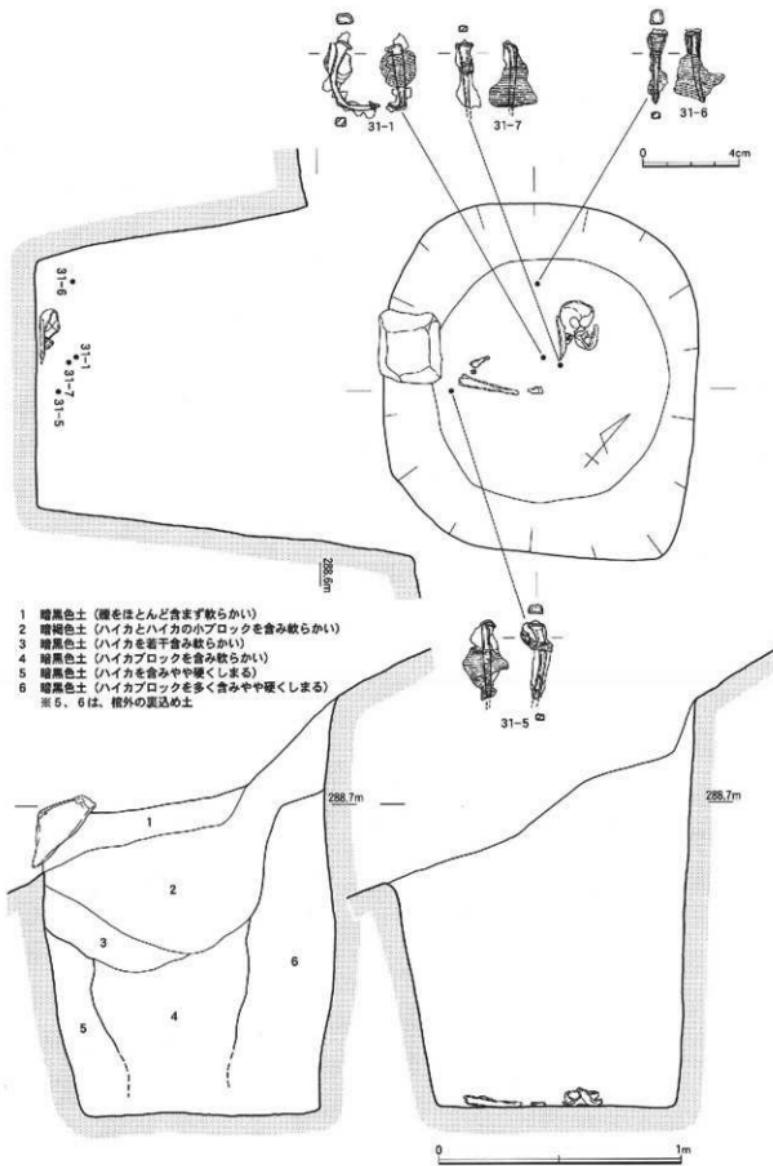
土坑内から人骨以外の遺物は出土していないが、覆土がハイカの混じった非常に軟らかい土層であることから近世以降の墓坑と考えられる。

S K 16 (第30図)

標高289m付近で検出した墓坑である。平面形は上端で隅丸方形状に見えるが、円形の墓坑である。規模は上端で長径1.43m、短径1.28mで、底面は平坦に加工され深さ1.54mとかなり深く掘り込まれている。この墓坑内には、土層断面の観察や出土した鉄釘から木棺の存在が想定することが可能であった。



第29図 東区SK 15実測図 (S = 1/20)

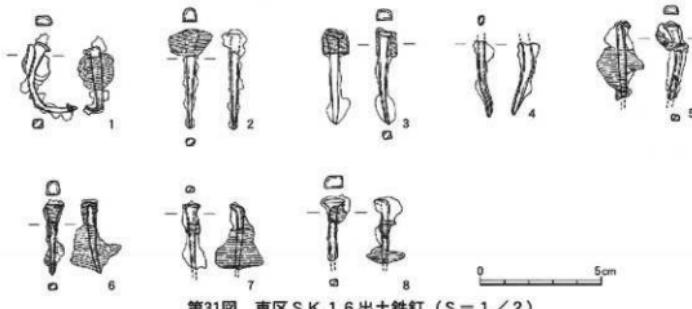


第30図 東区SK16実測図 ($S = 1/20, 1/2$)

覆土は棺外裏込め土（5、6層）、棺内流入土（1～4層）の大体2つに分けて考えることができるものであった。

出土遺物は、墓坑内から木棺に使用したと推測される鉄釘が26本程ある。また、墓坑の上端付近で径30cm、厚さ15cm程の石材が出土しており、これはこの墓坑に関連する石材と思われる。

鉄釘（第31図）は総数で40片近く出土しており、ほとんどのものに木質が付着していた。また、木質の厚みから使用された木棺の厚みは1cm以上と考えられた。また、釘の寸法は長さ4cm、幅0.4



第31図 東区SK 16出土鉄釘 ($S = 1/2$)

cm、厚さ0.4cm程とまとった

サイズのものである。

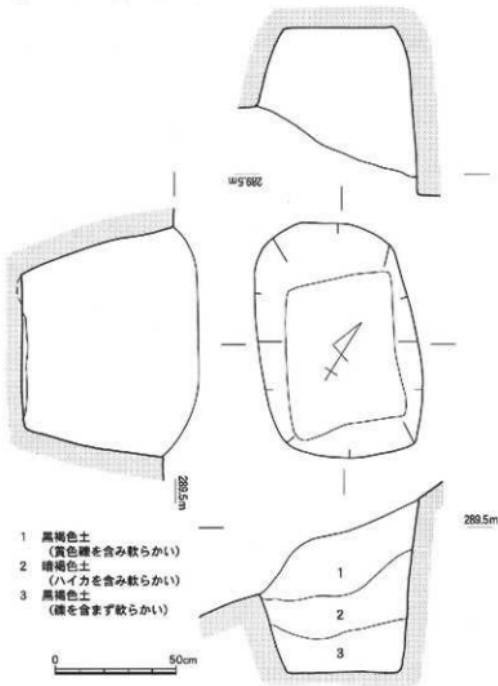
墓坑底面からは、人骨が出土し、こらはおそらく1体分と推測される。人骨は頭蓋骨と上肢骨と思われるものが出土しており、他の部位は腐食して残っていなかった。

この土坑の時期は、厳密に時期の分かれる遺物が出土していないので分からぬが、おそらく近世以降のものと考えられる。

SK 18 (第32図)

土坑は近世以降と考えられる土坑群が密集している場所の標高289m付近で検出した。平面形はやや不整な方形であり、底面は平坦に加工されている。規模は長径0.98m、短径0.66m、深さ0.7mである。

土坑内から遺物は出土していないが、覆土がハイカの混じっ



第32図 東区SK 18実測図 ($S = 1/20$)

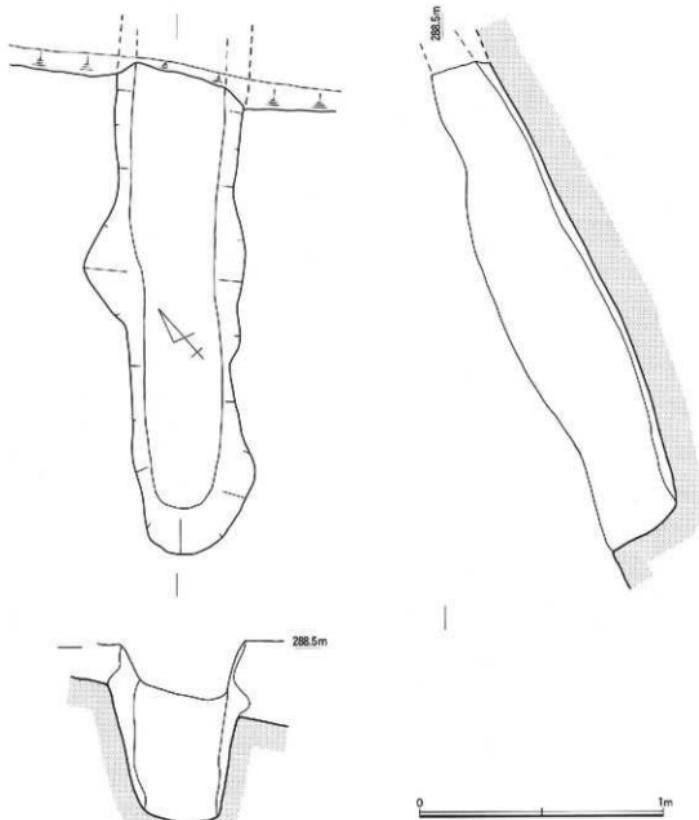
た非常に軟らかい土層であることから近世以降の土坑と考えられ、また覆土の状況が人骨と鉄釘が出土したSK16と似ていることから墓坑の可能性が考えられる。

2. 溝状遺構（第33図）

調査区の南側の斜面で溝状遺構を1基（SD01）検出している。このほかに溝状のものを検出しているが、斜面に平行して数条見られるもので、覆土も非常に軟らかいものであることから、以前桑畠として利用されていた頃の溝と思われたので遺構として特に記録していない。

（1）SD01

調査区の南側標高289m付近で検出した溝状遺構であり、斜面に直行して掘り込まれていた。覆土は第1黒色土に類似したもので硬く結まっているものであった。規模はトレンチによって東側が不明であるが、幅0.45m程で長さは残っている部分で1.95m、深さ0.4m程である。この遺構の時期は、遺物の出土がなかったことから不明である。



第33図 東区SD01実測図 ($S = 1/20$)

3. 祭祀遺構

調査区の南端の標高286m付近からは鉄鍋と鉄鎌を埋納した遺構を検出した。この遺構周辺の調査前には大振りな切り株が存在し周辺には石材が散乱していた。このような状況であったことから表土掘削を重機によって行わず人力によってこの周囲は掘り下げた。

(1) SXO 1 (第34図)

遺構は切り株の下の第1黑色土層を精査している時に、鉄器（35図）が出土したことから認識できた。鉄器は鉄鍋を伏せた上に鉄鎌を載せた状況で出土している。これらは切り株の下からの出土であったことから明確にできなかったが、本来は土坑の中に鉄器を埋納した遺構と推測される。また、この周囲には石材を並べた範囲があることから、何らかの祭祀の場として利用されていた可能性が考えられた。さらにこの周囲からは錢貨（第36図）や陶磁器（38図）が出土していることからも、ここが祀られていた場であったと思われた。

出土鉄製品（第35図）

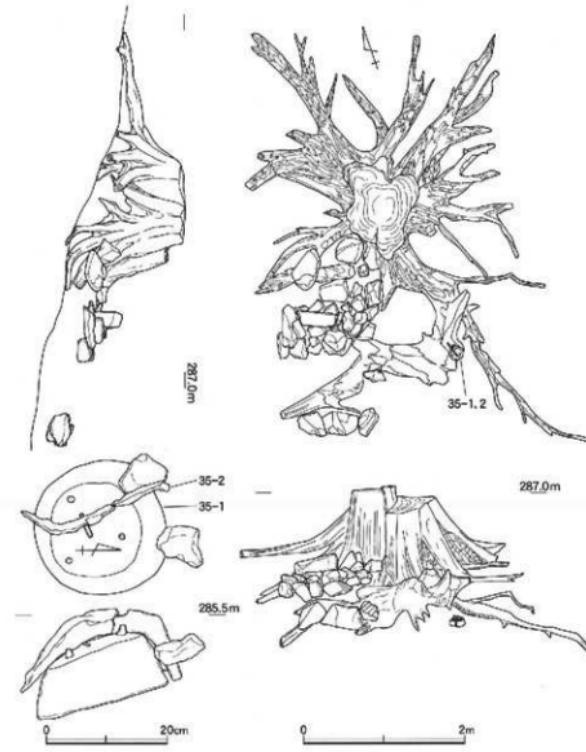
鉄鍋（1）は、口縁部が直線的で蓋受けの屈曲が無い形態のものである。口縁部付近に片口と断面三角形の把手があり、

底部には径1cm、長さ1.1cmの短い三足が付いている。
また底部の湯口は一文字湯口である。

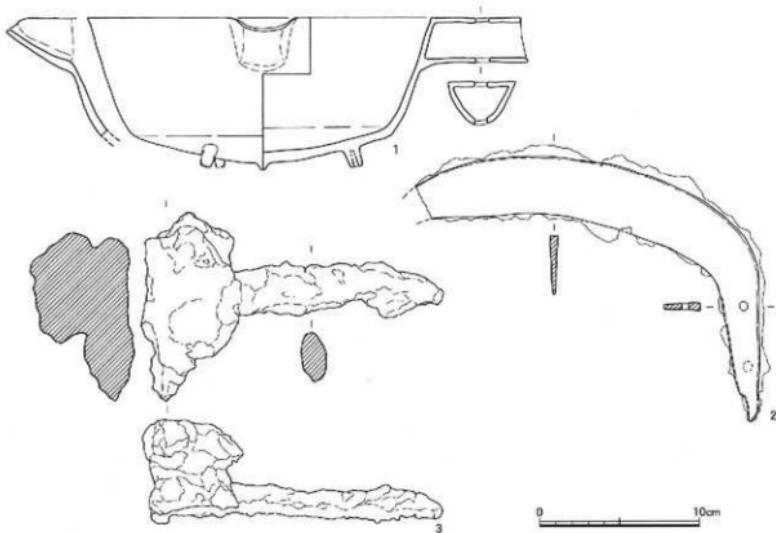
鉄鎌（2）は、大振りのもので目釘穴が2孔付き茎端部には抉りが入っているものである。

これらの鉄鍋と鉄鎌の時期は明確な理由はないが中世～近世頃と推測される。

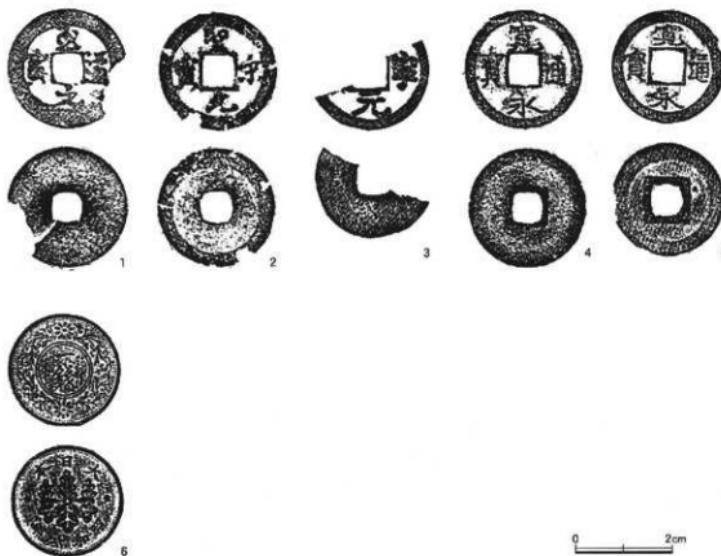
3は、銛鉄である。これは遺構周辺の表土から出土したもので明確に遺構に関連するものかは分からぬものである。もし関連するものであれば、出土した鉄



第34図 東区 SXO 1 平面図及び出土状況実測図 (S = 1/60, 1/8)



第35図 東区SX 01出土鉄器(鉄滓) (S=1/3)



第36図 東区SX 01周辺出土銭貨拓本 (S=1/1)

鍋の存在などから、埋納に鍛物師といった集団が関わっていたことも推測される。

出土銭貨（第36図） 1～6は造構周辺から出土した銭貨である。これらは大きく分けて3時期のものがあり、北宋銭（1～3）、近世の銭貨（4、5）、近代の銭貨（6）が出土している。

出土陶器など（第37図4、5）

4は底部に回転糸切り痕が残る土師器坏である。5も底部に回転糸切り痕が残る陶器坏であり、内面から口縁部外面上方に褐色釉が施されている。これらは近世のものと考えられる。その他に造構周辺からは、土製品片・陶磁器（図版26）が出土しており、確実に近世以降には祭祀の場として利用されていた可能性は十分あるものと考えられる。

4. 第1黒色土層出土遺物（第37・38図）

第1黒色土からは、縄文土器（図版27上）が数片、弥生土器片、石器・石製品、陶磁器、鉄器片が出上しているが、その量は僅かなものである。

（1）宝篋印塔片（第37図）

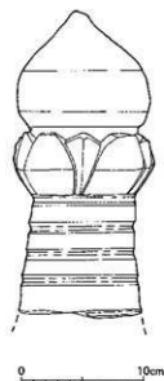
宝篋印塔の相輪片が出土している。これは1990年に調査された板屋1遺跡で検出されている積石造構に関連している可能性が考えられるものである。なぜならば積石造構が東側調査区の上方尾根上に位置しており、その調査でも宝篋印塔が出土しているからである。おそらく本調査区に転落したものである可能性が考えられる。出土した相輪片は九輪部分の刻みが深いことなどから室町時代頃の年代が考えられる。

（2）石器（第38図1～3）

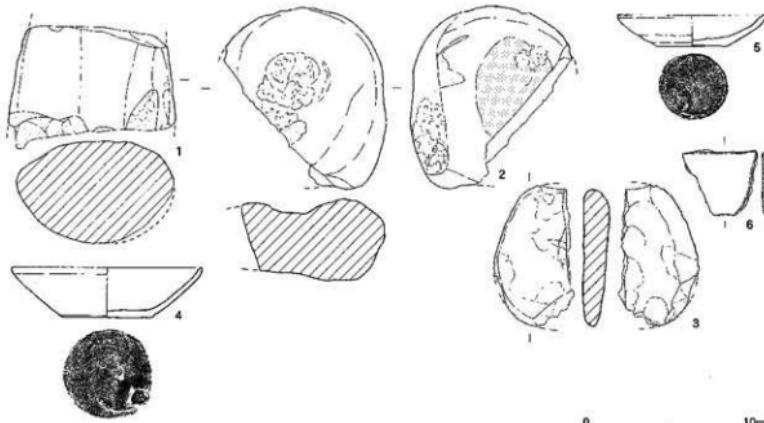
石器の1～3は磨削が認められるものであり、2は敲打痕も認められるものである。

（3）鉄器片（第38図6）

6はやや幅のある破片であるが種類等は明確にできない。



第37図 東区宝篋印塔
実測図
(S = 1 / 4)



第38図 東区出土石器・土師器・陶磁器・鉄器実測図 (S = 1 / 3)

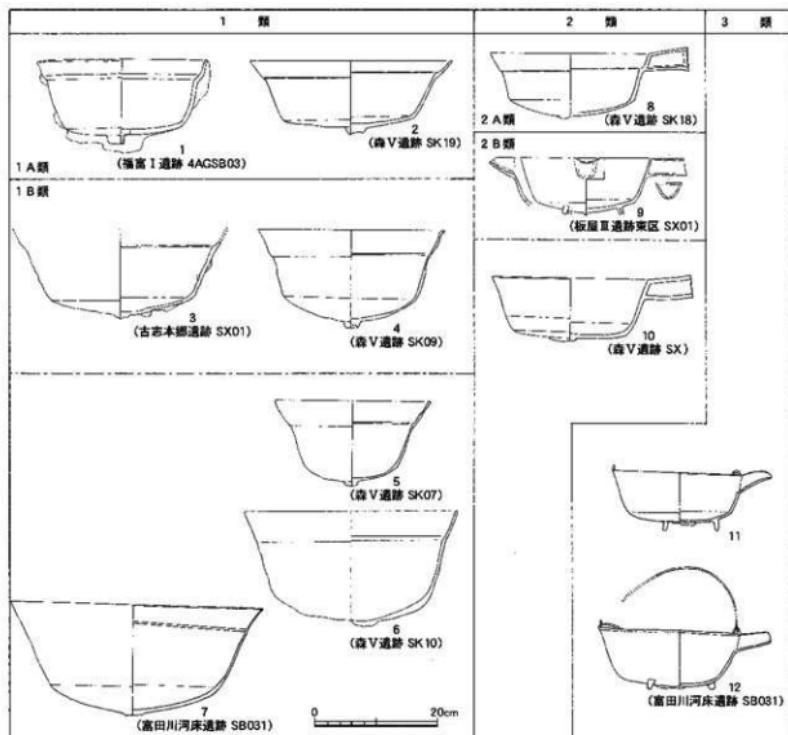
第4節 小 結

本節では東側調査区で検出した遺構の中で、特に祭祀遺構としたS X 0 1についてその性格と時期的な位置付けについて若干の検討を加えて、東側調査区の調査成果の結びにかえたい。

1. S X 0 1の性格について

S X 0 1のように鉄鍋を埋納した可能性のある出雲地方の遺跡は、第6表にあるように6遺跡^{*1}が存在している。これらは埋納坑に伏せられた状態で納められ、鉄製品や土師器を伴う共通した特徴が見られる。このことから板屋Ⅲ遺跡の遺構も本米埋納坑に納められていた可能性がある。また、出土した地域を見ると頼原町志津見尻辺の神戸川上流域で8例発見されており、この地域の1つの特色として挙げることができよう。

鉄鍋を埋納した遺構の性格については、石鉢を埋納した遺構を中心に検討した一宅氏の研究^{*2}や、大量に出土した森V遺跡の報告書^{*3}で述べられており、地鎮や鎮魂、神事に使用された物の埋納といったように祭祀的な意味合いをもった遺構として考えられている。確かに板屋Ⅲ遺跡では近年まで祀られていた場所と重なるように出土していることから、祭祀的な意味合いを持ったものとして想定することも問題がないものと思われる。結論として何らかの祭祀的意味合いを持つ埋納



第39図 出雲地方出土鉄鍋実測図 (S = 1 / 8)

造構としてSX01を評価しておきたい。

2. SX01の時期について

ここでは造構の詳細な時期を検討するために、鉄鍋の時期的な位置づけについて出雲地方出土のものも含め若干検討しておきたい。

出雲地方出土の鉄鍋を集め分類したものが第39図⁴である。分類についてはすでに全国出土の鉄鍋を検討した五十川伸矢氏の研究⁵があり、今回の分類はそれを参考にして検討したものである。県内出土の鉄鍋を今回1類～3類に分類しており、1類（1～7）は五十川氏の鍋Aに相当するもので、口縁部に蓋受けの屈曲が付く形態のものである。2類（8～10）は把手が付くものであり、五十川氏の鍋Aに含まれているものであるが今回別に新たに分けて分類した。3類（11、12）は吊すための耳が口縁部の内側に付るもので「内耳鍋」と呼ばれ五十川氏の鍋Cに相当する。

これら3種類に分けた鍋のうち1類と2類をその形態から五十川氏の研究成果を基にそれぞれ細分すると、両者とも大きく2つに分類することが可能である。

1類は、口縁部が短く蓋受けの屈曲がしっかりしたもので底部が平底に近い1A類⁶（1、2）、口縁部が長く蓋受けの屈曲が緩やかで胴部との境が不明瞭になり、底部が丸底状になる1B類（3～7）に分かれ、さらに1類は胴部と底部の稜や蓋受けの屈曲の形状から1Ba類と1Bb類に細分される。2類は、口縁部の蓋受けがある2A類（8）と蓋受けが無い2B類（10）に分かれ、底部の湯口は2A類が丸型湯口で2B類は一文字湯口である。また2B類については底部形状から2Ba類（9）と2Bb類（10）に細分される。

これら分類した鍋について五十川氏の研究成果や共伴土器等⁷を基に検討した結果、大雑把であるがI群（1A類・2A類）の時期→II群（1Ba類・2Bb類）の時期→III群（1Bb類・3類）の時期といった順で3時期に分けて整理される。ちなみに年代的にはI群が13世紀後半～14世紀頃、II群が15世紀～16世紀頃、III群が16世紀前半から17世紀前半頃と思われる⁸。

以上の検討から板屋Ⅲ遺跡出土の鉄鍋は15世紀頃の年代が想定できそうである。

第6表 島根県内の鉄鍋埋納遺跡

番号	遺跡名	造構	埋納状況	共伴遺物			備考
				鉄製品	銅貨	土器等	
1	板屋Ⅲ遺跡	頓原町志津見	埋納坑？(SX01)	伏せた状態	鎌	—	周辺から銅貨、鉄出土
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK07)	伏せた状態	短刀	—	15枚
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK09)	伏せた状態	短刀	—	46枚 五連、小石
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK10)	伏せた状態	—	—	38枚 五連
2	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK13)	伏せた状態	短刀 鉄錐	—	16枚
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK18)	伏せた状態	刀	—	— 鉄錐
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑(SK19)	伏せた状態	刀	—	9枚
	森V遺跡	頓原町志津見	埋納坑SX	上向き	—	—	45枚
3	清水豐神道跡	三刀屋町駿河内	埋納坑	不明	刀	—	○ 和鏡、刀劍
4	大歳遺跡	本次町東口發	埋納坑？	伏せた状態	兜？	9枚	17枚 和鏡
5	吉志木郷遺跡	出雲市吉志町	埋納坑？	上向き	—	—	38枚 集石
6	福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町	埋納坑	上向き	—	宋銭3枚	埋納後に自然石

第5章 西側調査区の調査結果

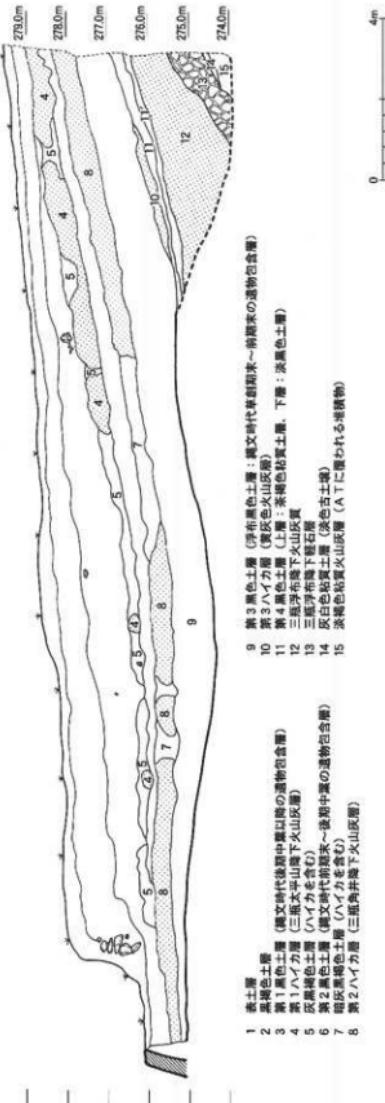
第1節 概要

西側調査区は南西に突出する丘陵尾根上の先端付近にあたり、標高279m程の緩やかな斜面部分である。調査前は明剣神社の境内地であり、土層断面（第40図）からも分かるよう一部削平され盛り土されていた。

調査範囲は平成12年のトレンチ調査や第一次調査の結果を踏まえて、工事に係る部分全面について実施した。

調査は平成13年5月21日から表上の重機による掘削を開始し、第1黒色土層の人力による調査を6月11日から実施した。9月20日には検出した堅穴住居跡等のリモコンヘリによる空撮を行い、第1ハイカ層の重機による掘削後に9月25日から第2黒色土層の調査を開始し、10月19日に終了した。その後に第2ハイカ層の重機掘削後に第3黒色土層の調査を10月24日から行い、11月26日に終了した。第4黒色土層の調査は11月28日から12月11日まで行ったが、全体の一部の範囲を調査するにとどまった。

調査の結果、弥生時代後期の集落跡、近世頃の鍛錬鍛冶炉を伴う掘立柱建物跡、縄文時代の落し穴、集石遺構といった遺構と縄文時代～近世までの各時代の遺物を検出した。



第40図 西側調査区一次調査 (第2地点調査区西壁) 土層 (S = 1 / 120)

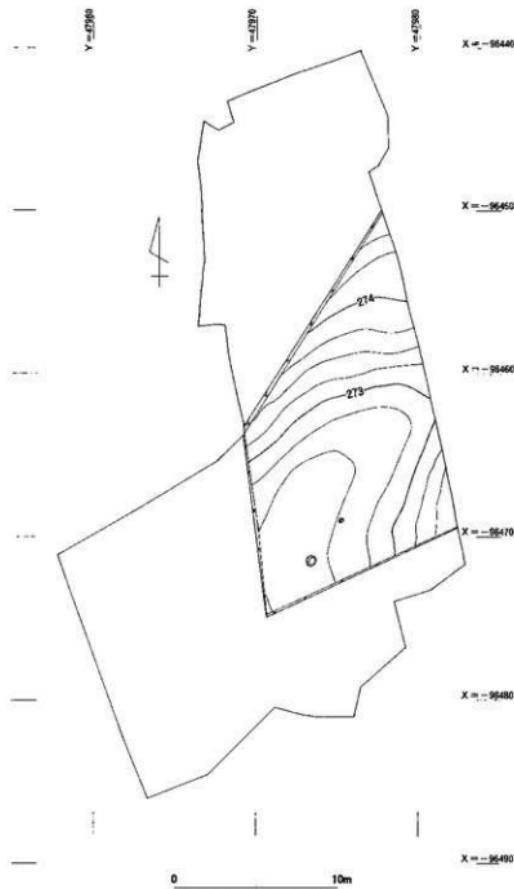
第2節 第4黒色土層の調査（第41図）

第3黒色土層の下部に堆積する第3ハイカ層は、遺跡内の谷部のみに遺存している層であり、今回の西側調査区においても谷部だけが明瞭に確認され、他の部分では第3黒色土層除去後に三歳浮布降下火山灰層が検出された。

第4黒色土層の調査範囲は、第1黒色土層から第3黒色土層までの各面の調査範囲とは異なり、ちょうど旧地形の谷部分にあたる部分のみについて振り下げている。

調査の結果、不整形な落ち込みを2基ほど確認しているが人為的に掘られたものと考える積極的な証拠に乏しいものであった。また、人為的に加工が施された可能性のある石器や土器等は出土していない。

第一次調査では、土器の細片と抉りの入った石器、赤く焼けた礫が出土しており、第4黒色土層の時期が縄文時代草創期に属する可能性が示唆されていたが、残念ながら今回の調査ではそれを確実に証明し、時期を細かく押さえることはできなかった。



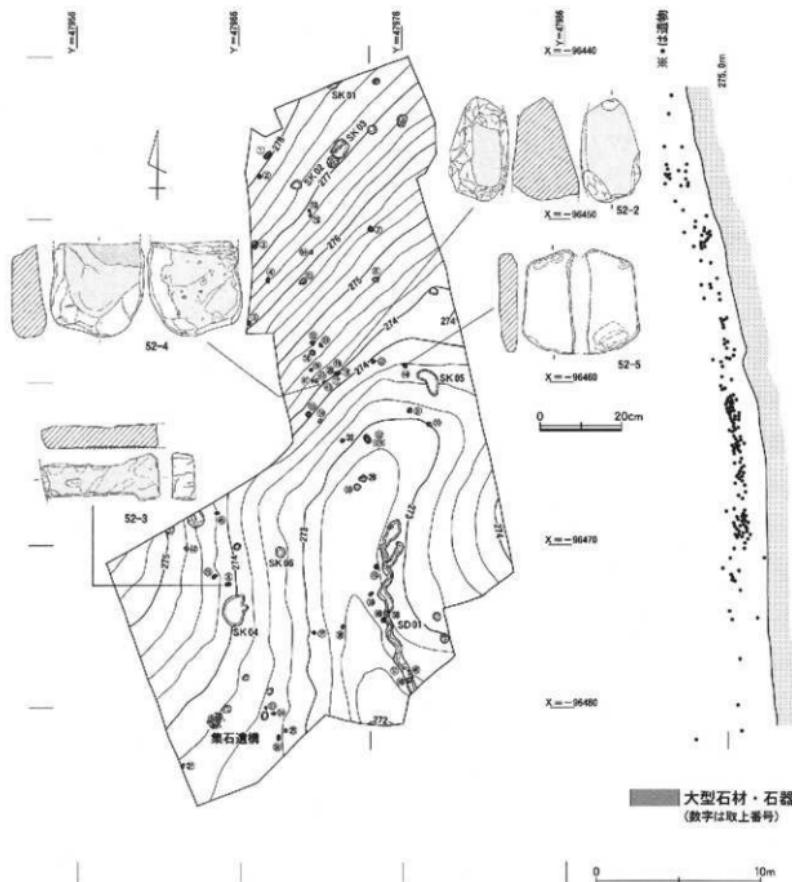
第41図 西側調査区第4黒色土層全体図 ($S = 1/300$)

第3節 第3黒色土層の調査（第42図）

第3黒色土層の調査では縄文土器、石器が出土している。これらの大部分は第3黒色土層の上部から出土しており、下部から出土した遺物はほんの僅かであった。また第3黒色土層上部では、大型の石材が40点程出土しており、その一部は人為的な磨面が認められる石器として認識されるものであり、磨面が確認されない石材も人為的に持ち込まれたものと考えられる。

遺構は土坑、集石遺構、自然流路（S D 0 1）が検出されている。これらは第3黒色土層除去後の第3ハイカ層上面及び浮布降下火山灰層上面で検出したものである。

なお、一次調査では、第3黒色土層上面で遺構を検出しているが、今回の調査では焼土面等の遺構は確認されなかった。



第42図 西側調査区第3黒色土層全体図 (S = 1/300, 1/12)

1. 集石遺構（第43図）

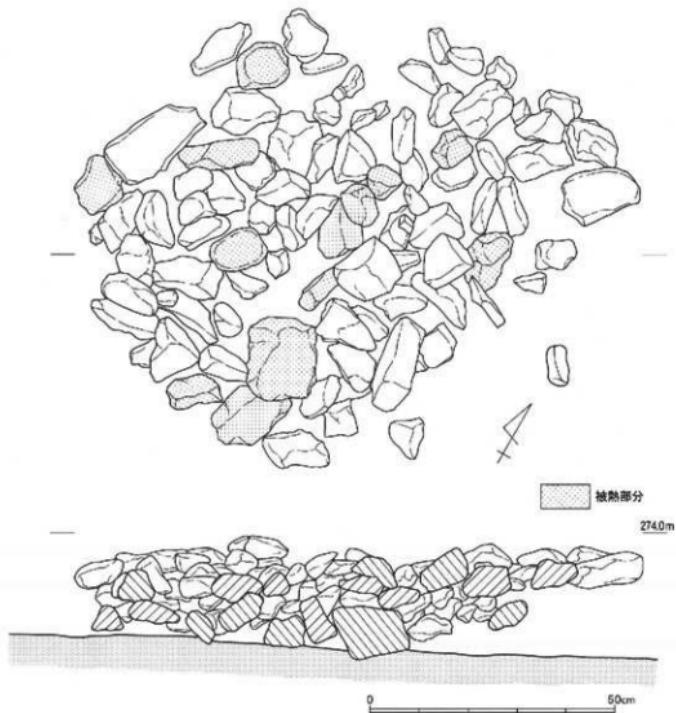
遺構は第3黒色土層除去後の三瓶浮布降下火山灰層上面で検出され、第3黒色土層除去後の旧地形でいうと標高274m付近の緩斜面に位置する。

集石の範囲は南北1.0m、東西0.8m程で石材の重なりは2段程であった。また集石の平面形状は南北軸に沿った方形と考えられる。石材は拳大ほどの大きさのもので被熱により赤く変色したものが見られた。

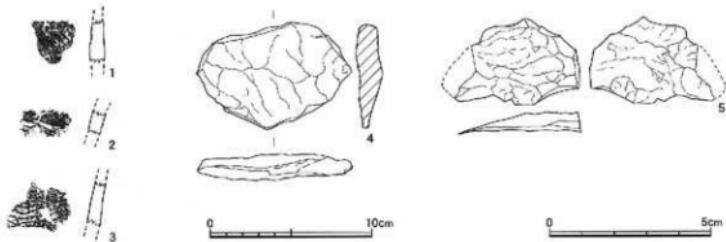
集石遺構の石材を除去するとその下部が浅く窪んでいた。窪みには黒色土層が堆積しておりその中から縄文土器片と石片（第44図）が出土している。

縄文土器⁹（第44図1～3）は同一個体と考えられる破片が3点出土している。それらは風化が著しいと小片であることから詳細な検討が難しいが、文様は山形文が帯状施文された押型文である可能性が考えられる。このような土器は一次調査でも出土しており、神宮寺式に後出する神並上層式と黄島式の間に位置づけられ早期前半に位置づけられているが、今回の出土品はやや文様の間隔が異なっている。

遺構の時期は石材の下部から出土している縄文土器で考えると縄文時代早期頃と推測される。



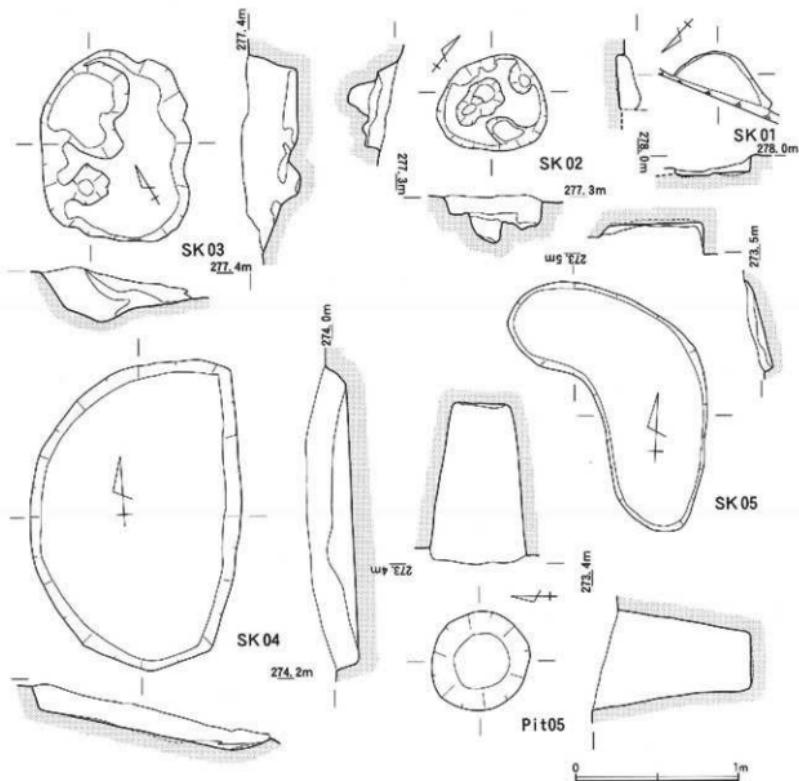
第43図 西区集石遺構実測図 (S = 1/10)



第44図 西区集石遺構出土遺物実測図 (1～4はS=1/3、5はS=2/3)

2. 土坑 (第45図)

土坑は第3ハイカ層上面及び浮布降下火山灰層上面で6基検出しているが、不整な形状のものが多く、人為的に掘られているものと判断されるものはPit 0 5の1基のみであった。



第45図 西区SK 01～05、Pit 05実測図 (S=1/30)

(1) SKO 1 (第45図)

土坑は調査区北端部の斜面部分の標高278m付近で検出しており半分以上が調査区外に広がっている。平面形は不整な方形と推測され規模は長径0.6m以上、短径0.4m以上、深さ0.1mで、底面は平坦である。土坑内の覆土は黒色土層でその中から遺物は出土していない。

(2) SKO 2 (第45図)

土坑は調査区北側の斜面部分の標高277m付近で検出している。平面形は不整な円形で底面は凹凸があり人為的に掘られているものでない可能性が高い。規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ0.3mである。土坑内の覆土は黒色土層でその中から遺物は出土していない。

(3) SKO 3 (第45図)

土坑は調査区北側の斜面部分の標高277m付近で検出しており、前述したSKO 2の東側に近接している。平面形は不整な方形で底面は凹凸があり、この土坑もSKO 2と同様人為的に掘られたものではない可能性が考えられる。規模は長径1.15m、短径0.9m、深さ0.3mである。土坑内の覆土は黒色土層でその中から遺物は出土していない。

(4) SKO 4 (第45図)

土坑は調査区西側の緩斜面の標高274m付近で検出している。平面形は不整な楕円形で底面は平坦で東側に若干傾斜している。規模は長径1.9m、短径1.3m、深さ0.15mと浅いものである。土坑内の覆土は黒色土層でその中から遺物は出土していない。

(5) SKO 5 (第45図)

土坑は調査区中程の谷部分の標高273m付近で検出している。平面形は「L」字形に折れた不整形なもので底面は平坦である。規模は幅0.65m、深さ0.2mで浅いものである。土坑内の覆土は黒色土層でその中から遺物は出土していない。

(6) Pit 05 (第45図)

土坑は調査区西側の緩斜面の標高273m付近で検出している。平面形は円形で規模は径0.6m、深さ0.95mと深いものであり、確実に人為的に掘り込まれたものと判断される。土坑内の覆土は非常に軟らかい黒色土層でその中から縄文土器片が出土している。なおこの土坑の掘り込まれている面は、調査区内に設定した土層断面の観察から第3黑色土層中から掘り込まれている。

3. 第3黒色土層出土遺物 (第46図~52図)

前述しているように第3黒色土層の上部を中心で遺物が出土しており、平面的には谷部分に比較的集中している傾向が見られた。以下出土遺物について縄文土器、石器の順に記述する。

(1) 縄文土器 (第46図~49図)

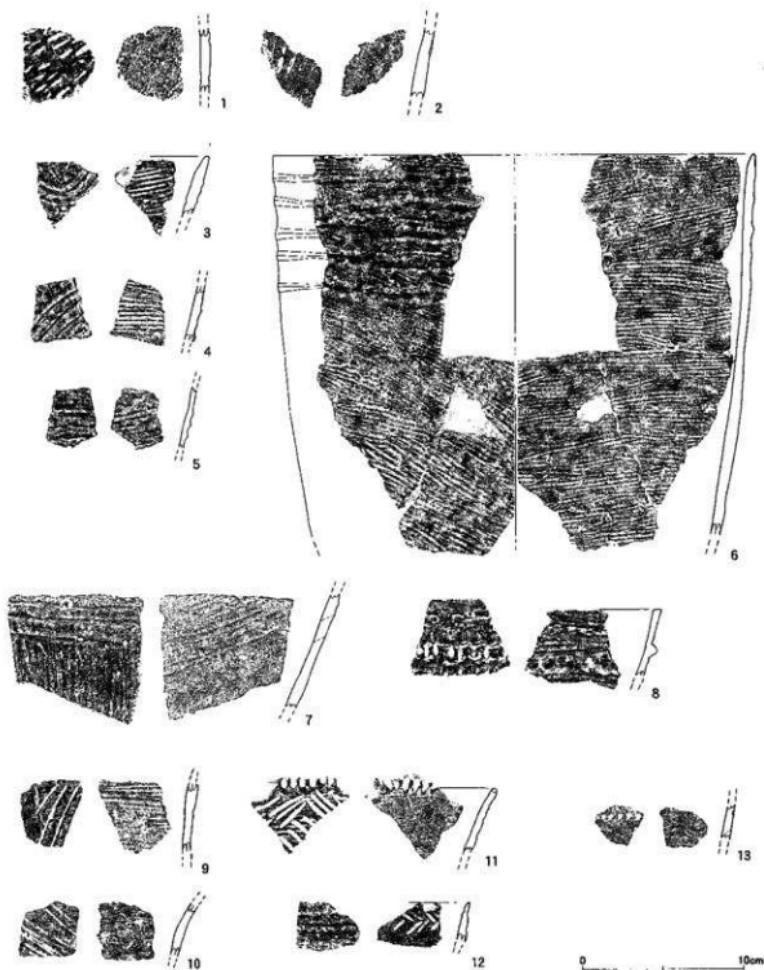
押型文土器 (第46図1、2) 1と2はネガティプな楕円の押型文が斜行して施文されている土器である。両者とも2条単位の施文具と考えられ、神宮寺式の押型文として捉えることができ早期前半頃の時期が考えられる。

細隆起帯文土器 (第46図3~8) 3~7は、いわゆるミミズばれ状の隆起をもつものであり、縁者な二枚貝条痕が認められる。これらは、色調が灰色系で細隆起文がシャープで湾曲している一群(3、4)と暗褐色で細隆起帯文が直線的な一群(5~7)の二種類が見られる。また8は、隆帯がやや厚く突出しているものでキザミが施されているものである。これらは森B式に並行するもの

と思われ、前期前半頃に位置づけられるものと考えられる。

短沈線文の土器 (第46図 9~12) 9~12は短沈線文が施されている土器であり、細くて長い沈線文の一群 (9, 10) とやや太くて短い沈線文の一群 (11, 12) の2者が見られる。12は外面に竹管による連続した沈線文が施され、内面に羽状の短沈線文が施されている個体である。これらは曾畠系統のものと思われ、前期後半頃のものと思われる。

「3」字状の刺突文の土器 (第46図13) 13は小片で詳細が分かりにくいものであるが、「3」字



第46図 西区第3黑色土層出土縄文土器 (1) 実測図 ($S = 1/3$)

状の刺突文が連続して施される土器である。これは羽島下層Ⅱ式に比定される可能性のもので、前期前葉頃のものと推測される。

爪形文の土器（第47図1～8） 1～8は条痕地で爪形文が施された土器で、間隔が広い一群（1～5）と間隔が窄で器壁が薄い一群（6～8）との2者が見られる。これらは羽島下層Ⅲ式～磯ノ森式に比定され前期中葉頃の時期が想定される。

半裁竹管による沈線文の土器（第47図9～11） 9～11は条痕地に半裁竹管によって2条1単位となる沈線文が施された土器である。これらも前述した爪形文の土器と同様に羽島下層Ⅲ式～磯ノ森式に比定され前期中葉頃のものと考えられる。

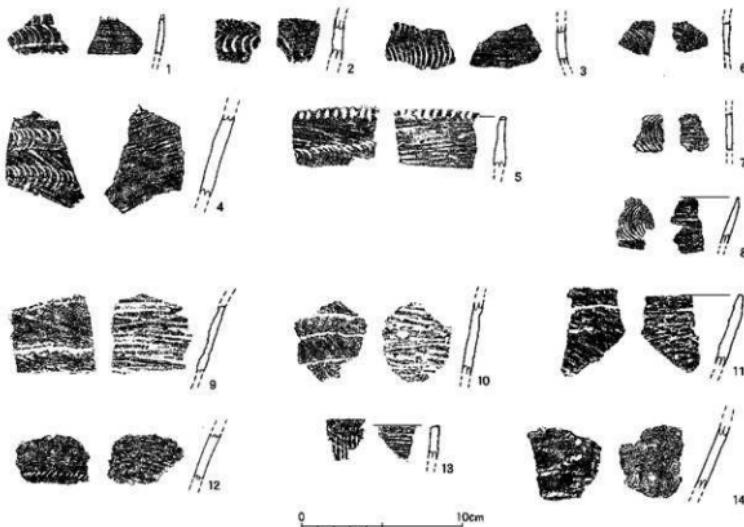
刺突文の土器（第47図12、13） 12と13は、細かい刺突文が連続して施された土器であり、位置づけについては難しいが、爪形文の土器と同じ頃のものであろうか。

縄文原体による施文土器（第47図14） 14は縄文原体の側線を圧痕によって羽状に施した土器である。これも爪形文の土器と同じ頃のものであろうか。

押し引き沈線文の土器（第48図1～9） 1～9は基本的に口縁部付近に押し引き沈線文が施されている土器であり多くのものが口縁部にキザミを持つものである。これらはヘラ状工具による押し引き沈線文の一群（1～3）と半裁竹管による押し引き沈線文の一群（4～9）の2者が存在する。これらは月崎下層式に比定でき前期後葉に位置づけられるものと考えられる。

口縁部付近に刺突文の土器（第48図10～14） 10～14は口縁部付近に刺突文が施されている土器である。これらは前述した押し引き沈線文の土器に見られる刺突文と類似したものであることから月崎下層式の系統のものと思われ前期後葉の時期が想定される。

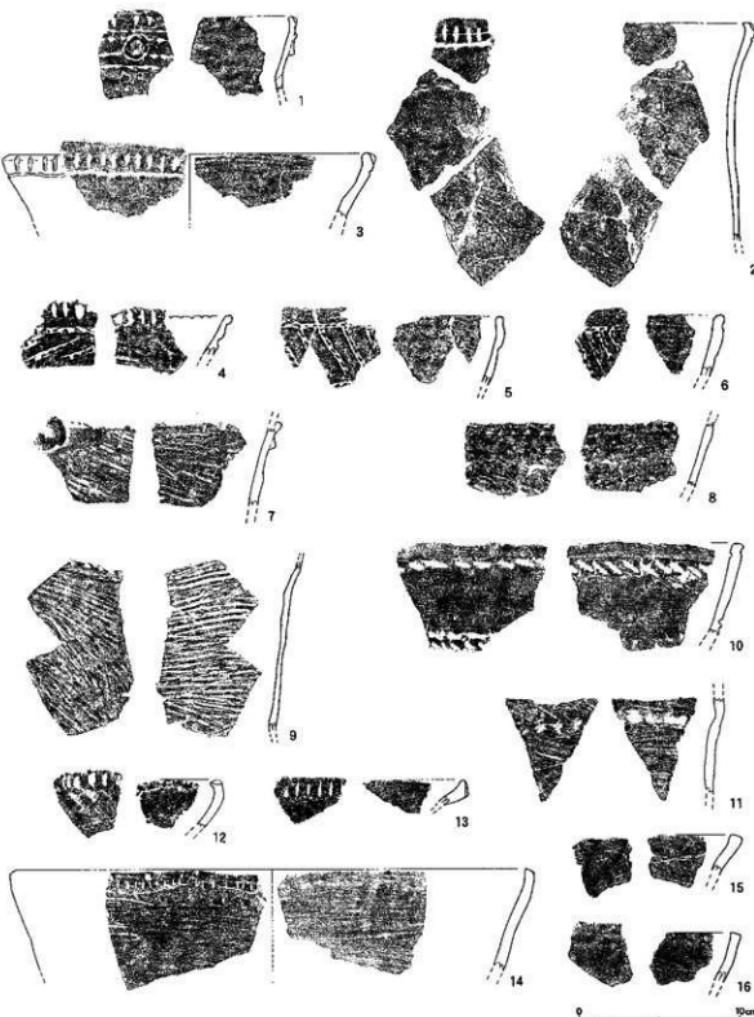
口縁端部に面を持つ土器（第48図15、16） 15と16は無文の土器口縁部であり端部に面を持つもの



第47図 西区第3黑色土層出土縄文土器（2）実測図（S=1/3）

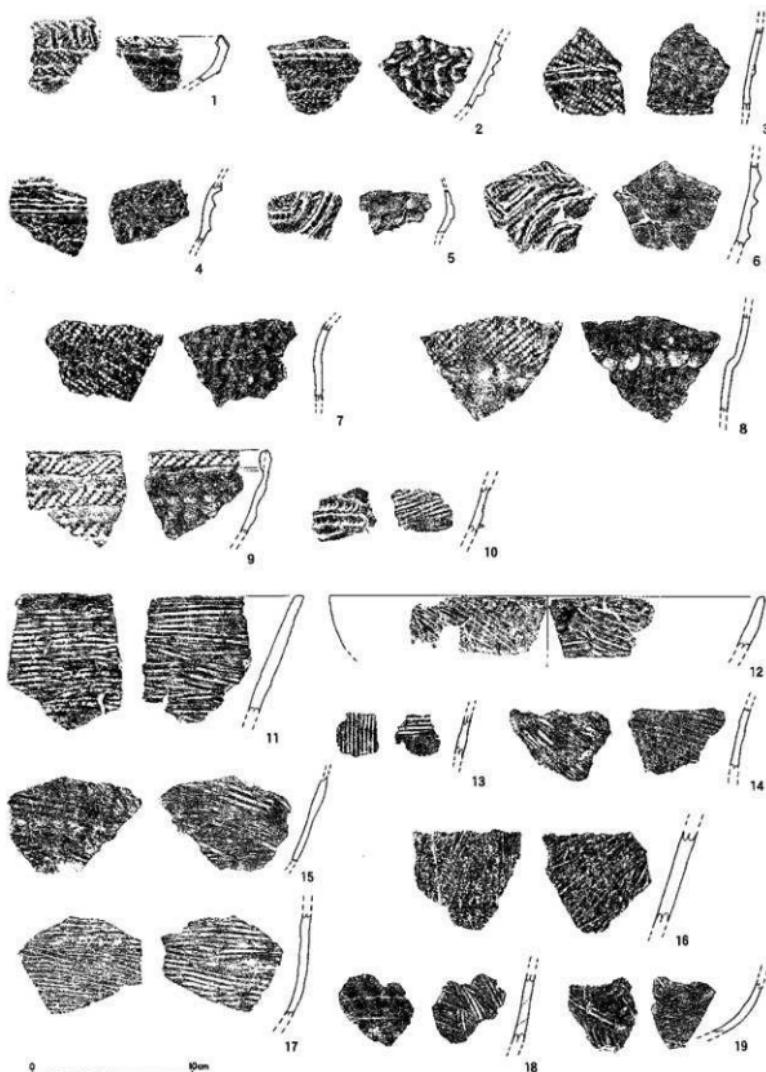
である。これらは前述した口縁部に刺突文を施す土器と形態が類似していることから月崎下層・彦崎Z1式との関連が想定できることから前期後葉のものであろうか。

突帯文上に押し引きを施す土器（第49図1～10） 1～8は縄文地で細い突帯文を貼り付け、その上を半裁竹管状工具で押し引きするもので、内面には指頭圧痕が顕著に残っている一群である。1と2は突帯上に縄文が見られ、3～6は突帯上に半裁竹管状工具の押し引きが施されている。これ



第48図 西区第3黒色土層出土縄文土器（3）実測図（S=1/3）

らの土器は单木1式に並行するものと考えられ、前期後業の時期が想定される。また、9は突帯が付かないもので肥厚した内面に縄文が施され、10は内面に条痕が見られ突帯と2段の半裁竹管状工具による爪形文が施されている。これらは位置づけが難しいが突帯上に押し引きを施す土器と類似



第49図 西区第3黑色土層出土縄文土器（4）実測図（S = 1 / 3）

した特徴を一部持っていることから近い時期のものと想像される。

条痕地の土器（第49図11～19） 11～19は、これまで述べてきたもの以外のもので、無文の条痕地の土器口縁部や胴部片である。11と12は口縁部の破片であり、13～17は胴部片、18は粘土帯の継ぎ目が外面に痕跡として残っているもの、19は底部に近い部分の破片である。

（2）石器（第50図～52図）

第50図1～7は剥片石器であり黒曜石製のものが多い。第50図8～14、51・52図は砾石器である。第3黒色土層出土の石器は黒曜石製のものが多いことと、石錘が非常に多い点が特徴といえる。

石鎌（第50図1～3） 1～3は黒曜石製の凹基式の石鎌であり、だいたい長さが1.5cm程度の小形のものである。第3黒色土層出土の石鎌は黒曜石製のものだけであることが特徴である。

スクレーバー（第50図4、7） 4は小形の黒曜石のスクレーバーである。若干湾曲する長辺に刃部が見られるものである。

7は形が三角形状のものでやや湾曲した長辺に刃部が見られるものである。これは石材が安山岩製で分析はしていないサスカイトと考えられる石器である。

剥片（第50図5） 5は黒曜石製の剥片で長さ1.6cm程度の小形のものである。

石匙（第50図6） 6は石匙である。これは周縁部を加工して突起部や刃部を作り出しているものであるが、刃部については再加工を施したものと考えられる。

磨製石斧（第50図8、9） 8は先端部を欠損しているが石斧と考えられる石器である。これの基部には磨面が認められ光沢が著しい。また側縁部全体には敲打痕が見られる。

9は刃部が若干欠損した石斧である。これは基部が直線的でないことから加工されていない自然の細長い礫の可能性も考えられる。

棒状磨石（第50図10） 10は欠損部があり全体が分からないので磨製石斧の可能性もある角柱状の磨石である。この石器の各面には明瞭な擦痕が確認され光沢をもっている。

磨石・敲石類（第50図11～14） 11～14は磨面や敲打痕が見られる石器である。11は石杵状のものである。形は一角錐状のもので平坦な一面に磨面が認められる。

12～14は平面に敲打による溝みが見られる石器である。12と13には側面に磨面が見られ、14には表面に磨面が認められる。また、13と14には側面にも敲打痕が見られる。

石錘（第51図） 51図は石錘である。石錘は重量で見ると最軽量のものは27.4g、最重量のものは331.9gと非常に幅広く様々なものが出でている。また重量はばらつきが見られ、ある一定の重量に区切って理解することは困難であった。

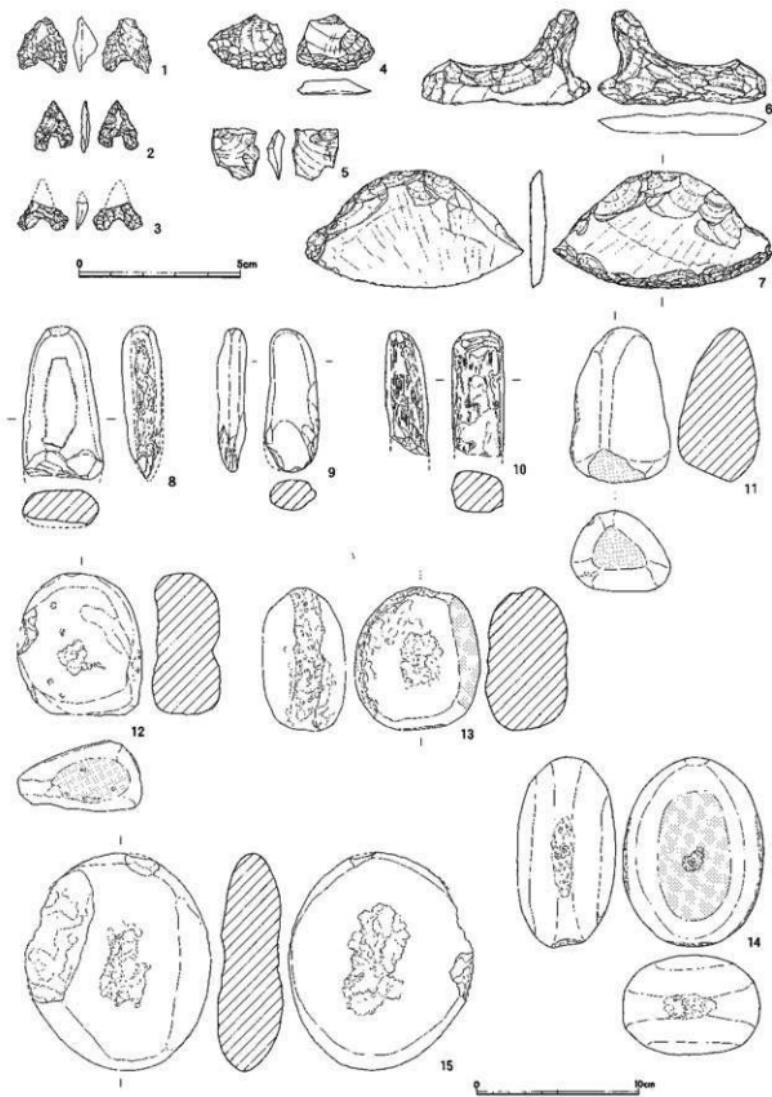
これらの石材は周辺の神戸川に存在しているもので川原石を加工しているものである。そして大部分のものが川原石の短辺部分を打ち欠いて使用している。

図化した1～28の石錘を重量を目安にとりあえず大雑把に分類してみると、5つ程に分けて理解される。

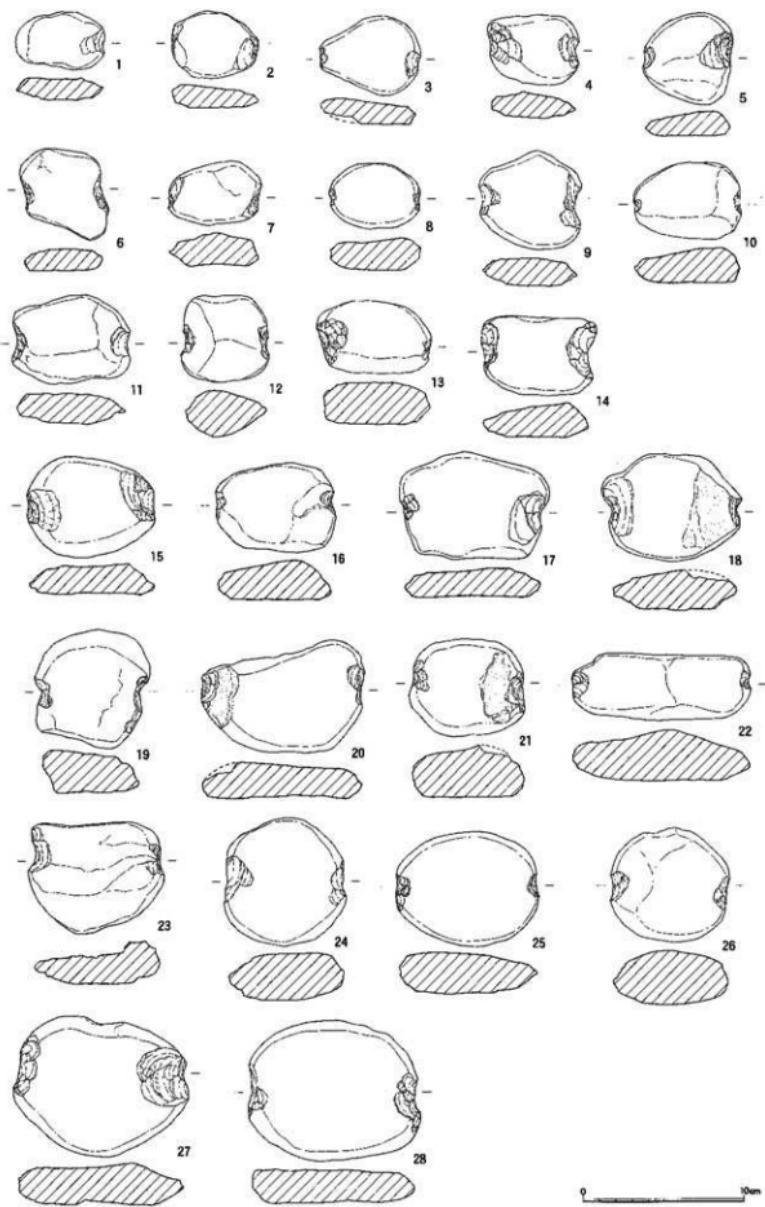
1～8は軽量なもので40g～60g程度の重量のある石錘である。9～14はやや軽量なもので90g～110g程度の石錘である。この中で12と13は他のものに比して厚みが厚い石錘である。

15～19は140g～170g程度の重量の石錘で中程ぐらいの重さのものである。20～26はやや重い石錘で190g～250g程度の重量のものである。この中で21は厚みのあるもので、22は遺跡内出土の中では例のない細長い棒状の石錘である。また24と26は各辺の長さが等しい正方形に近い石錘である。

27と28は330g前後の重量のもので、他のものに比して飛び抜けた重さがあり、300gを越える石錘はこの2点だけである。



第50図 西区第3黒色土層出土石器（1）実測図（1～6はS=2/3、7～15はS=1/3）



第51図 西区第3黑色土層出土石器 (2) 石錘実測図 ($S = 1/3$)

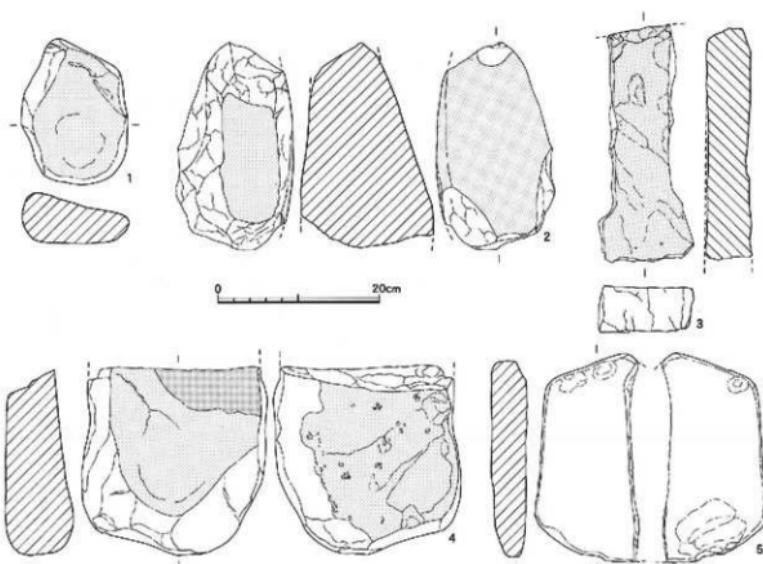
台石・石皿類（第52図） 52図は大型の石材に磨面が認められる台石・石皿類である。これらは、第3黒色土層上面で出土したものである。なお、1～4は確実に磨面が見られるが、5については磨面が不明瞭である。

1は平たい形状で使用によって表面が若干ぼつむ石器である。2はやや厚みのある石器で各側面が破損している。石器の生きている表裏面と側面に磨面が認められる。

3は平たい形状のものであるが、欠損によって全容が不明なものである。表面に確実に磨面が確認される。

4は平たい形状のもので表裏面に磨面が認められる。また表面では使用頻度の差によってより平滑になっている部分が確認される。

5は平たい形状のものであるが、石材の材質にもよるが明瞭な磨面が確認されないものである。その平たい形状から台石・石皿類として認識した。



第52図 西区第3黒色土層出土石器（3）台石・石皿類実測図（S = 1/6）

第4節 第2黒色土層の調査（第53図）

第2黒色土層の調査では繩文土器、石器が出土しているが、第1黒色土層、第3黒色土層と比べた場合に出土数が最も少ない黒色土層であった。また、調査区の西側は近世頃の削平によって第2黒色土層が残存していない部分であった。

遺構は土坑、ピット群、自然流路が検出されている。これらは第2黒色土層除去後の第2ハイカ層上面で検出している。これらの中で確実に人為的に掘り込まれた可能性が高い遺構は、SK 05及び06の2つの土坑のみである。

なお一次調査では第2黒色土層上面で遺構を検出しているが、今回の調査では焼上面等の遺構は確認されなかった。

1. 土坑

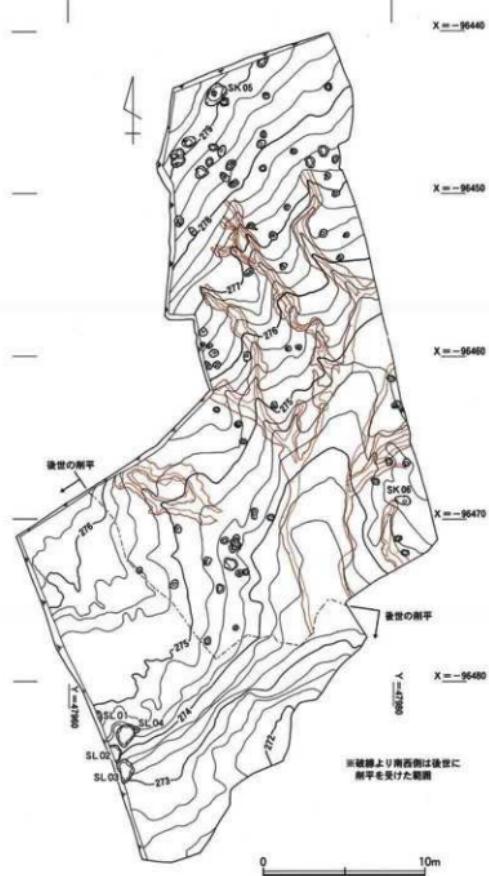
土坑は第2ハイカ上面検出時に6基検出しているが、不整な形状のものが多く、人為的に掘られているものと判断されるものはSK 05・06の2基であった。

(1) SK 05（第54図）

土坑は調査区北端の斜面部分標高279m付近で検出した落とし穴である。

平面形は不整な椭円形で規模は長径1.45m、短径0.96m、深さ1.57mで底面は平坦に掘り込まれている。底面の中央付近はピット状にさらに深く掘り込まれており、その規模は径0.28m、深さ0.35mである。

土坑内の覆土からは繩文土器、石錐、块状耳飾、剥片が出土している。これらは覆土に混在して出土しており、2点の块状耳飾も出土したレベルが異なっていた。

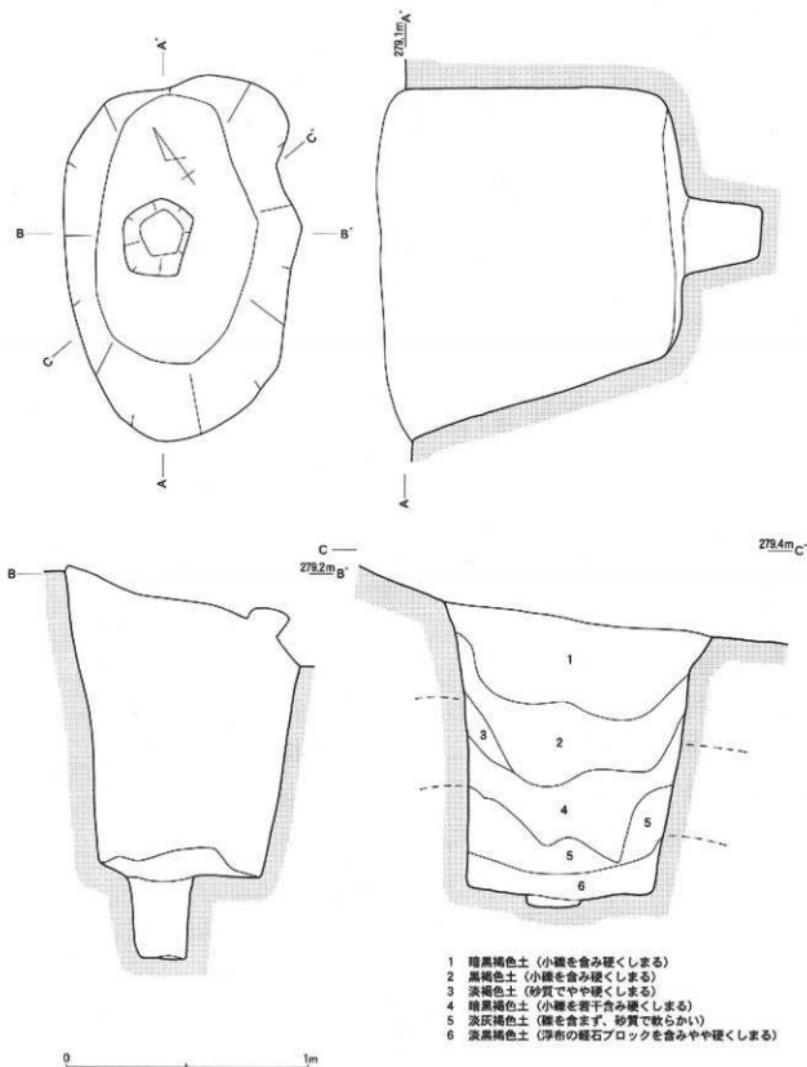


第53図 西側調査区第2黒色土層全体図 (S = 1/300)

S K 0 5 出土縄文土器 (第55図 1~11)

縄文土器は覆土中からいくつか出土しているが、すべて破片である。

1と2は縄文地で貼り付けた突带上に半裁竹管状工具で押し引く土器である。これらの土器は大



第54図 西区 SK 0 5 実測図 (S = 1/20)

歳山式に並行する可能性が考えられ、前期末の時期が想定される。

3～6は縄文が付された破片であり、これらは前述した1と2と同時期のものと推測される。

7と8は器厚が薄く条痕が認められる破片である。9は刺突文が施されたやや厚手の条痕地の土器で、その特徴は月崎下層式に類似しているが、小片であることなどから時期的な位置付けは難しいものである。10と11は器壁が厚く条痕が認められる破片であり、9の刺突文が付される土器と同じ時期のものと思われる。

以上述べてきた出土土器の様相から、土坑の時期は大歳山式に並行する前期末頃と思われる。

S K 0 5 出土石器 (第55図12～14)

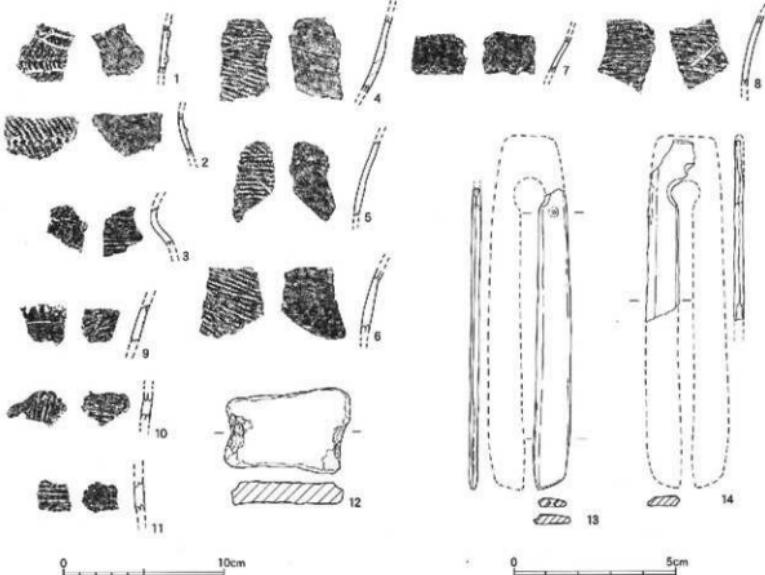
覆土中からは、石錐（12）が1点と块状耳飾（13、14）が2点出土している。

12は角が残る扁平な石の短辺側を打ち欠いた石錐である。長径は7.72cmと中程ぐらいの大きさのものである。

13と14は細長い块状耳飾であり、石材の色調などから別個体と考えられることから2個体出土しているものと判断した。また、掲載した実測図の波線による復元案は13と14がほぼ同じ大きさのものとした前提で掲載している。復元案での規模は長さ11cm程と非常に細長い耳飾になる。

13は耳飾の右側に当たる部分の破片であり、内側側部には擦り切りの痕跡が認められる。また孔の付近に径3mmの孔が別に見られ補修孔の可能性が考えられる。計測値は現状で長さ9.3cm、幅1.07cm、厚さ0.28cmで孔は径10mm程と復元される。

14は耳飾の左側に当たる部分の破片である。計測値は現状で長さ5.6cm、幅0.9cm、厚さ0.28cmで孔の径は10mm程と復元される。



第55図 西区SK 0 5 出土遺物実測図 (1～12はS = 1/3、13・14はS = 2/3)

(2) SK 06 (第56図)

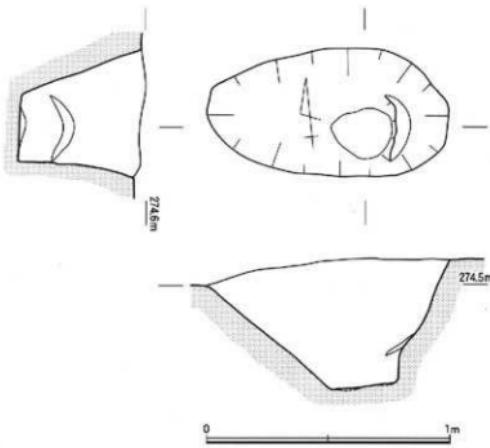
土坑は調査区南西端付近の標高275m付近で検出している。平面形は不整な楕円形で断面は底に向かって狭まる形状のものである。規模は長径1.0m、短径0.53m、深さ0.54mで底面は平坦に掘り込まれている。覆土は黒色土で遺物の出土はなかった。

(3) SL 01 (第57図)

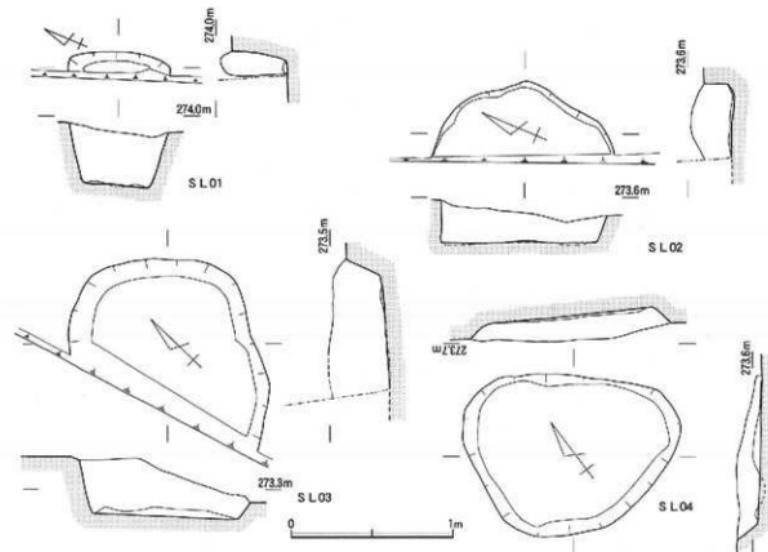
土坑は調査区西端付近の標高274m付近で検出し、調査区外にも広がっている。平面形は不整な円形と思われ規模は現状で長径0.63m、短径0.12m、深さ0.38mである。覆土は黒色土で遺物の出土はなかった。

(4) SL 02 (第57図)

土坑は調査区西端付近の標高274m付近で検出し、SL 01と同じく調査区外にも広がっている。平面形は不整な楕円形と思われ規模は現状で長径1.12m、短径0.44m、深さ0.25mである。覆



第56図 西区SK 06実測図 (S = 1/20)



第57図 西区SL 01～SL 04実測図 (S = 1/30)

土は黒色土で遺物の出土はなかった。

(5) S L 03 (第57図)

上坑は調査区西端付近の標高274m付近で検出し、02に接するような位置にある。これも調査区外にも広がっており平面形は不整な方形と思われ規模は現状で長径1.21m、短径1.14m、深さ0.36mである。覆土は黒色土で遺物の出土はなかった。

(6) S L 04 (第57図)

上坑は調査区西端付近の標高274m付近で検出し、前述した01～03と同じ位置にある。平面は不整形な形状で規模は現状で長径1.34m、短径0.98m、深さ0.15mである。覆土は黒色土で遺物の出土はなかった。

2. 第2黒色土層出土遺物 (第58図～60図)

第2黒色土層からは、既に述べているよう他の黒色土に比してに量は少ないが縄文土器と石器が出土している。以下出土遺物について縄文土器、石器の順に記述する。

(1) 縄文土器 (第58図～59図)

突带上に押し引きを施す土器 (第58図1～10) 1～10は縄文地で突带上に半裁竹管状工具による押し引きを施す土器の一群であり、口縁部の内面にも縄文が付されている。口縁部の形態は端部を三角形状にしてキザミを入れるもの(2、6)と口縁端部内面に突帯を貼り付け押し引きするもの(1)の2種類が認められる。また、押し引きを施す工具の違いによって2つに細分可能であり1～5は間隔の狭い爪形文のもので、6～8は間隔の広い押し引きのものである。

9は底部でその縁辺を抉っているものである。10は浅鉢の破片である。

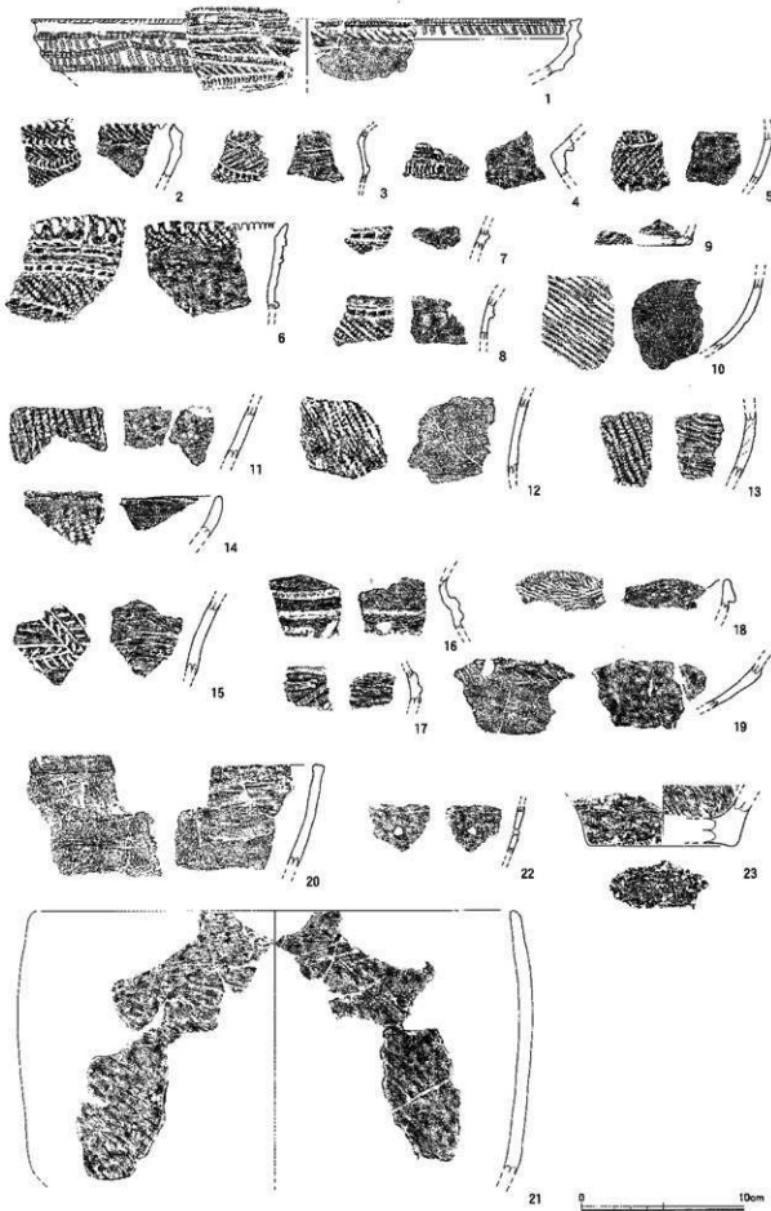
これらの上器は大歳山式や田井式といったものに類すると考えられ、前半に位置づけることが可能である。ただし6～8は押し引きの間隔から第3黒色土層出土の単木I式に比定したものと類似している。これらの土器群を里木I式とした場合、下層からの混入品でないならば第2ハイカ層との関連で重要な意味を持ってくる可能性がある。

原体の太い縄文地の土器 (第58図11～14) 11～14は器壁がやや厚めで原体が太く燃りのゆるい縄文が施されている土器である。これらは破片のため全容が分からぬが、船元I式又はII式に類するものであり中期前半に位置づけられる。

沈線文の土器 (第58図15) 15は沈線文で区画された緩杉状の沈線文を施している土器で1点だけ出土している。この種の土器は第一次調査でも1点(『板屋III遺跡報告書』の第324図35)出土しているが第3黒色土層から出土しており、今回の調査とは出土層位が異なっている。これらの理由から位置づけが難しい土器であり、第2黒色土層の時期に本來伴う土器であるのか確証がない。

縁帶文土器 (第58図16～19) 16～19は縁帶文土器と呼ばれる土器であり、太い沈線が施されている一群である。16と17は太い新縁文が施されている破片で、18は肥厚した口縁端部外側に縄文を付したものである。19は浅鉢で屈曲部に斜行する沈線文が施されている。これらの土器は布勢式又は崎ヶ鼻式の特徴を持つものと考えられ後期前葉のものと考えられる。

無文の土器 (第58図20～23) 20～23は無文の土器である。20と21は口縁部、22は円孔が確認される破片、23は底部の破片である。これらは明確な時期は不明であるが後期頃と思われる。



第58図 西区第2黑色土層出土縄文土器 (1) 実測図 ($S = 1/3$)

押し引き状の刺突文土器 (第59図 1～3) 1～3は押し引き状に刺突文を施した土器である。1と2は口縁付近に大きめの原体で2段に押し引きを施しており、2の内面には押し引きが反映されて膨らんでいる。3は竹管状工具によるものでやや特異なものである。

これら1～3の土器は月崎下層式の特徴に良く似ているが、第3黒色土層で見られるものとは原体の様子が違っている。位置づけが難しい土器であるが、第2黒色土層に本来作わない混入品である可能性も考えられる。

口縁部にキザミをもつ土器 (第59図 4、5) 4と5は口縁部にキザミを入れた土器である。これらは明確に位置づけることが難しい。

爪形文の土器 (第59図 6、7) 6と7は爪形文が施された土器である。これらは羽島下層Ⅲ式に類するもので前期の時期が考えられる。本来第3黒色土層に伴うべきものが混入したものと思われる。

「X」字状の条痕土器 (第59図 8) 8は「X」字状の条痕が見られる破片である。この特徴から前期に属する可能性があるので、第3黒色土層に本來伴うべきものの混入と推測される。

短沈線文の土器 (第59図 9) 9は縱方向に短沈線文が施された土器片である。その特徴から首畠式に類するものであり前期に属する可能性が考えられる。これも本來第3黒色土層に伴うべきものが混入したものと思われる。

(2) 石器 (第60図)

石錘 (第60図 1～17) 1～17は石錘である。石錘は重量で見ると最軽量のものは26g、最重量のものは343.5gと大小幅広く様々なものが出土している。またある一定の重量に集中しているわけでもなかった。

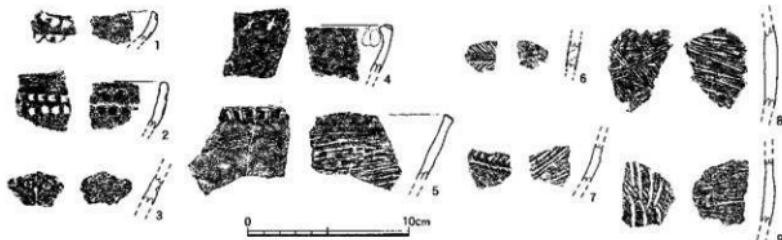
これらの石材は周辺の神戸川に存在している川原石を加工しているものである。そして大部分のものが川原石の粗辺部分を打ち欠いて使用している。

岡化した1～17の石錘を重量を目安にとりあえず大雑把に分類して5つ程に分けて理解される。

1～5は軽量なもので26g～50g程の重量のある石錘である。6～9はやや軽量なもので100g前後の石錘である。この中で6と9は他のものに比して細長い形状のものである。

10～12は150g～160g程の重量の石錘で中程ぐらいの重さのものである。13～16は190～260g程の重量の石錘で重いものである。

17は320gの石錘であり、300g以上の石錘は合わせて2点出土しており、飛び抜けて重いものである。

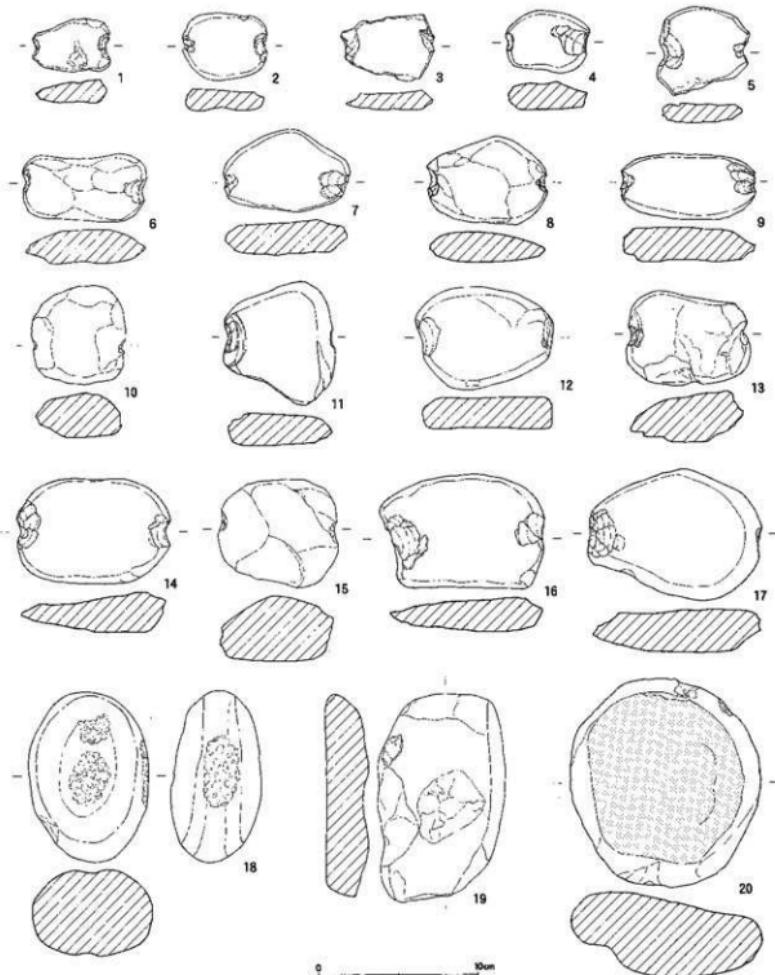


第59図 西区第2黒色土層出土縄文土器 (2) 実測図 (S = 1 / 3)

磨石・敲石類（第60図18） 18は表面と側面に敲打痕が見られる石器である。表面は敲打によって
歪んでいる。表面には明瞭な磨面は認められなかった。

19は表面が窪んだ石器であり、裏面は磨面であった可能性が考えられる。窪んだ部分は明瞭な敲
打痕は認められなかった。

台石・石皿類（第60図20） 20は表面が若干窪み磨面が見られる小形の石皿と考えられる石器であ
る。



第60図 西区第2黑色土層出土石器実測図 (S = 1 / 3)

第5節 第1黒色土層の調査（第61図）

第1黒色土層の調査は今回の西側調査区の中では最も多くの遺物と遺構が発見された。遺物は縄文土器、弥生土器、石器、鐵器、陶磁器、製鉄関連遺物等が出土しており、中心的な遺物は弥生時代後期に属するものであった。

遺構は土坑、ピット群、竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出している。時代ごとに見ると縄文時代の遺構は検出しておらず、弥生時代後期の竪穴住居跡8棟、近世の掘立柱建物跡1棟を検出している。近世の掘立柱建物跡を検出したは調査区の西側は、平坦面を作り出すために大きく地形を改変しており、さらにその上部に神社に関わる造成土が厚く堆積していた。このようにこの部分は大きく改められることから第1黒色土層は存在していないかった。

のことからも本来存在していたであろう縄文時代や弥生時代の遺構は破壊を受けて残存しなかった可能性が考えられる。

1. 竪穴住居跡

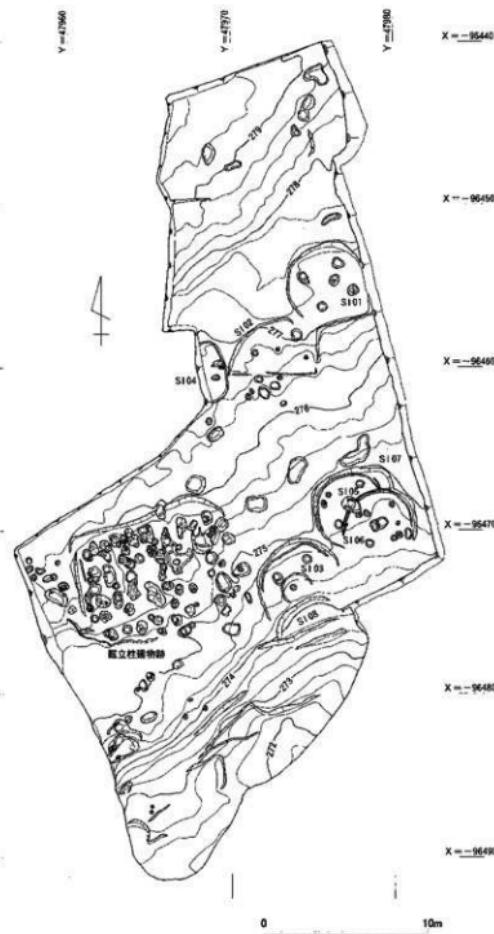
竪穴住居跡は切り合ったものを全て数えると8棟検出している。いずれのものも弥生時代後期に属するものである。

(1) S101（第62図）

住居跡は調査区の中程の標高277mの緩斜面で検出している。

平面形は南側の壁が残存していないが、隅丸方形と考えられ南北4.2m、東西4.7m、床面までの深さは0.55mである。

また床面の際には幅20cm、深さ5cm程の溝が沿っているが東側のみで確認された。

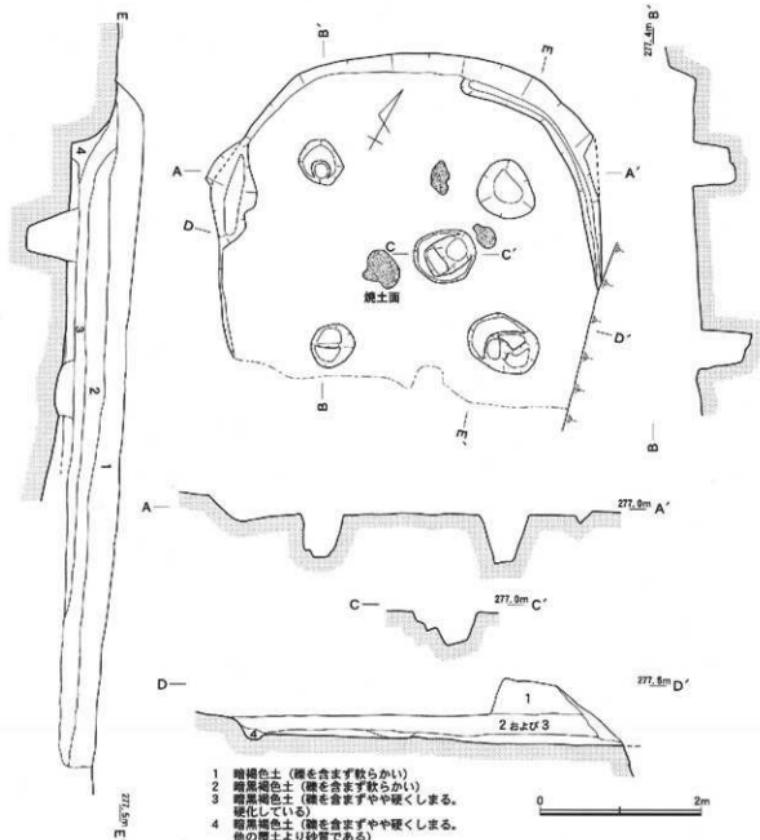


第61図 西側調査区第1黒色土層全体図 (S = 1/300)

非常に硬く締まった床面からはピットを4基、土坑1基、土坑周辺の3か所で焼土面を検出している。ピットは径60cm、深さ60cm程のもので、その配置から4本の主柱による住居が想定される。土坑は不整な円形で長径76cm、短径65cm、深さ40cm程のものである。

遺物出土状況（第64図） 遺物は床面付近出土のものと覆土中から出土するものとに2つに分けて取り上げている。基本的に覆土中から出土するものが多く、自然に流れ込んだものや人為的に投げ込まれた可能性が高いものと判断された。出土した遺物は弥生土器、石器、鉄器があり、また一次調査で西壁出土とした弥生土器（第65図）もこの住居跡から出土していることが判明した。

一次調査で出土した土器（第65図）には甕と高杯があり、これらは一箇所にまとまった状態で出土している。また、5は口縁部を下にして倒立した状態で出土し、それに接して4が横になった状態で出土している。また、1～3も4の付近で出土している。これらの一次調査で出土した土器群

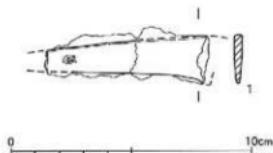


第64図 西区S101実測図 (S = 1/60)

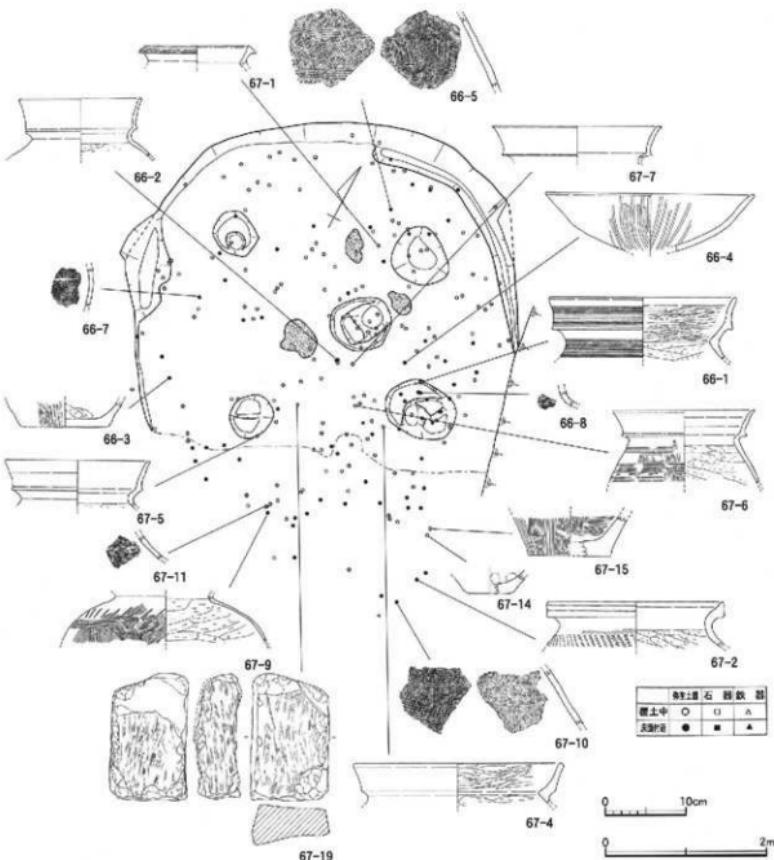
は型式的に大きく時期差が認められることや床面付近出土の可能性が高いことから、住居跡の構築・使用時期を示しているものと考えられる土器群である。

床面付近出土鉄器（第63図） 床面付近から出土した遺物の鉄器（1）は不明瞭なものであるが刀子の刃部と考えられ、先端部とちょうど肩部分で欠損しているものと思われる。

一次調査出土弥生土器（第65図） 一次調査で出土している弥生土器の複合口縁の甕は4点あり、1以外の個体は口縁部の特徴が類似している。1は口縁端部が丸みを帯び外面の棱は下方にやや下がる特徴を持っており、出土してい



第63図 西区S101出土遺物（3）
実測図（S = 1/2）



第64図 西区S101遺物出土状況実測図（S = 1/60、1/6）

る4点の中では古い特徴を持っている。その一方で2・4・5は口縁端部に面を持ち外面の棱は水平方向に突出している。

4は肩部に平行沈線文とその上下に刺突文が施され、胴部は球形に近い形態のものであり、4点中で最も新しい特徴を持っている。5は大形の壺で刺突文の上下に平行沈線文が施されている。

3の高壺は丸みを帯びた体部で大きく口縁が開く形態のものである。これは今回の調査で出土した高壺（第66図4）と同一個体であった。

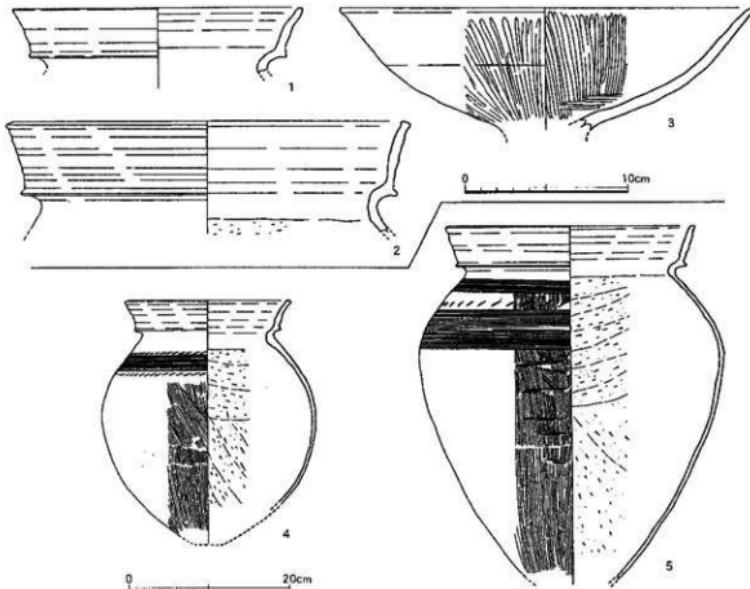
これらの第一次調査出土弥生土器はその口縁部の特徴から1が5類⁹、2・4・5が6類に相当するものと考えられる。

床面付近出土弥生土器（第66図） 床面付近出土として取り上げた弥生土器は、時期幅が見られるものであった。1は複合口縁の壺で口縁部と頸部外面に平行沈線文が施され、口縁部内面に横方向のヘラミガキが見られる。これは2類のものである。

2はやや長い口縁部の壺である。口縁部は横ナゲで端部には面を持っており6類と思われる。

3は内面をヘラ削りしている底部である。中期以降のものと思われる。

5～9は破片であり、6と9は硬く締まった床面を掘り下げた作業中に出土している。5は中期に属するものであり内外面ハケメで、外面にはヘラ書きの沈線文が施されている。6は前期に属する壺の破片と思われヘラ書きの沈線文が施される。7も前期の可能性が考えられる破片である。8は赤色顔料が塗られている破片であり器台と思われる。9は弥生土器ではなく縄文時代前期の爪形文



第65図 一次調査（調査区西壁）出土弥生土器実測図（S = 1 / 3、1 / 6）

土器と推測される。

覆土出土弥生土器（第67図 1～16） 覆土中として取り上げた弥生土器は時期幅が見られるものであった。出土した複合口縁の甕（1～8）は大きく4つに分けて考えられるものであった。

1と2は口縁帯が短く口縁外面に凹線文が施されている甕である。1は口縁帯が内傾していることからIV様式に属するものと思われるが、2は口縁帯が直立し頸部以下ヘラケズリが見られるので口縁部分類1 b類のものと思われる。

3～5は口縁帯が長くヨコナデ仕上げのもので外面の稜がやや下方に突出するものである。これらは3と5が4よりやや新しい特徴を持っているが4類と思われる。

6は口縁帯が長く稜が水平方向に突出しているもので、口縁帯の厚みが中程が厚くなる特徴のもので5類と思われる。

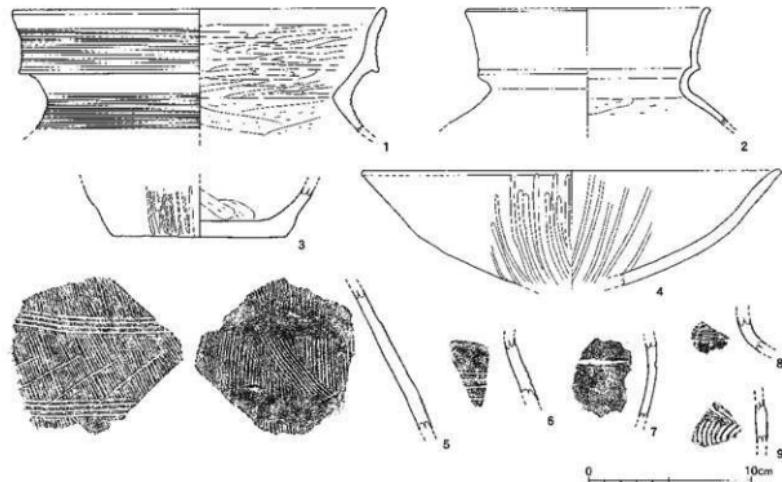
7と8は口縁端部に面を持っているもので外面の稜は水平方向に突出している。これらは6類のものと思われる。

9は頸部から肩部にかけての破片である。6類頸の甕の頸部と思われる。

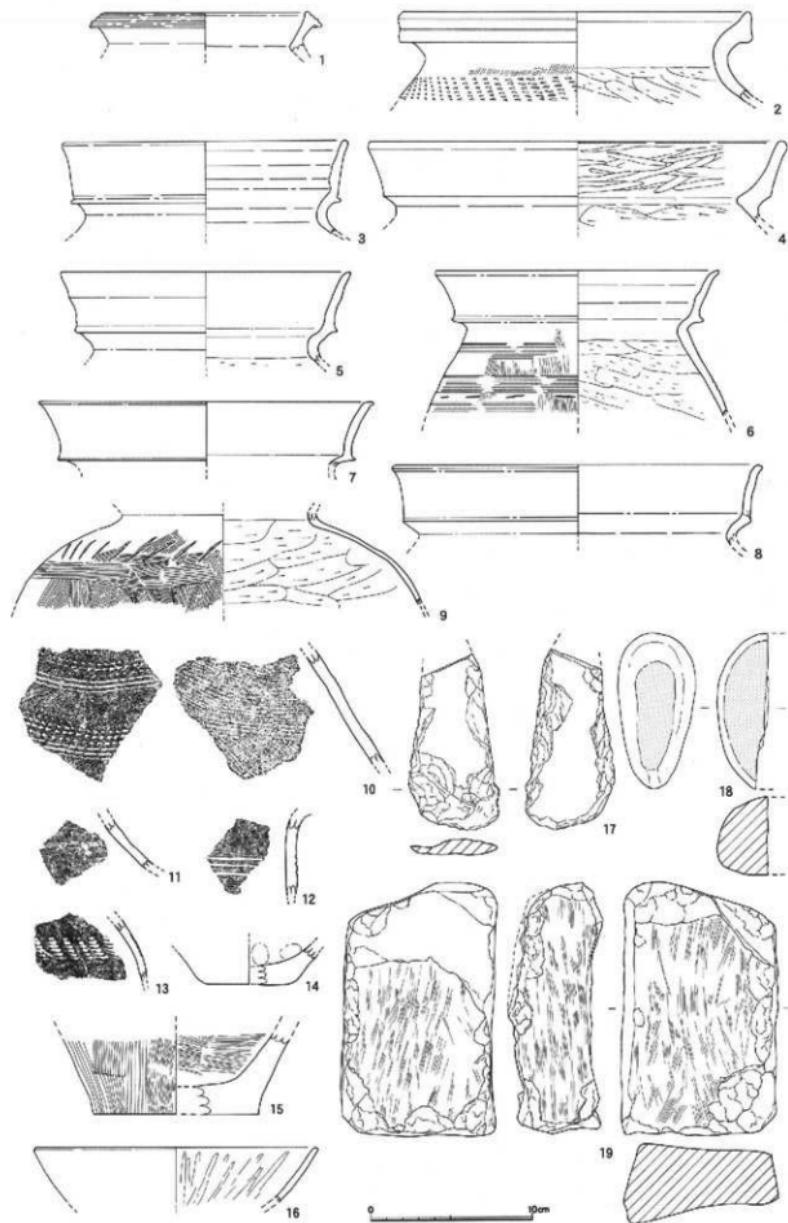
10～14は文様が施されている破片である。10は中期の壺片、11は外面ハケメで内面ミガキの器種不明な破片、12は前期の壺又は甕片、13はやや押し引き状の刺突文が施された後期の甕片である。

14と15は底部である。14は後期に属し、15は内外面にハケメが施されていることから前期と考えられる。

16は低脚壺の壺部である。内面に縱方向のヘラミガキが施されているもので5類や6類の甕に並行するものであろうか。



第66図 西区S 101出土遺物（1）実測図（S = 1/3）



第67図 西区S101出土遺物(2)実測図(S=1/3)

覆土出土石器 (第67図17~19) 覆土中からはいくつか石器が出土しているが、果たして住居跡と関連する時期のものであるかどうかは判断が難しいものであり、縄文時代のものが混入している可能性も考えられる。

17は扁平な打製石斧であり、弧状に加工された刃部は使用によって摩耗している。

18は半分以上が欠損しているが、表面と側面に磨面が確認される磨石である。

19は砥石である。表面と側面の各面に使用時の擦痕が見られ、

遺構の時期 住居跡の構造・使用時期は、一次調査出土の弥生土器（65図）や床面付近出土の弥生土器のうち新しい特徴をもつもの（第66図2）から決定されるものと考えられる。よって住居跡の時期はV類の時期^{**}と想定され弥生時代後期末と推測される。

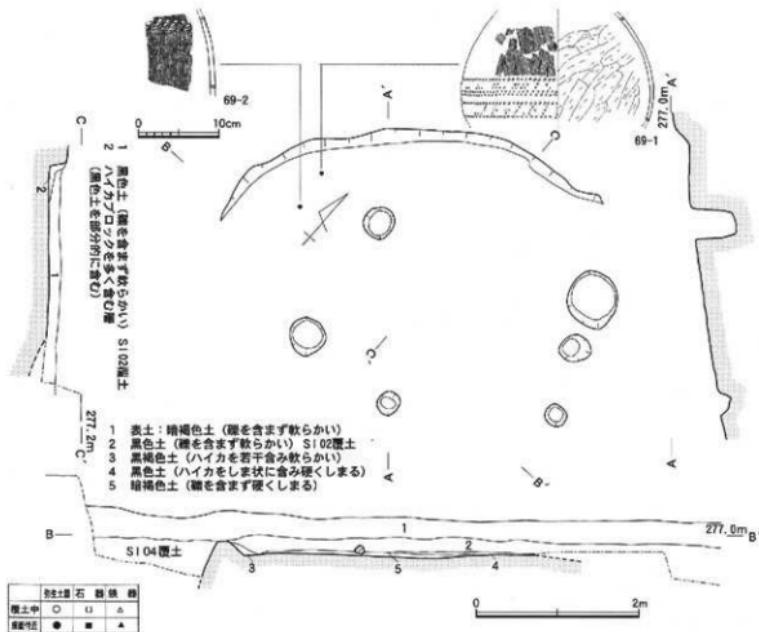
(2) S I O 2 (第68図)

住居跡は調査区の中程の標高277m付近の緩斜面で検出しており、前述したS I O 1の西側に接する位置になる。

平面形は北側の壁のみが残存していたことから不明なものであるが、規模は南北3.5m、東西4.4m、床面までの深さは0.2mである。

硬く締まった床面からはピットを5基検出しているが、これらがどのような組み合わせで柱穴として存在していたのかは判断できなかった。

遺物出土状況 (第68図) 遺物は確実に床面付近から出土しているものではなく、若干床面から浮い



第68図 西区 S I O 2 及び出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6)

た状態で 2 点出土している。

覆土出土弥生土器（第69図） 1 は壺の大きめの破片である。外面には櫛搔きによる 2 段の刺突文が施され、内面はヘラケズリである。この壺の時期はⅣ様式に属するものと考えられる。

2 は壺の小片であり、外面に櫛搔きによる刺突文が施され、内面には縱方向のヘラケズリが認められる。この破片も 1 と同じような時期が考えられる。

遺構の時期 住居跡の構築・使用時期は、床面付近から遺物が出土していないことから厳密に時期を推定できない。ただし、覆土から出土している弥生土器 2 点（第69図）を年代決定の資料とした場合にはⅣ様式となり、弥生時代中期後半の時期が想定される。なおこの住居跡が中期後半のものとすれば、板屋Ⅲ遺跡からこれまで検出した弥生時代に属する住居跡の中で最も古い時期のものになる。

（3）S 103（第70図）

住居跡は調査区の南側標高 275m の緩斜面で検出しており、南側が後世の改変で削平されており残存していない。

平面形は残存している北側部分から推測するに多角形か隅丸方形と思われる。規模は南北 3.4m 以上、東西 5.3m、床面までの深さは 0.3m である。また床面の縁際には幅 15cm、深さ 8cm 程の溝が沿っている。

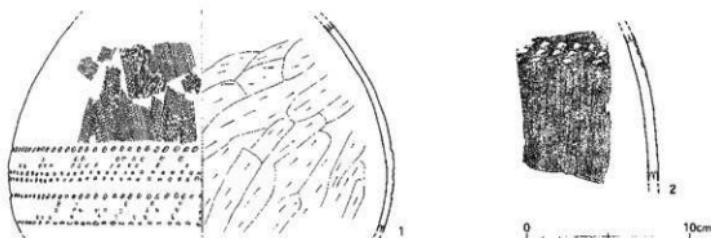
非常に硬く締まった床面からはピットを 2 基を検出している。ピットは径 50cm、深さ 50cm 程のもので、南側が存在しないので不明確であるがその配置から 1 本の土柱による住居が想定される。

また床面の南側で土坑を 1 基（第75図）検出しているが、この住居跡に直接付随する土坑ではないものと判断された。

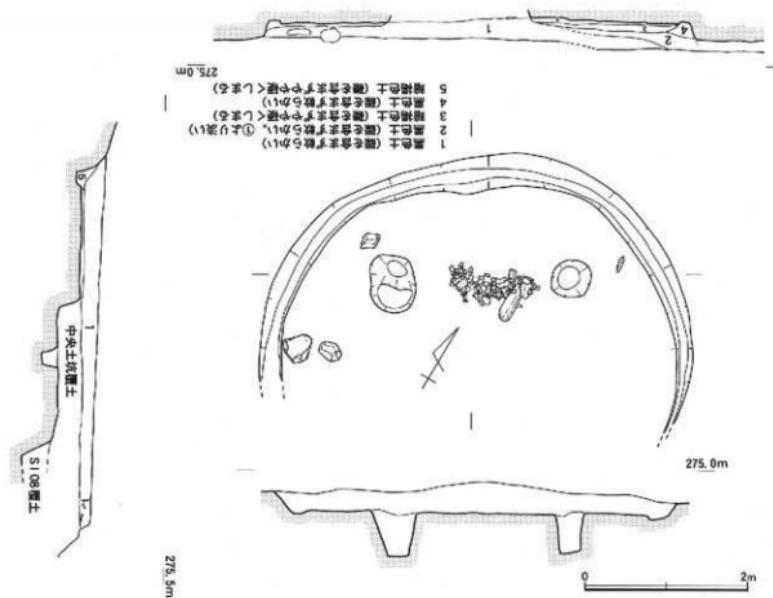
土器溜り出土状況（第70図下） 住居跡のピット 1 と 2 の間付近からは口縁部を西側に向けた 4 個の壺が横並びにされた状態で出土している。これらは住居跡が廃絶後ある程度埋まつた状態で据え置かれた可能性が考えられるものである。断面等では明確に確認できなかったが、おそらく土坑状に掘り窪められた中に置かれたものと考えられる。

これらの土器群はおそらく住居跡廃絶後にいわゆる廃居墓として埋置された土器棺である可能性が高いものと考えられる。

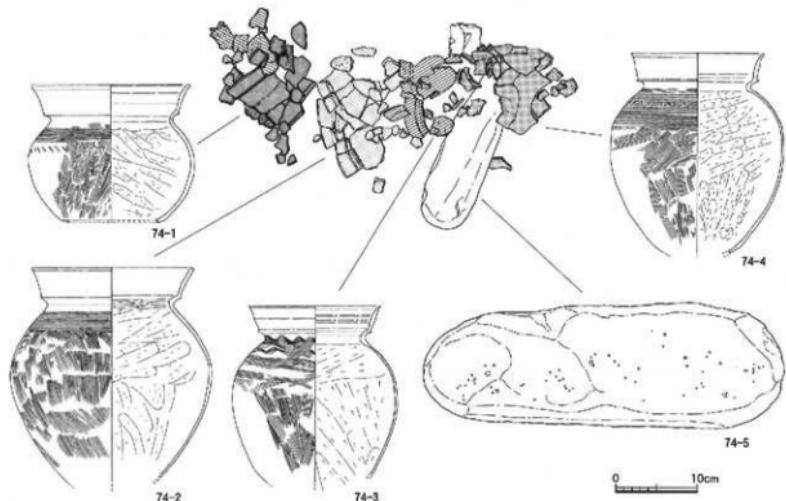
また土器の他に棒状の石材が 1 つ出土している。これもこの土器溜りに関連する石材と思われ、土器棺の標行として置かれていたものであるのかもしれない。



第69図 西区 S 102 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



土器溜り拡大図 ($S = 1/15$)



第70図 西区 S 103 及び土器溜まり出土状況実測図 ($S = 1/60, 1/6$)

遺物出土状況（第71図） 遺物は床面付近出土のものと覆土中から出土するものとに2つに分けて取り上げている。基本的に覆土中から出土するものが多く、自然に流れ込んだ可能性が高いものと判断された。出土した遺物は弥生土器（第72、73図）、鉄器（第77図）がある。

床面付近出土弥生土器（第72図1～11） 床面付近出土として取り上げた弥生土器は、時期幅が見られるものであり、壺の口縁部（1～4）も様々な形態のものが出土している。

1は口縁部に面をもつ壺であり、内面頭部以下にヘラケズリをするものである。これは1類に相当するものと考えられる。

2は複合口縁の壺で外面に5条の平行沈線文が施され、内面は横方向のヘラミガキである。これは口縁部形態からは2類と思われる。

3は複合口縁の壺で、外面に平行沈線文を施した後にナデ消して仕上げたものと考えられる。外面の稜はやや下方に突出し肩部には平行沈線文と刺突文が見られる。これは5類と思われる。

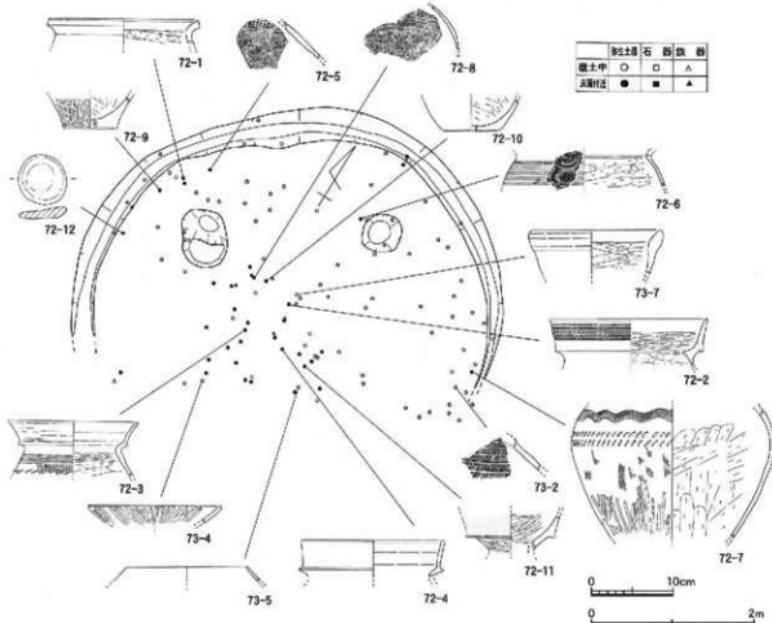
4は複合口縁の壺で外面の稜は水平方向に突出し端部には面を持っている。床面付近出土の中では最も新しい特徴が見られる土器である。6類になると考えられる。

5～8は文様が付された壺・壺片である。5は中期の壺又は壺片、6～8は後期の壺片である。

9と10は底部であり、内面ヘラケズリのものである。

11は鼓形器台の受部であり、外面には赤色顔料が塗布されている。

床面付近出土石器（第72図12） 石器は1点出土している。これは扁平で円形の石器であるが、自



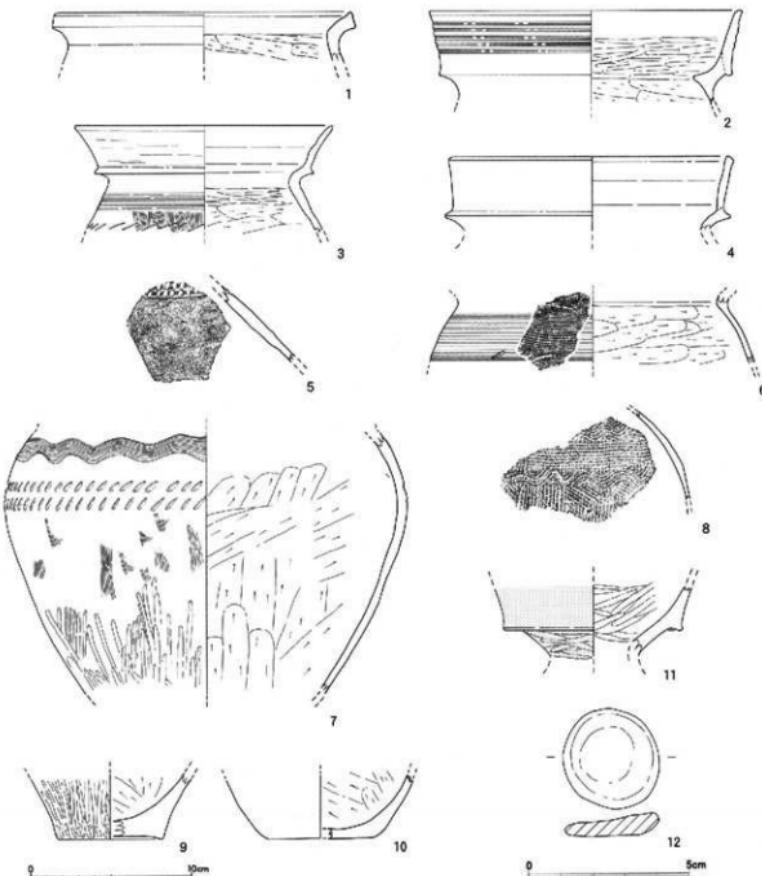
第71図 西区S 103遺物出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6)

然の石の可能性も考えられる。表面は何らかの使用によるものか若干窪んでいるが、用途等の明らかにできない石器である。

覆土出土弥生土器・土師器（第73図） 1は複合口縁の壺である。口縁外面の稜はやや下方に突出し、端部は丸いものである。口縁部形態では5類のものと考えられる。

2は沈線文の間に刺突文が付された壺片である。3は鼓形器台の台部であり外面はヨコナデのものである。4は低脚壺の坏部で内外面とも継方向のヘラミガキが施されている。5は器種不明な器厚の薄い破片である。

6と7は単純口縁のものである。6は古墳時代後期以降の土師器と考えられ住居跡の南側でまとまって出土している須恵器とセットになるものと考えられる。7は位置付けが難しい土器であり古



第72図 西区S-103出土遺物 (1) 実測図 (1~11はS=1/3、12はS=2/3)

墳時代後期の甕としても違和感がないものであるが、6や須恵器が出土している住居跡南端とは異なる場所から出土していることから弥生時代後期に属す粗製の土器である可能性もある。

覆土出土鉄器（第77図3、4） 覆土中からは2点の鉄器が出土している。3は扁平な棒状のものであり器種は不明である。4は厚みの薄い破片であり刃子などの可能性が考えられるが、小片のため詳細不明である。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、床面付近からの良好な状況で遺物が出土していないことから困難な面もあるが、床面付近出土遺物の中で最も新しい特徴を持つ甕（第72図4）から決定するとV類の時期の可能性も考えられる。しかし、後述する土器溜りの土器がIV類の時期と考えられることから、少なくともそれ以前のものと考えられ、第72図3の甕などからIV類の時期としておきたい。よって弥生時代後期末頃の時期が想定される。

土器溜り出土遺物（第74図） 土器溜り出土の弥生土器（1～4）はほぼ完形のものであるが、いずれのものも底部が存在していない。遺物の観察からは確実な痕跡は認められなかったが、おそらく底部は打ち欠かれたものが置かれていたものと考えられる。

1は平底で鉢と言われているものである。口縁端部は直を持ち色調は淡灰色のものである。

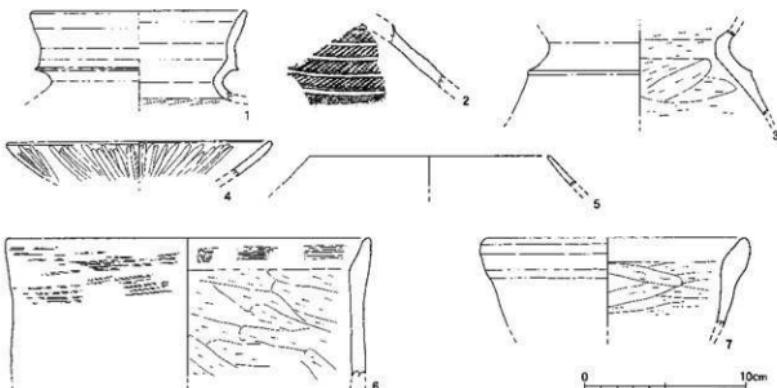
2は口縁端部が尖らない丸いが若干面を持っているように見える甕である。肩部には平行沈線文とその下に方向を違えた刺突文が施されている。色調は淡灰色である。

3は口縁端部が尖る甕で、肩部には乱れた波状文と平行沈線文が施されている。色調は橙色のもので外面の縁は下方に突出する。

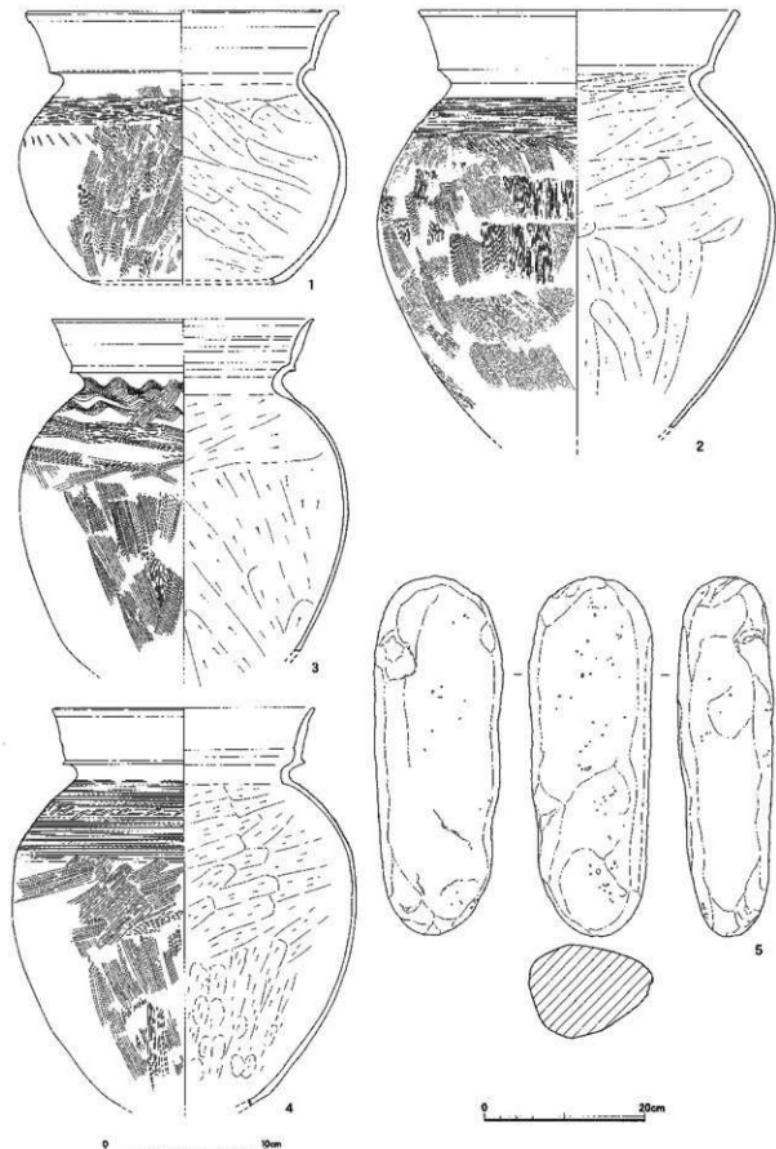
4は口縁が尖る甕で肩部には平行沈線文の間に刺突文が施される。色調は橙色のものである。

5は断面が三角形の棒状の石材であるが、確実に石器として使用された面はなかった。

土器溜りの時期 出上した弥生土器の甕は、口縁端部、文様、色調が異なっているが、胴部が卵形であり口縁部外面の縁が若干下方に突出するなど共通する特徴も持っている。これらのことと踏まえるとIV類の時期として考えられ、時期は弥生時代後期末に属すものと推測される。



第73図 西区S 103出土遺物(2)実測図(S=1/3)



第74図 西区S103土器棺墓出土弥生土器・棒状石材実測図（1～4はS=1/3、5は1/6）

S I 0 3 中央土坑（第75図） S I 0 3 の覆土除去後の床面精査時に住居跡の中央付近で土坑を検出している。この土坑と住居跡の関係については、当初他の住居跡と同様な4本の主柱穴の中央に位置する土坑と考えて調査していたことから厳密な前後関係については確認できなかった。

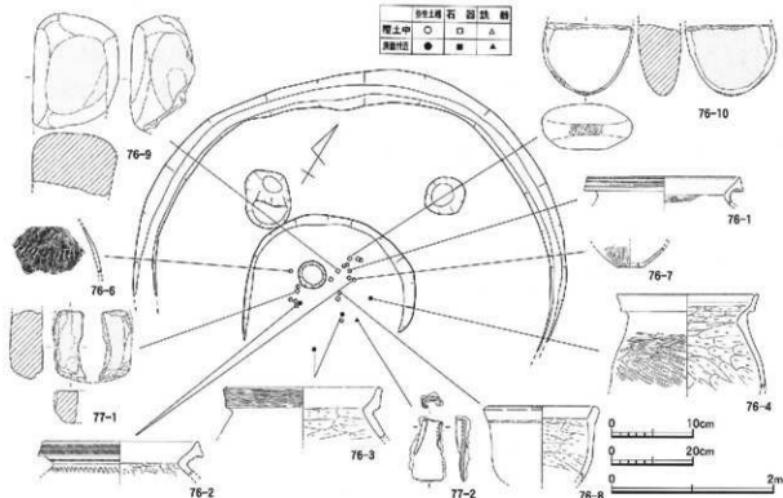
可能性として住居跡の硬く締まった床面がこの土坑部分では検出されなかっことから、住居跡の廃絶後に掘り込まれている可能性も考えられる。

土坑は南側が存在しないが、その規模は東西2.1m、南北1.5m、深さ0.3mであり、底にはさらに径35cm、深さ20cmのピットが1つ掘られていた。土坑内の覆土からは弥生土器、石器、鉄器が出土しており、その中で石器は覆土の上部から出土している。

中央土坑出土弥生土器（第76図） 出土した弥生土器は時期幅が見られるものであった。1と2の壺は上下に拡張した面を持った口縁部で、ともに3条の凹線文が施されている。時期は1が頸部以下ハケメであるのでIV-2様式、2が頸部以下ケズリであるので1類と考えられる。3は複合口縁の壺で、口縁外面に1単位5条の平行沈線文が見られる。これは2類と思われる。4はやや異形の壺である。肩の張らない胴部の外面はミガキ、内面は口縁下部以下がヘラケズリである。このような土器は類例が無く位置づけが難しいが、口縁部の形状から2類に含めたい。5は複合口縁の壺である。外側の稜はやや下方に突出しており5類と思われる。

6は平行沈線文の下に刺突文が施された壺の胴部である。7は平底の底部であり外面には縱方向のミガキが見られる。8は口縁部がやや厚みを持つ単純口縁の小形の壺であり、位置づけが難しい土器である。

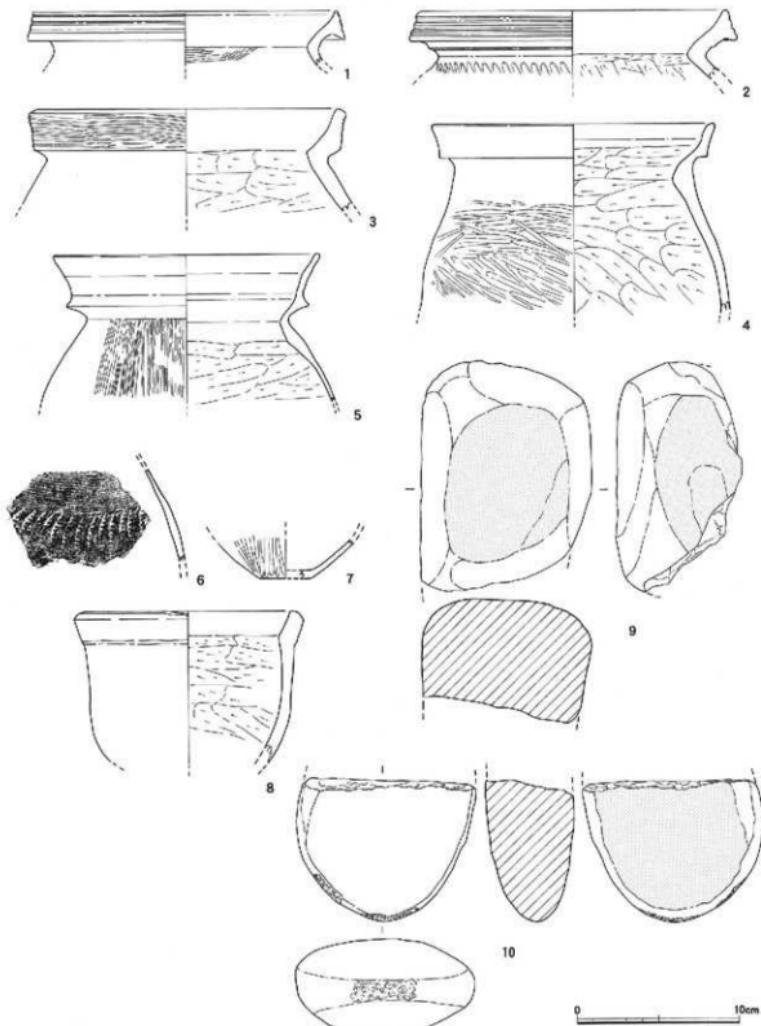
中央土坑出土石器（第76図9・10、第77図1） 石器は磨石・敲石類が2点と石皿・台石が1点出土している。9は表面と側面に磨面が確認され、10の表面には磨面が、側面には敲打面が見られる。第77図1は破片であるが表裏面に磨面が見られるものである。



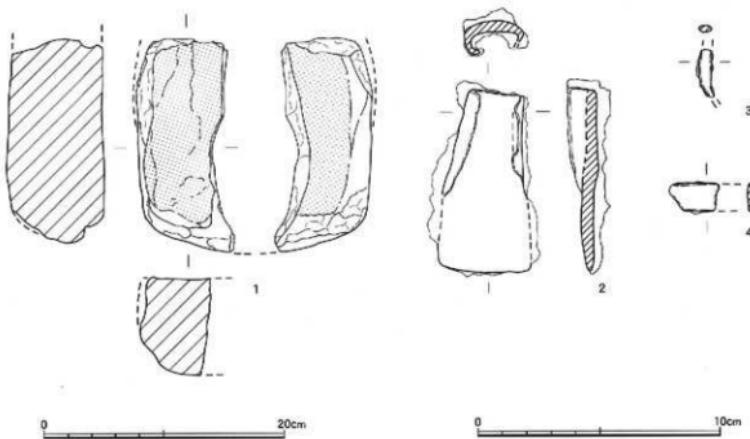
第75図 西区 S I 0 3 中央土坑遺物出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6, 1/12)

中央土坑出土鉄器（第77図2） 鉄器は完形に近い袋状鉄斧が出土している。鎌で覆われていることから詳細の分からぬ部分もあるが、袋部から刃部にかけて厚みはあまり変わらないが、若干刃部が厚くなる。袋部は側面から鍛打され、また内側に巻き込むように折り曲げられている。

中央土坑の時期 中央土坑の時期は、出土している弥生土器の中で最も新しい特徴をもった甕（第76図5）からIV類の時期と考えられ、弥生時代後期末頃と推測される。



第76図 西区S103中央土坑出土遺物実測図 (S=1/3)



第77図 西区S103・中央土坑出土石器・鉄器実測図（1はS=1/4、2~4はS=1/2）

(4) S104 (第78図)

住居跡はその一部を調査区の西端の

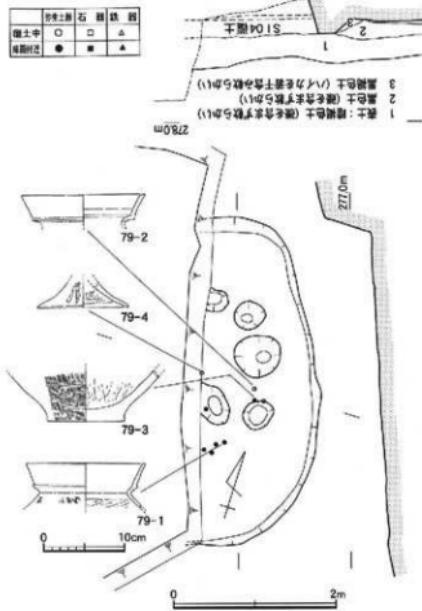
標高277m付近の緩斜面で検出しており、前述したS101・102の西側に位置している。

平面形は隅丸方形になるものと思われ、規模は南北4.0m、東西1.6m以上、床面までの深さは0.6mである。

硬く締まった床面からはピットを5基検出しているが、不規則な配置なためどのような組み合わせであるかは判断できなかった。

遺物出土状況（第78図） 遺物は弥生土器がいくつか出土しているが少數であった。また、遺物は基本的に床面付近から出土している。

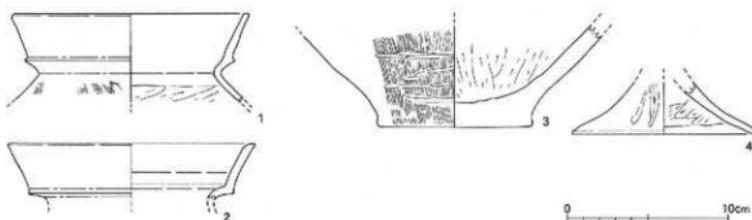
出土弥生土器（第79図） 1は複合口縁の壺で口縁端部は丸く、外面の稜は水平方向に突出している。これは5類と思われる。2は複合口縁の壺で5類に含まれると思われる。3は底部で外面にタテハケ後にヘラミガキが施されている。4は高杯等の脚部と考えられ



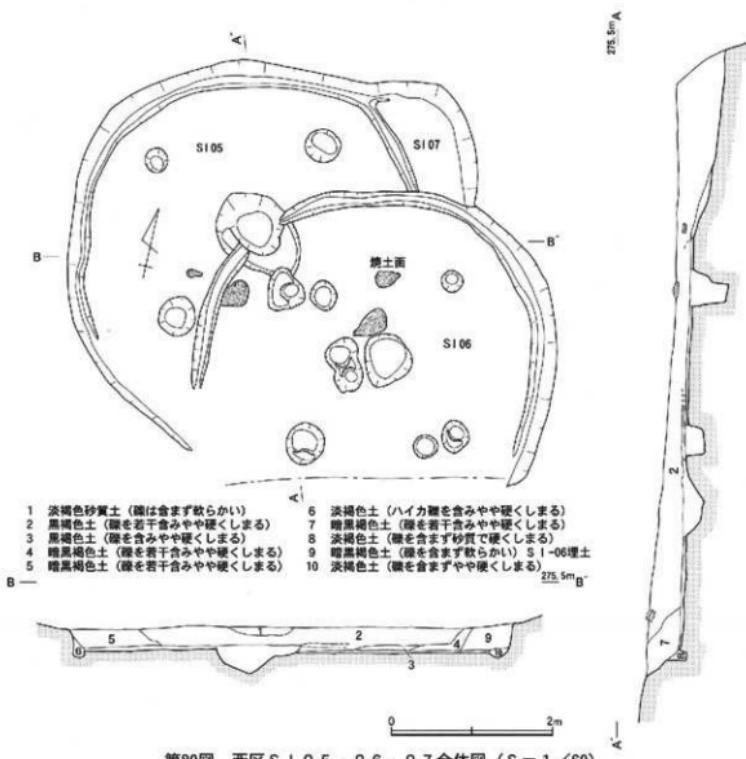
第78図 西区S104及び出土状況実測図
(S=1/60、1/6)

る。外面にはミガキが、内面にはケズリが施されている。この土器の胎土は他の弥生土器よりも精製されており、搬入品である可能性も考えられる。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、床面付近からの良好な状況で遺物が出土していないことから困難な面もあるが、床面付近出土の甕（第79図1）や覆土出土の壺（第79図2）を参考にすればIV類の時期と思われる。よって弥生時代後期末頃の時期が想定される。



第79図 西区S 104出土遺物実測図 (S = 1/3)



第80図 西区S 105・06・07全体図 (S = 1/60)

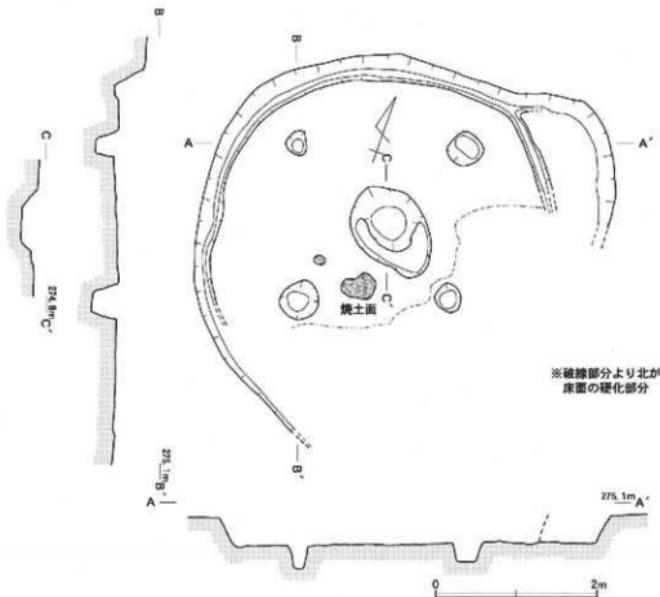
(5) S I 05 (第81図)

3棟の住居跡の新旧関係について (第80図) 調査区の南東隅付近標高275mで検出したS I 05～07の3棟の住居跡は当初1棟のものと考えて調査している。この3棟の新古関係は土層断面ではあまり明瞭に観察できなかったが、05の硬化した床面を除去した段階で06の壁体溝が検出できたことから06(古)～05(新)といった新古関係が判明した。また05・06調査中に07に対応する硬化した床面部分が認められなかったことから、07については05と06よりも古い可能性が考えられた。以上述べてきたことから古い順に07→06→05となる。

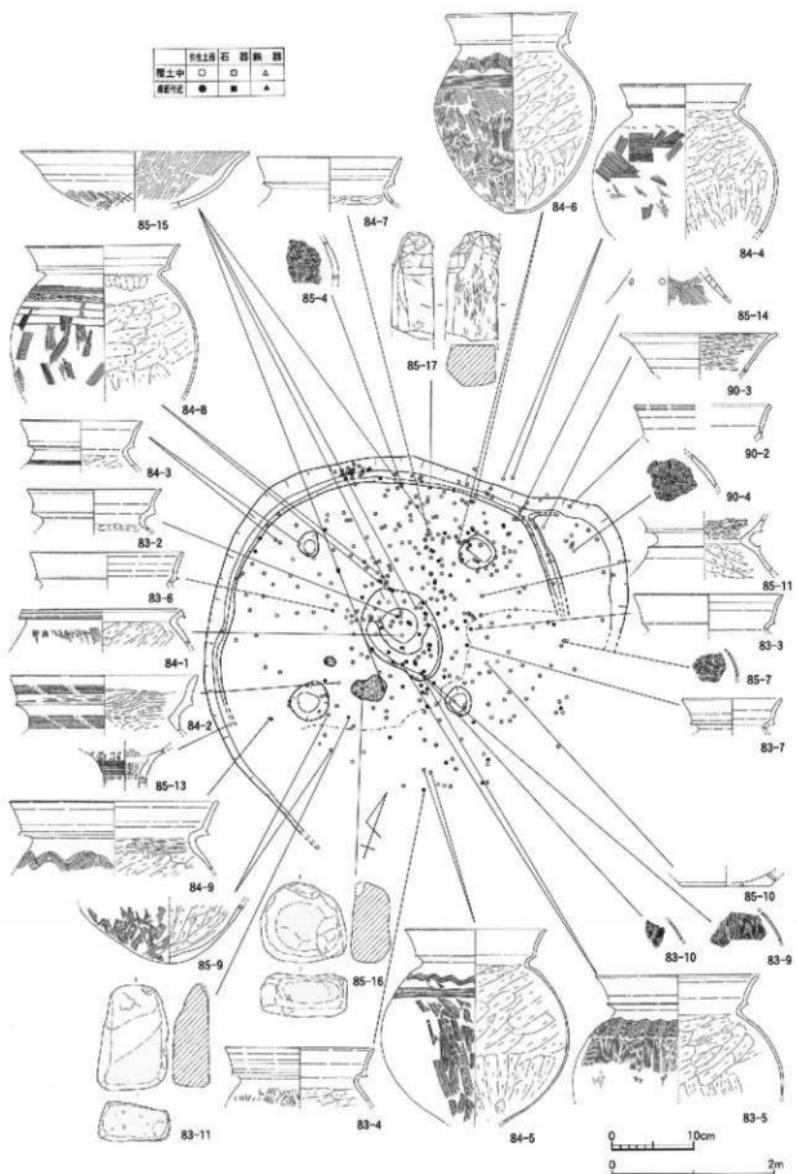
住居跡の構造 (第81図) 住居跡は南西側を確認できなかったが、隅丸方形の平面形になるものと思われ、規模は南北4.4m、東西4.4m以上、床面までの深さは0.4mである。また硬く締まった床面は調査の不手際もあり南東部分を検出できなかった。残存状況が良好な部分では床面の壁際に幅16cm、深さ10cm程の溝が沿っているのを確認できた。

床面からはピットを4基と土坑を1基検出し、土坑の南では焼土面を検出している。ピットは径25～50cm、深さ30cm程のもので、その配置から4本の主柱による住居が想定される。土坑は不整な楕円形で長径1.25cm、短径0.85cm、深さ20cm程のものである。

遺物出土状況 (第82図) 遺物は非常に多数出土し、床面付近出土のものと覆土中から出土するものとに2つに分けて取り上げている。基本的に覆土中から出土するものが多く、床面付近出土のものも良好な状況で出土したと判断されるものは、ほとんどないことから自然に流れ込んだ遺物が多いものと考えられる。



第81図 西区S I 05・07実測図 (S = 1/60)



第82図 西区S105・07遺物出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6)

床面付近出土弥生土器（第83図 1～10） 床面付近出土として取り上げた弥生土器は、時期幅が見られるものであり、壺の口縁部（1～7）も様々な形態のものが出土している。

1は口縁部に面をもち3条の凹線文が施された壺である。これはIV-2様式と考えられる。

2はやや厚みのある複合口縁の壺である。これは4類になるものと思われる。

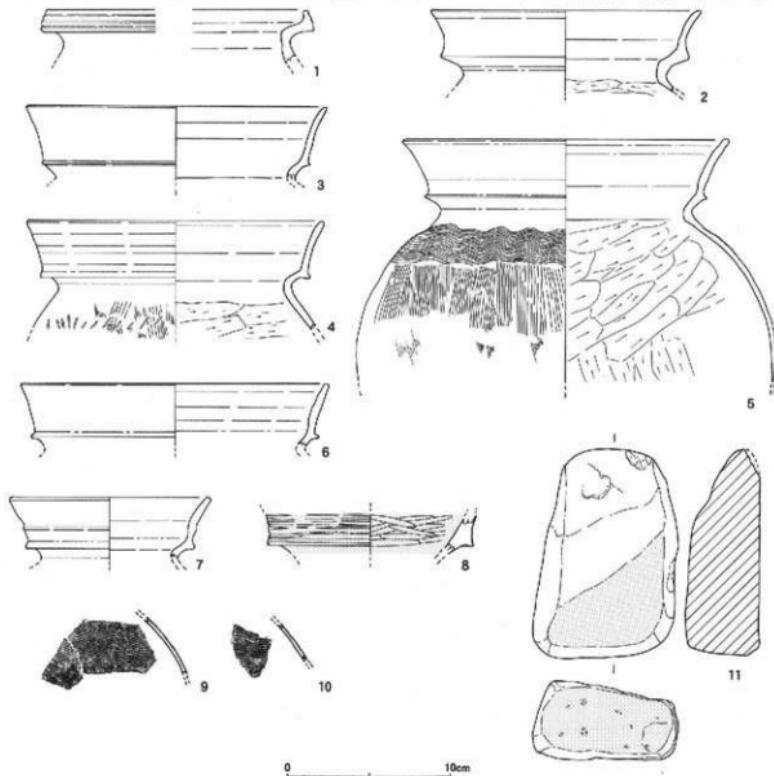
3～5は口縁端部が丸い複合口縁の壺で、外面の稜はやや下方に突出したものである。これらは5類に分類される。

6と7は口縁端部に面を持つ複合口縁の壺である。6は外面の稜が若干下方に突出しており5類であろうか。7は小形のもので外面の稜がやや下方に突出している。口縁端部に面があるので6類に含まれる。

8は、鼓形器台の受部であり内外面に赤色顔料が付着している。2～3類に並行するものと考えられる。

9と10は文様が施された壺の破片である。9は波状文が、10は刺突文が施されている。

床面付近出土石器（第83図11） 石器は磨石が1点出土している。短辺側面と表面の1/3程に磨



第83図 西区S105出土遺物(1)実測図(S=1/3)

面が確認される。

覆土出土弥生土器（第84・85図） 第84図の複合口縁の壺は時期幅が見られるものであり、口縁部の形状から5つ程に分けられるものである。

1は拡張された口縁部に3条の凹線文が施されたものである。頸部以下ヘラケズリが見られるところから1類のものと考えられる。

2は平行沈線文が施された複合口縁の壺で、頸部にも平行沈線文が見られる。これは2類のものと思われる。

3は口縁端部に向かって器厚が薄くなる複合口縁の壺で外面の稜はやや下方に突出している。4類に含まれるものか。

4～7は口縁端部に面を持たず稜部の付近の器厚が薄くなる複合口縁の壺である。これらの中で残存部分が良好で胴部形態の様子が分かる4～6を見ると、卵形の胴部（6）と球形の胴部（4・5）が存在しており時期差が見られる。これらは5類～6類に分類されるものと思われる。

8と9は口縁端部に明瞭な両がある複合口縁の壺である。8は球形の胴部で口縁部外面の稜は水平方向に突出し口縁部も短いものである。これは出土した上器の中では最も新しい時期の特徴を持っているものであり6類に位置づけられるものと考えられる。

第85図1～8は文様が施された壺の胴部片である。1は平行沈線文が施され、2～7は刺突文が施されている。2はやや板材の小口部分を使用した可能性が考えられる刺突文であり、板屢Ⅲ遺跡ではあまり見られない文様である。3は間隔が異なるシャープな刺突文が2段見られ、4は貝殻復縁による刺突文が2段施されている。5は押し引き状に刺突文が施されているもので、6は羽状文である。7は平行沈線文を挟んで2段の刺突文が施されている。8は小片であるが平行沈線文と波状文が施された破片と思われる。これらの胴部破片は弥生時代後期に属すると考えられる。

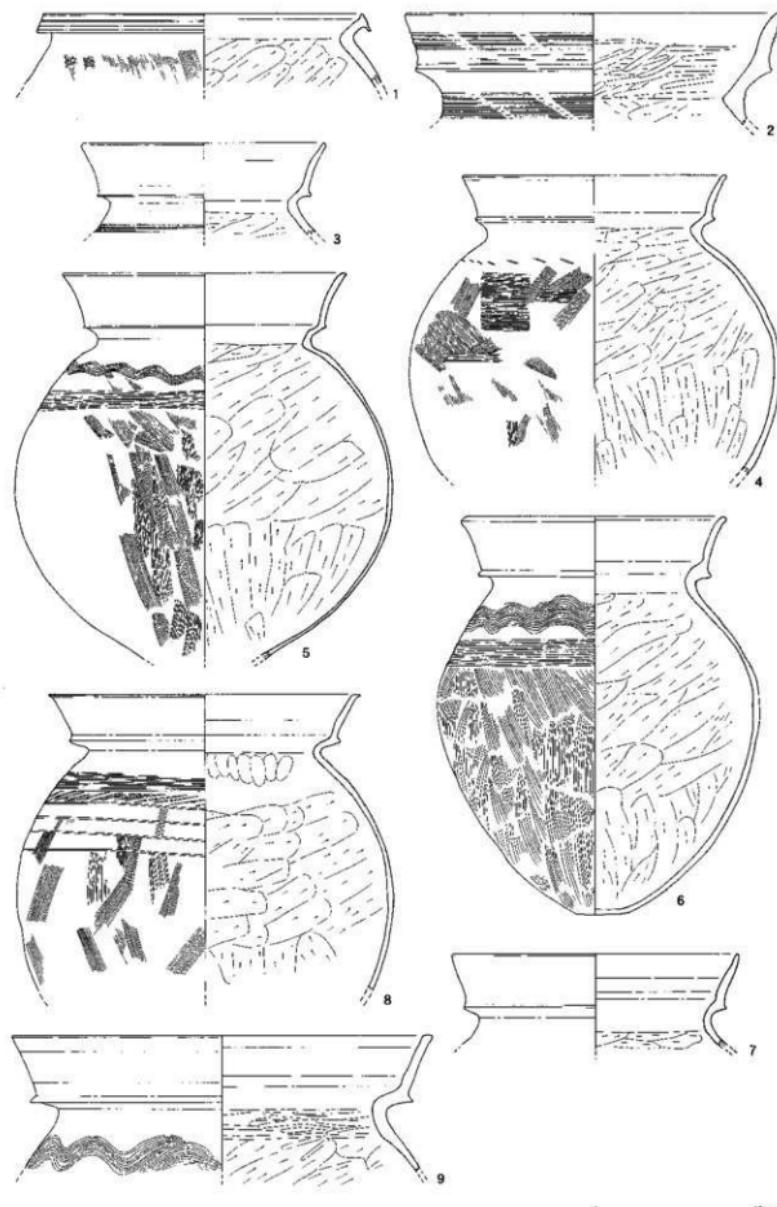
9と10は壺の底部周辺の破片であり、9は痕跡的な底部の平坦な部分が認識できる個体である。

11は鼓形器台の筒部周辺の破片である。筒部は短く受部内面はミガキ、台部内面はヘラケズリである。5類や6類に伴う可能性があるものと思われる。

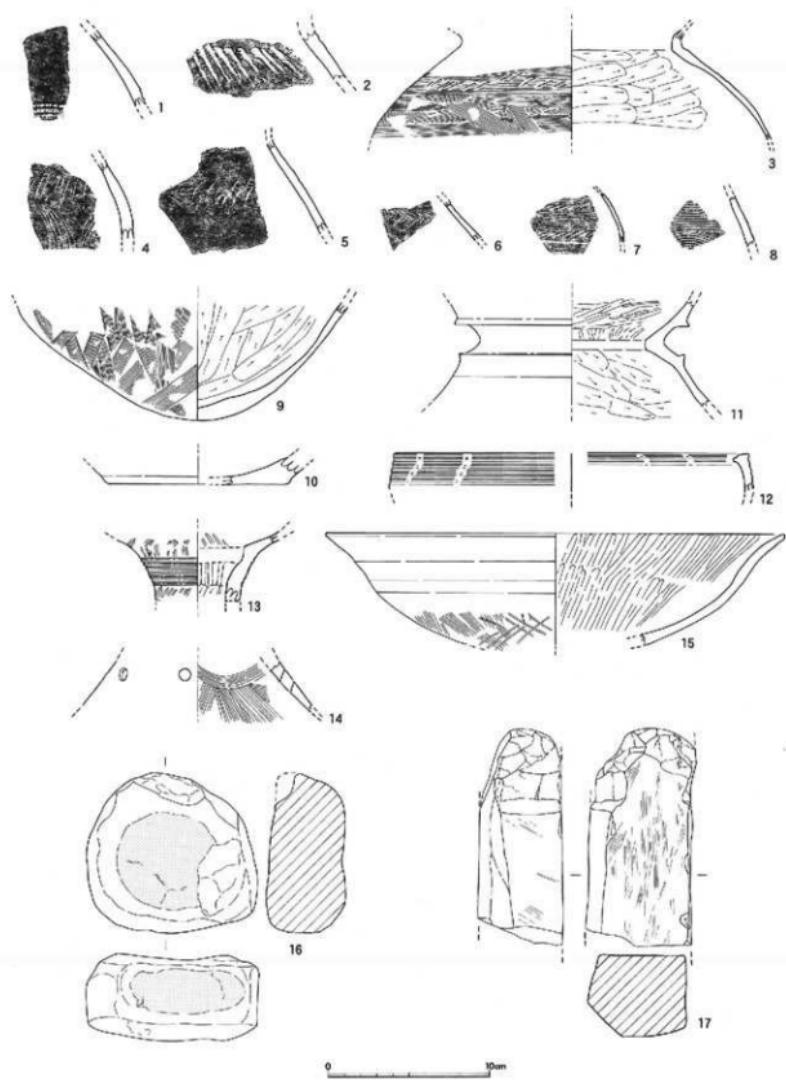
12～15は高杯である。12は口縁端部と側面に凹線文が施されたものでIV-2様式のものである。13は杯部の充填部分が剥離した脚部であり、外面上にはヘラ描きの直線文が施される。これはIV様式に位置づけられる。14は円孔が空けられた脚部片である。15は口縁部が大きく開いた杯部である。形態は内済気味に立ち上がり中程から外側に折れるもので、内面のヘラミガキもその屈曲部分で異なる。おそらく5類に並行する可能性のものと思われる。

覆土出土石器（第85図16・17） 16は磨石である。不整円形のもので表面と側面部の2面に磨面が認められる。17は砥石である。これは断面が五角形のもので、各面とも使用面であったと考えられ、細かい擦痕が認められる。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、床面付近からの良好な状況で遺物が出土していないことから困難な面もあるが新しい特徴を持つ土器を参考にして検討したい。床面付近出土の壺の中でも新しい特徴のある土器は球形のもの（第83図5）や口縁端部に平坦面を持つもの（第83図6）である。また覆土出土の球形の壺（第84図4・5・8）も参考に加えて検討した場合にはIV類の時期でも新相もしくはV類の時期に相当する可能性もあるが、とりあえずIV類の時期としておきたい。よって弥生時代後期末頃の時期が想定される。



第84図 西区S 105出土遺物(2)実測図(S=1/3)



第85図 西区S I 05出土遺物(3)実測図(S=1/3)

(6) S I O 6 (第86図)

住居跡の構造 住居跡は東側が残存状況が良好であるが他は壁体溝が確認されるのみである。またすでに前述しているが、S I O 5 より古い時期の住居跡である。

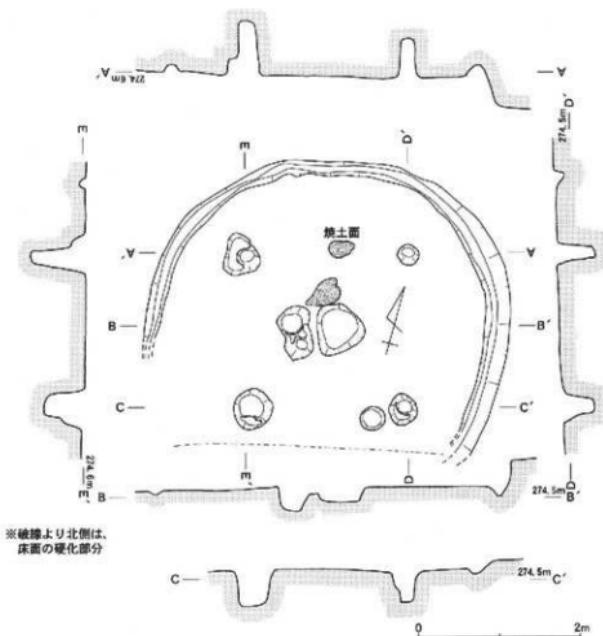
平面形は隅丸方形になるものと思われ、規模は南北3.6m以上、東西4.5m程、床面までの深さは0.3mである。また床面の壁際には幅20cm、深さ15cm程の溝が沿っている。

床面からはピットを6基と上坑を1基検出し、土坑の南では焼土面を検出している。ピットは径26~40cm、深さ40~60cm程のもので、その配置から4本の主柱による住居が想定される。上坑は不整な円形で長径63cm、短径60cm、深さ15cm程のものである。

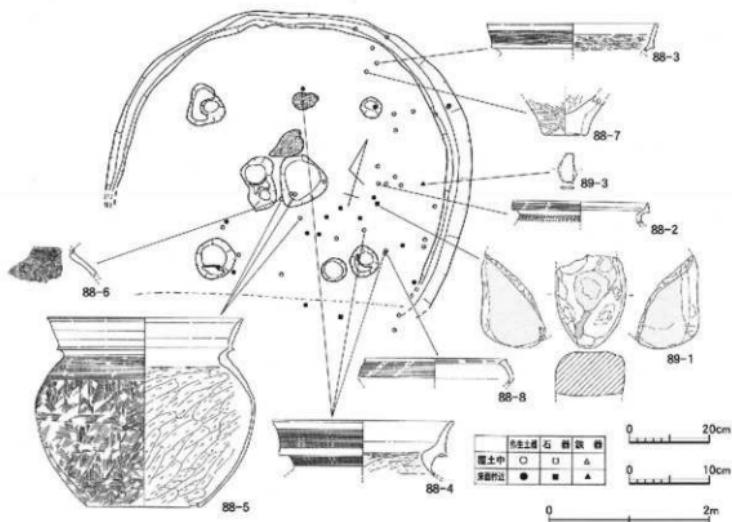
遺物出土状況（第87図） 遺物の取り上げでは、S I O 5 ~ 0 7 を1つの住居跡として当初認識していたことから混乱が生じているが、確実にS I O 5 に伴わないものをS I O 6 の遺物としている。よって住居跡の南東側から出土した遺物を中心に検討することになった。また他の住居跡と同様に床面付近出土のものと覆土中から出土するものとに2つに分けて取り上げているが、図化可能な遺物は覆土から出土した遺物がほとんどであった。

出土弥生土器（第88図） 1は壺の頸部付近の破片であり、突帯にはキザミが入っている。III-2~IV-1様式頃のものと考えられ、いわゆる塙町式との関連が考えられる土器である。

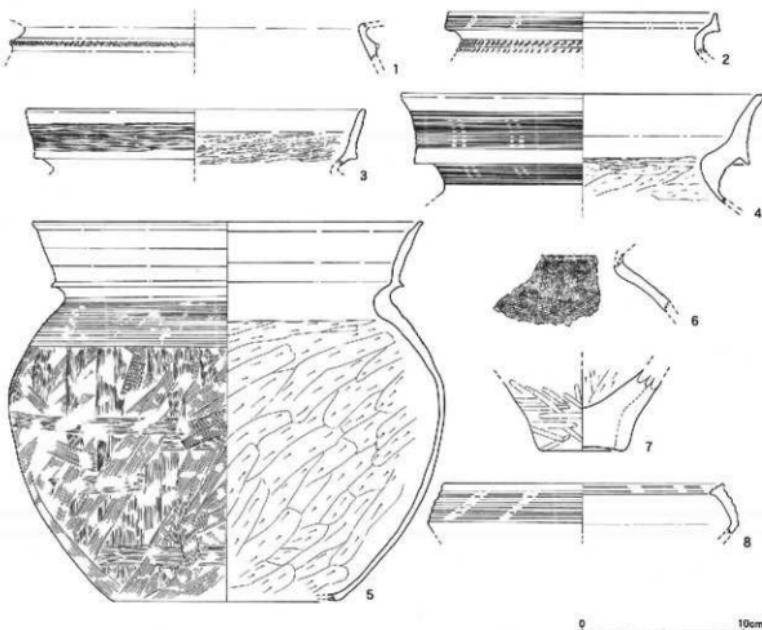
2~5は複合口縁の壺又は鉢であり様々な形態のものが出土している。2は口縁部に3条の凹線文を施し、頸部には沈線文の間に2段の刺突文が見られる。これは頸部以下内面にヘラケズリが見



第86図 西区S I O 6 実測図 (S = 1/60)



第87図 西区S106遺物出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6, 1/12)



第88図 西区S106出土遺物(1)実測図 (S = 1/3)

られないことからIV-2様式に位置付けられる。

3と4は上下に拡張された口縁部に9条~11条の平行沈線文が施された甕である。これらは2類に含まれる。

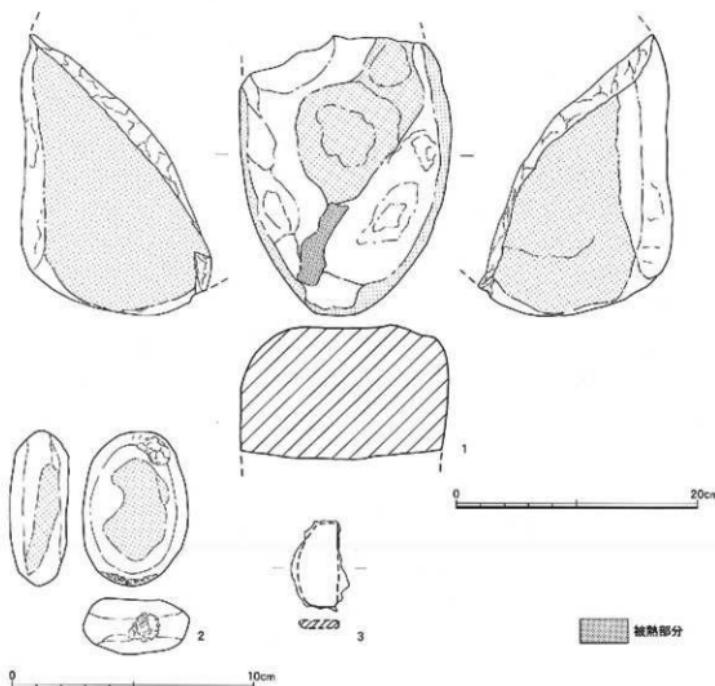
5は平底の鉢である。口縁端部が薄くなるシャープなもので外面の稜はやや下方に突出する。これは5類に位置付けられると思われる。

6は櫛描きの波状文が施されている甕の胴部片である。7は平底の底部であり外面にはヘラミガキが、内面にはヘラケズリが施されている。

8は口縁端部に3条の凹線文、側面に5条の凹線文が施されている高坏である。これはIV-2様式に位置付けられる。

出土石器(第89図1・2) 1は床面付近から出土した石皿・台石類である。破面部分以外の3面に磨面が認められ、表面は窪み光沢を持っている程使用が著しかったことが分かる。また被熱により赤褐色に変色している部分も見られ、さらに被熱によるものと思われる剥離が散見される。

2は覆土出土の小形の扁平な磨石・敲石である。表面と側面の2面に磨面が見られ、短辺側の側面には敲打痕が確認される。



第89図 西区S-106出土遺物(2)実測図(1はS=1/4、2・3はS=1/2)

出土鉄器（第88図3） 3は床面付近で出土した扁平な鉄器片である。X線透過写真で検討しているが種類については明らかにできなかった。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、遺構の切り合い関係からS I 0 5以前のものであることは確実である。出土遺物では床面付近からの良好な状況で遺物が出土していないことから困難な面もある。とりあえず覆土中から出土した土器で最も新しい特徴を持つ鉢（第88図5）を遺構の時期の目安とした場合には、IV類の時期になるものと考えられる。この時期は遺構の切り合い関係とも矛盾がなさうなので、住居跡の時期はIV類の弥生時代後期末頃の時期を想定できる。

(7) S I 0 7 (第80図)

住居跡の構造 住居跡はS I 0 5・0 6に後に切られており、コーナー部分と思われる部分が残存しているだけである。規模は南北1.5m以上、東西0.85m以上、床面までの深さは0.4mである。平面形は一部分だけ残っているものであることから、判断できないが隅丸方形になる可能性を考えることができる。床面からはピット等の付随する遺構は検出されなかった。

遺物出土状況（第82図） S I 0 7に伴うと考えられる遺物は遺構の遺存部分が狭いことから数は少なかった。

出土弥生土器（第90図） 出土している弥生土器は時期的にまとまっているものではなかった。

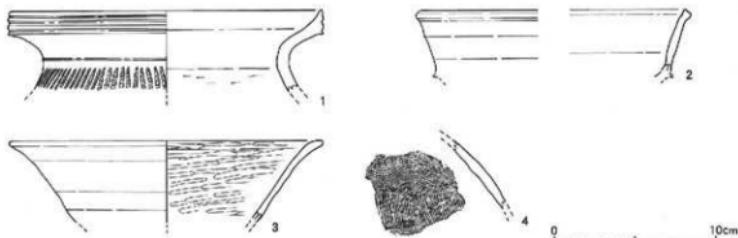
1は拡張された口縁部に3条の凹線文があり、頭部付近には櫛描きの刺突文が施されている壺である。内面頸部以下にヘラケズリが見られることから1類のものと思われる。

2は複合口縁の壺の口縁端部片である。口縁端部には面を持っており、S I 0 5～0 7の3棟の住居跡出土弥生土器の中では最も新しい特徴を持っている土器と考えられる。これは6類のものと思われる。

3は鼓形器台の受部片である。口縁部内面に丁寧な横方向のヘラミガキが見られる。

4は櫛描きの波状文が施された壺の脇部片である。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、遺構の切り合い関係からS I 0 5・0 6以前のものであると考えられる。出土遺物では床面付近からの良好な状況で遺物が出土していないことから困難な面もある。また覆土中から出土した土器も少なく判断材料に乏しい。このような状況であることからS I 0 5・0 6以前の時期、すなわちIV類の時期以前に位置づけられる。概ね弥生時代後期末頃と考えられようか。



第90図 西区S I 0 7出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

(8) S I 0 8 (第91図)

住居跡の構造 住居跡は調査区の南端標高274m付近で検出しておる、S I 0 3 の南側に接する場所に位置する。現状では南側が遺存していないことから、斜面を加工して平坦面を削り出した加工段状の遺構に見える。この遺構については竪穴住居跡と判断するには困難な面もあるが、ここでは便宜上竪穴住居跡として記述しておく。平面形は南側が失われていることから明確には分からぬが、現状では半円形のものである。規模は南北1.8m以上、東西3.8m程、床面までの深さは0.4mである。床面からはピット等の付随する遺構は検出しなかった。

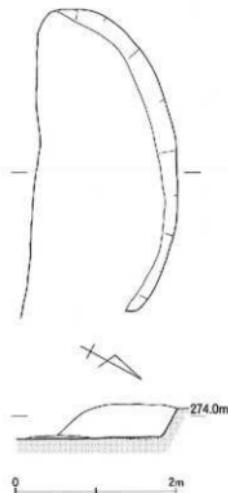
遺物出土状況 (第92図) 遺物は床面付近と覆土中の2つに分けて取り上げている。基本的に上方から流れ込んだ遺物が多いと思われる。

出土弥生土器 (第93図 1~9) 出土している弥生土器は様々な時期のものが出土している。

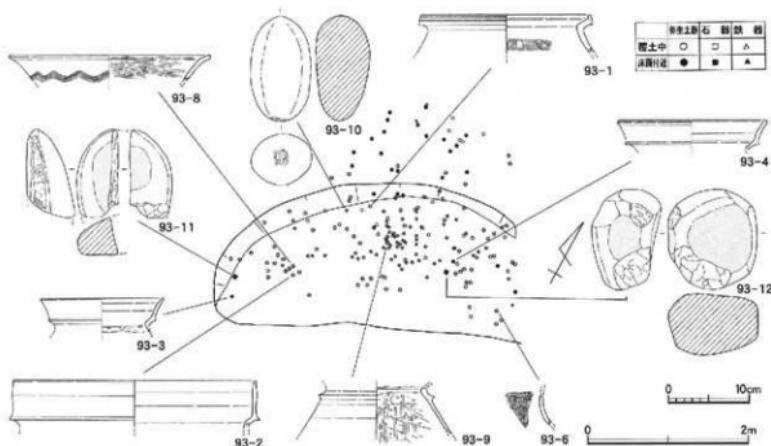
1は拡張された口縁部に2条の凹線文が施されている甕である。内面頸部以下にハケメが見られることからIV-2様式のものと考えられる。

2は大形の複合口縁の甕又は壺である。口縁端部はシャープで尖り気味で外面の稜は若干下方に突出する。これは4類のものと考えられる。

3は口縁端部が丸い複合口縁の甕であり外面の稜はやや下方に突出している。これは5類のものと考えられる。



第91図 西区 S I 0 8 実測図
(S = 1/60)



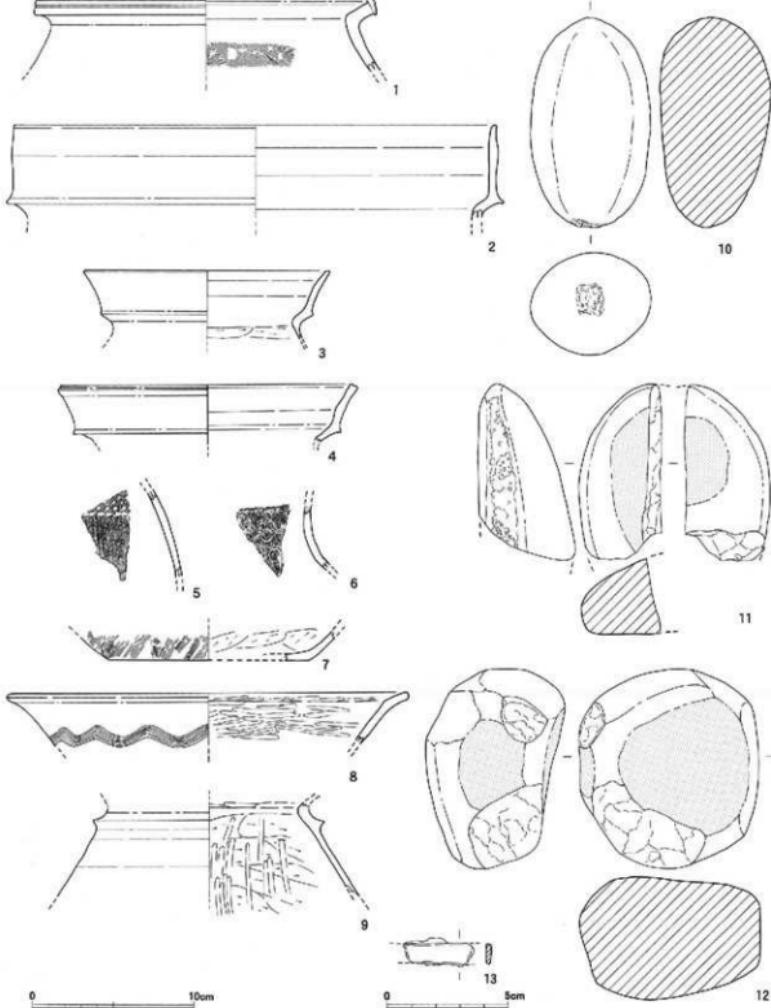
第92図 西区 S I 0 8 遺物出土状況実測図 (S = 1/60, 1/6)

4は口縁端部に面を持ちさらに沈線状に窪んでいる複合口縁の甕である。これは6類に位置づけられる。

5と6は文様が施された破片である。5は列点状に刺突文が施された甕の胴部片であり、6は竹管状工具で刺突されている。

7は平底の底部で、底径が大きいことから鉢の底部と思われる。

8と9は鼓形器台である。8は受部で外面に櫛描きの波状文が、内面に横方向のヘラミガキが施



第93図 西区S 108出土遺物実測図 (1~12はS = 1/3、13はS = 1/2)

される。9は台部で内面はヘラケズリの後に縦方向のヘラミガキが施される。

出土石器（第93図10～12） 固化した3点の石器は磨石・敲石類である。10は覆土中から出土した楕円形の石器で明瞭な磨面は認められないが、1面に敲打痕が確認される。

11は表面に磨面がそれぞれ認められ、側面には敲打痕が見られる石器である。これは床面付近から出土している。

12は厚みのある石器で表面と側面の2面に磨面が認められる。それぞれの磨面は使用によって若干産んでいる。

出土鉄器（第93図13） 覆土中より鉄器片が1点出土している。鉄器は細くて薄いもので刀子などの茎の可能性が考えられる破片である。

住居跡の時期 住居跡の構築・使用時期は、良好な状態での床面付近出土遺物が得られなかったことから判断が難しいが、最も新しい特徴を持った甕（第90図4）を判断材料にした場合ではV類の時期になると思われる。よって弥生時代後期末頃の時期を想定できようか。

2. 土坑

土坑は第1黒色土層中で1基と第1ハイカ層上面検出時に4基検出している。これらは不整な形状のものが多く、人為的に掘られているものと判断されるものは少ないと思われる。

（1）炭土坑（第94図）

土坑は調査区南端の標高276m付近で検出し、この土坑だけが第1黒色土層中から掘り込まれている。基本的に遺構は黒色土層中では検出が不可能に近いが、この土坑内には多量の炭化物が充填されていたことから検出が可能であった。形状は不整円形であり規模は長径0.97m、短径0.88m、深さ0.25mである。土坑内からは炭化物の他に小塊状の鉄滓が少しだけ出土している。

この土坑の時期は土器等が出土していないことから不明確である。ただし小塊状の鉄滓（鍛冶滓等）が出土していることから後述する鍛冶炉を伴う掘立柱建物跡に間連するものである可能性が考えられ、近世頃の製鉄関連遺構として位置づけることができるものかもしれない。

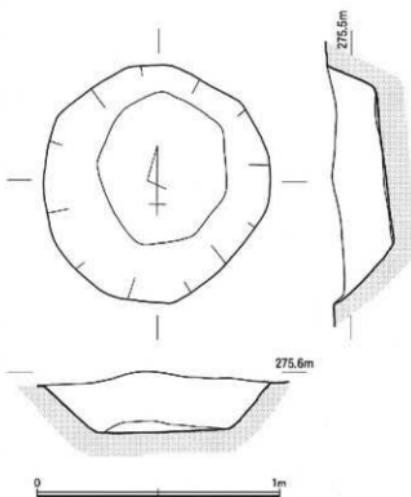
（2）SK01（第95図）

土坑は調査区中程の標高276m付近で検出している。検出面は第1ハイカ層上面で、形状は中程がやや幅が狭くなる不整長方形であり規模は長径1.18m、短径0.86m、深さ0.35mである。

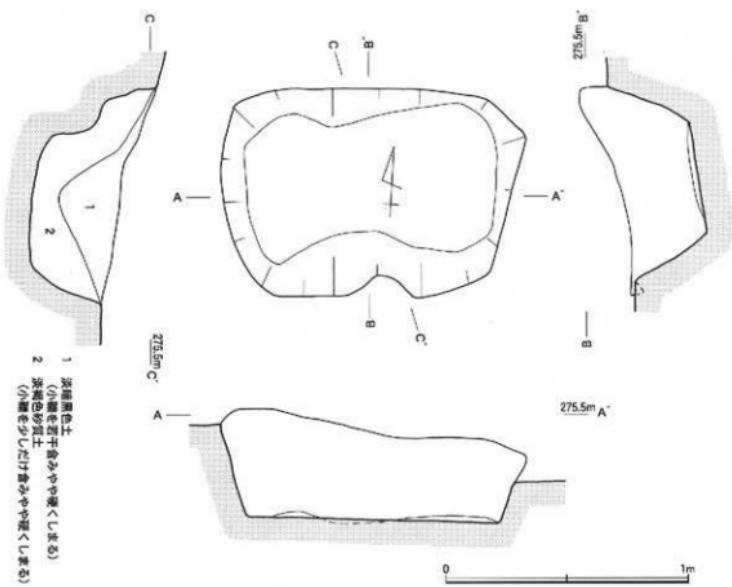
土坑内からは土器等が出土していないことから時期については不明である。

（3）SK02（第96図）

土坑は調査区中程の標高276m付近で



第94図 西区炭土坑実測図 (S = 1/20)



第95図 西区SKO 1実測図 ($S = 1/20$)

検出している。検出面は第1ハイカ層上面で、形状は不整な楕円形であり規模は長径1.7m、短径0.9m、深さ0.1mと浅い土坑である。

土坑内からは土器等が出土していないことから時期については不明である。

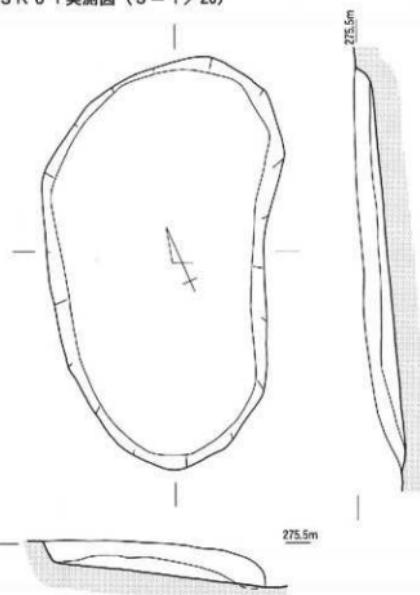
(4) SKO 3 (第97図)

土坑は調査区南西端の標高276m付近で検出している。検出面は第1ハイカ層上面で、その形状は途中で折れ曲がる「L」字状のものである。規模は幅が0.7m程で、東西2.05m、南北1.5m、深さ0.2m程である。

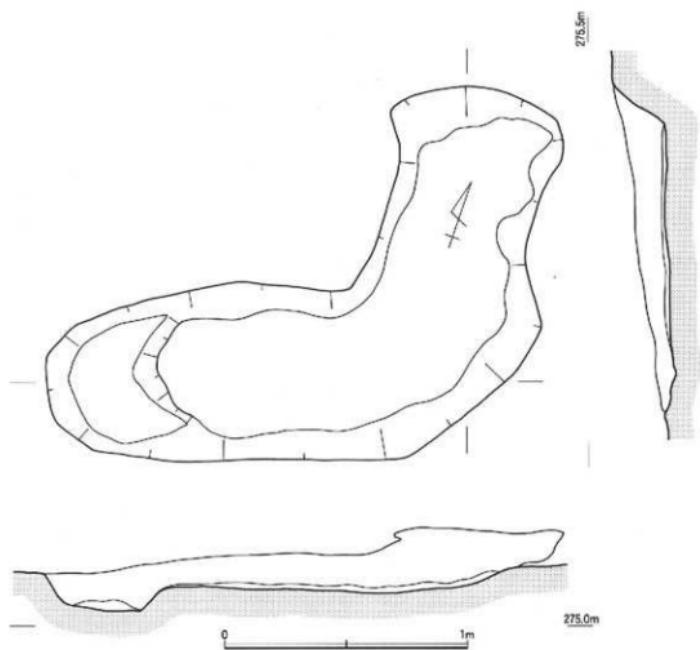
土坑内からは土器等が出土していないことから時期については不明である。

(5) SKO 4 (第98図)

土坑は調査区中程の標高276m付近で検出している。検出面は第1ハイカ層上面で、形状は不整形で規模は長径1.07m、短径1.02m、深さ0.12mである。

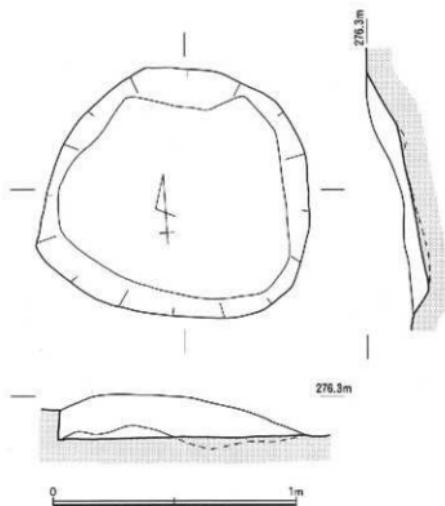


第96図 西区SKO 2実測図 ($S = 1/20$)



第97図 西区SK 03実測図 (S = 1/20)

土坑内からは土器等が出土して
いないことから時期については不
明である。



第98図 西区SK 04実測図 (S = 1/20)

3. 第1黑色土層出土遺物（第99図～114図）

第1黑色土層からは、弥生土器を中心には縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、金属器といった多様な遺物が出土している。以下出土遺物について記述する。

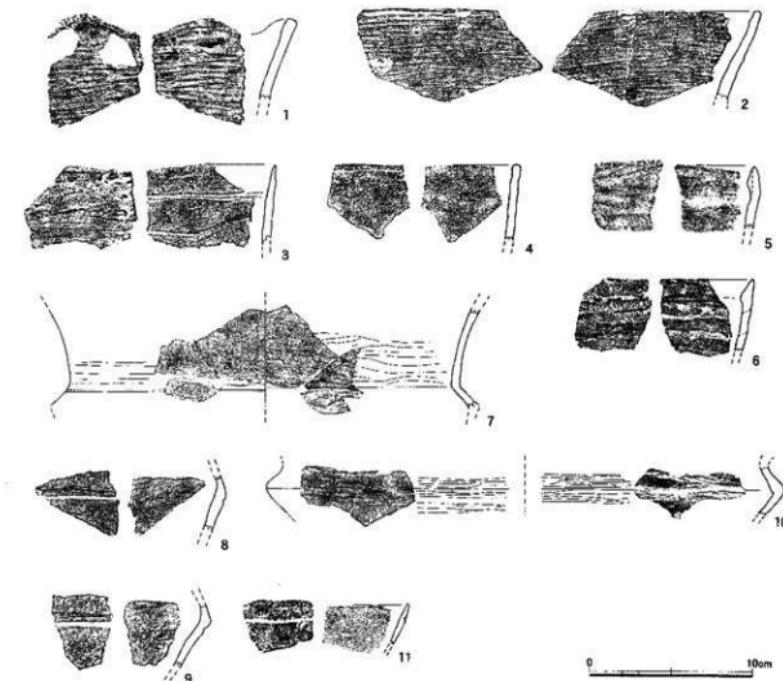
（1）縄文土器（第99図～100図）

第1黑色土層から出土している縄文土器は非常に限られたものであり、時期的には晩期に属するものが大部分である。

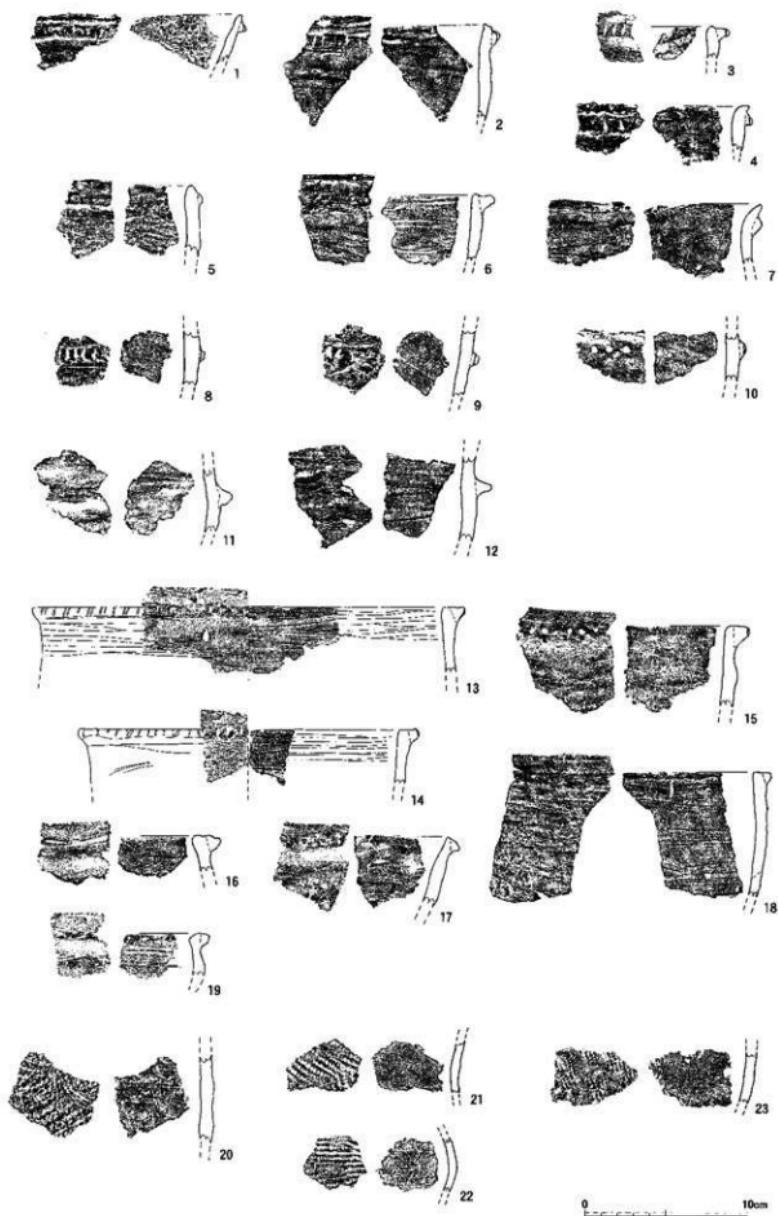
屈曲する頸部の無文粗製深鉢（第99図1・2） 1と2は表裏とも条痕が見られる無文の粗製深鉢である。1は口縁部が波状のものであり縄原式古段階に類するものと考えられ、晩期中葉頃に属すると思われる。

有文粗製深鉢（第99図3・4） 3と4は沈線が施されている粗製の深鉢である。3は口縁端部が尖り、内面に1条の沈線文が施されている。4は外面の口縁端部付近に1条の沈線文が施されている。これらの内で3は岩山1類にやや近い特色もあることから後期末～晩期初頭頃のものであろうか。

内面が肥厚する粗製深鉢（第99図5・6） 5と6は口縁端部の内面が肥厚する粗製の深鉢である。時期については不明確である。



第99図 西区第1黑色土層出土縄文土器（1）実測図（S=1/3）



第100図 西区第1黑色土層出土縄文土器（2）実測図（S = 1 / 3）

外反する口縁の無文精製浅鉢（第99図7） 7は長い外反する口縁部をもった浅鉢で内外面にミガキが見られる。これは谷尻式に類するとと思われる晩期中葉頃のものと考えられる。

屈曲部に沈線を有す精製浅鉢（第99図8・9） 8と9は屈曲部外面に1条の沈線文が施された浅鉢である。これらは外面にミガキが見られる。これらの時期は不明確であるが晩期頃のものと思われる。

屈曲部に沈線を持たない精製浅鉢（第99図10） 10は前述した8・9とは異なり屈曲部外面に沈線文が施されない浅鉢である。外面には丁寧なミガキが見られる。時期は不明確であるが晩期頃のものと思われる。

粗製浅鉢（第99図11） 11は口縁部外面に1条の沈線文が施されている粗製の浅鉢である。時期は不明確であるが晩期頃のものと思われる。

突帯文土器1（第100図1～7） 1～7は口縁端部からやや下がった位置の外面に突帯が貼り付けられている土器であり、口縁端部にはキザミ等のない単純なものである。1～4は突帯にキザミが施されているもので、5～7は突帯にキザミが無いものである。これらは晩期後葉のものと考えられる。

突帯文土器2（第100図8～12） 8～12は胴部に突帯が貼り付けられているものである。これらの破片の口縁部にも突帯が貼り付けられていると考えられるが、口縁部・胴部ともに突帯が貼り付けられている良好な資料は出土していない。ただし一次調査出土の標柵から類推すると、前述した突帯文土器1とした口縁部とセットになる可能性が考えられる。8と9は突帯にキザミが施され、10は竹管状工具によって刺穴が施されている。11と12はキザミ等持たないものである。

突帯文土器3（第100図13～19） 13～19は口縁端部に接するように突帯が貼り付けられている土器である。13と14は突帯にキザミが施され、15は竹管状工具によって刺穴が施されている。16～19はキザミ等が無いものである。これらは突帯文土器1としたものより新しい時期のものと思われる、晩期後葉頃に位置づけられる。

その他の縄文土器（第100図20～23） 20～23は本来第1黑色土層に伴わない土器の可能性があり、混在したものと考えられるものである。20は縄文地のもので半裁竹管状工具による連弧文が施されており、船元Ⅲ式に関連したものと思われる。21と22は縄文地の器底の薄い破片で、23は器壁の厚い破片である。

（2）弥生土器（第101図～105図）

第1黑色土層から出土している弥生土器は前期から後期まで全時期見られるが、大部分は検出した住居跡の時期と同一の後期に属するものである。

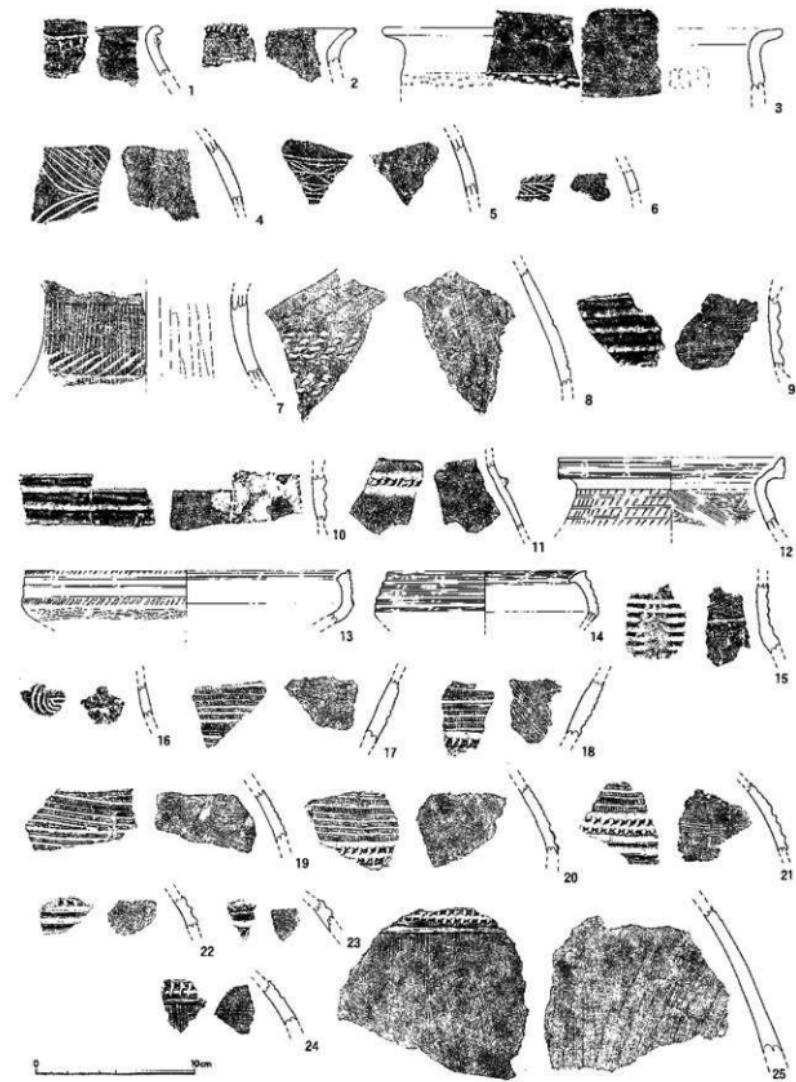
前期の土器（第101図1～6） 1～6は前期に属する土器である。1と2は壺の口縁部であるが、1は口縁部の屈曲部分にキザミの入った突帯が貼り付けられており突帯文土器との折衷型と考えられる土器である。3は刺突文が施された壺である。

4～6は文様が施された壺の胴部である。4は木葉文、5は貝殻による施文の方向を違えた有輪羽状文、6も貝殻施文による有輪羽状文が付されている。

中期の土器（第101図7～25） 7～25は中期に属する土器である。7～10は壺の頸部や胴部の破片であり、7は刺突文が、8はヘラ焼き刺突文の下に櫛焼き刺突文が施されている。9と10は凹線文が施されている。

11と12は甕である。11は縫の可能性もあるものでキザミの入った突帯が付くもので、12は頸部に沈線文で区画された間に刺突文が入るもので、拡張された口縁部には2条の凹線文が入る。

13～15は高坏である。13は口縁部に2条の凹線文と刺突文があり、側面にも2条の凹線文と刺突



第101図 西区第1黑色土層出土弥生土器（1）実測図（S=1/3）

文が入る。14は口縁部に3条の凹線文と側面に5条の凹線文が入る。13と14はIV-2様式に位置付けられるものと考えられる。15は高坏の脚部と思われ6条の凹線文が入る。

16~25は大形の壺の破片である。これらは一次調査で出土している流冰文が施された特殊な壺(『一次調査報告書』第259図)と同一のものと推測される。同一個体であるかは明らかにできなかつたが、胎土が茶褐色から暗褐色で焼成も良好なものであることから同一個体の可能性が高い。

16は唯一流冰文が施された頸部の破片である。17と18は頸部の破片と考えていたが傾きが誤っている可能性もあり、いずれも数条の沈線文が施される。19~21は数条の沈線文が施された肩部の破片であり、20と21には四線文とキザミも施されている。22~25は四線文とキザミが施されている破片であり、24と25は1条の凹線文の下方は無文で縱方向のハケメが見られる。

後期の土器 (第102図~第104図) 第102図~104図は後期に属する上器である。第1黒色土層ではこの後期に属する上器が圧倒的に多い。以下壺、壺、鼓形器台、高坏、低脚坏の順に記述する。

後期の壺 (第102図・第103図1~7, 11) 後期の壺はその口縁部の特徴から1~7類の7つに分類して整理している。

1類 (第102図1~7) は拡張された口縁部に3~4条の凹線文が施されるものである。これらは口縁部の拡張の幅でaとbの2つに細分され、aの拡張の幅が狭い一群(1, 2)とbの下方にも拡張され幅が広い一群(3~7)がある。

2類 (第102図8, 9) はさらに口縁部が拡張され複合口縁となっているもので、口縁部には平行沈線文が10条前後施されている。

3類 (第102図10~13) は2類より口縁部が拡張され、口縁部にはより密な平行沈線文が15条以上施されている。また12はやや粗雑な作りで平行沈線文が施されていないが口縁部の形状からこの分類に入れており、13も同様に含めたが鉢と言われているものである。

4類 (第103図1, 2) は口縁部に沈線文が施されずヨコナデのもので、口縁部の基部が厚く頸部の屈曲がシャープな一群である。

5類 (第103図3, 4) は口縁部がヨコナデ仕上げのものである。そして口縁部の基部が強いヨコナデによって器壁が薄く頸部の屈曲が1類より緩やかなものである。

6類 (第103図5~7) は口縁部がヨコナデ仕上げで口縁端部に面を持つている一群である。

7類 (第103図11) は口縁部がヨコナデ仕上げで、口縁端部に面を持ちさらに内側に若干折れる一群である。この一群は全体的に器壁が厚いものである。

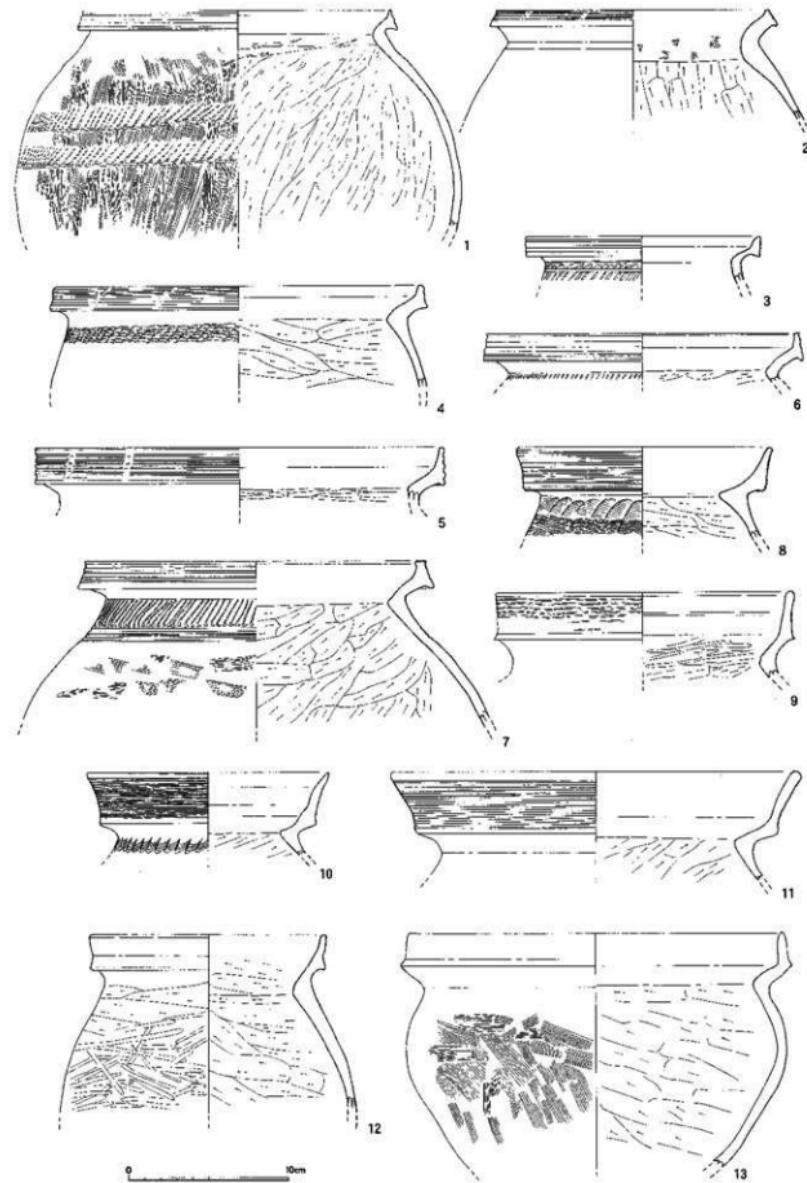
後期の壺 (第103図8~10) 後期の壺は壺の1~7類の7つの分類をそのまま援用して整理している。よってここでは各分類ごとに記述することは省略し、主なものについて掲載し記述する。

8と9は口縁端部に面を持ち壺で言う6類に分類したものである。9には頸部に竹管状工具による刺突文が施される。

10は口縁部が大きく開く複合口縁の壺であり、口縁端部には面を持つ。この口縁形態の壺は在地の壺とは異なるものであり、畿内等の二重口縁壺の影響が認められるものである。

後期の注口土器・文様 (第104図1~5) 1と2は注口土器である。1は肩部に平行沈線文と貝殻刺突文が施され、口縁部は壺で言う6類に分類される。2は注口部分である。

第104図3~5は文様のある破片である。3は密な刺突文の上に2条の沈線文が施され、4は網目文が施された珍しい文様の土器である。5は貝殻による斜行刺突文と連弧文が施されている。



第102図 西区第1黑色土層出土弥生土器(2)実測図($S = 1/3$)